

そして彼女は死をささやいた

帆影さんはライトノベルを合理的に読みすぎる 補巻

玩具堂

CONTENTS

プロローグ. 007

第四話. 色々殺し 017

閑話3. 070

第五話. ロボ殺し 087

閑話4. 157

第六話. 作者殺し 169

エピローグ. 253



■帆影さんはライトノベルを合理的に読みすぎる

Story

オタク嫌いの妹・映が、ライトノベルをめぐって親友とケンカをした。

「あれって、何が面白いの？」

身近なおタクとして相談を受けた兄・新巻天太は、自分の所属する文芸部へ映を連れて行く。

そこにいたのはもう一人の文芸部員であり、天太と付き合い始めたばかりの帆影歩。

ライトノベルにまつわる彼女のぶっ飛んだ言動に、映は翻弄される――

「おっばいこそが人類の本質と言っても過言ではありません」

「私情でハーレムを崩壊させる行為は暗君の所行だということです」

紆余曲折の末、天太と帆影の尽力もあって映と親友は和解する。

しかし映は、なんだかんだ大切に思っている兄を帆影のような変人に任せるのを良しとせず、宣戦布告に及ぶのだった。

帆影 歩 (ほかげ あゆむ)

本作のヒロイン。文芸部所属の2年生。表情はとほしいが、その口から放たれる珍説極論は強烈。

好きなSF小説はハリイ・ベイツの「主人への告別」。



主な登場人物



新巻 天太 (あらまき あまた)

主人公。文芸部に所属する高校2年生。
引っ込み思案な思春期オタク。
ギャルゲーはやらないがヒロインを攻略する要素のあるRPGは好き。



新巻 映 (あらまき はゆ)

天太の妹。高校1年生。
カンペキ優等生の仮面をかぶったワガママ娘。
兄の部屋のどこに何があるのか、天太本人より詳しい。



伊井坂 隣 (いいさかりん)

天太の同級生。漫画研究会だが文芸部に
いりびたる。
天地神明に恥じることなきオープンオタク。
たびたびウザい。



村瀬 果穂 (むらせ かほ)

映の親友。他校の高校1年生。
ネット小説からの商業デビューを控える。
天太と帆影が付き合っていることは知らない。

デイヴィッドは窓の外を見つめていた。「デイ、ぼくがなに考えてるか知ってる？ ホンモノとホンモノでないものをどうやってくべつするの？」

クマはいくつかの選択肢をあれこれ探った。「ホンモノはいいものだ」

『『スーパートイズ』ブライアン・オールデイス 中侯真知子訳

竹書房文庫 二〇〇一年）

プロローグ

静かにすすったコーヒーマシンの苦みを舌の上で転がし、香味を含んだ蒸気を口全体で楽しむ。夕食と入浴を終え、快い眠気に鈍^{にぶ}っていた頭脳がすつと覚醒するのを感じながら、僕は原稿に向き直った。原稿と言ってもパソコンのディスプレイに表示されたワープロソフトの画面だ。

筆を執るわけでもない。しかし、僕はこれから執筆する。筆に心を込める想いで、書くのだ。

カタツ……とキートップのNの印字がかすれたキーボードを打ち出す。ノートに書き留めていた着想を元に、心へ浮かぶままに文章を展開させていく。

それはラブレターを書く行為にも似ていたかもしれない。僕の書こうとしているのは小説だったけれど、最初に読んでもらう人の決まっている小説だった。今の僕にとって一番大切な彼女に読んでもらうための、文^{ふみ}。

彼女のことを思う。胸がときめく。その心音のリズムで頭と指をつなぐ滑車を回し、物

語を紡いでいく。

そうして過ぎる、初夏の夜の穏やかな時間。果たして。

——部屋が、キレイになった。

掃はかるのである。

とにかく、むやみに。

掃除が、掃るのである。

書こう書こう、書かねば書かねば——そう思うほどに視線がさまよい、床に積み重ねられた雑誌や、棚のフィギュアに積もりつつあるホコリが気になって手が止まり、ふらふらと半ば夢遊病者のように部屋の掃除を始めてしまう。

そうして、原稿に向かい始めてから数時間——部屋がすっかり、キレイになった。

最初はちよつと雑誌をまとめるだけのつもりだったのに、なまじ有益な作業なものだから止め時を見失ってしまう。結果、真っ白いワープロ画面を文字で汚すはずが、部屋が整頓やされていた。

これではいけない。

少し前、妹とその親友にまつわるちょっとした騒動の後、僕は彼女に約束をした。彼女の名は帆影歩^{ほかげあゆむ}。高校で僕と同じ文芸部に所属する、少し浮き世離れたような女の子だ。

一応、僕の恋人^{カズヨ}……ということになっている。

ということになっている、というのは、当事者の僕にもまいち確信がないからだ。なにせ——自分の好きな人になん다가——帆影は相当に変わっている。

いわく——「萌え」や「可愛い」という現象は文化の源だった。

いわく——人間とは、ほぼおっぱいで出来ている。

いわく——私情で後宮^{ハイレム}を崩壊させるような行為は暗君^{バカこの}の所行である。

表情の薄い、眠たいような目をして、そんな突拍子もない仮説を滔々と披露する。普通の高校生より広く雑多な知識があるのはもちろん、思考の回路がややこしくこんがらがっているのだろう。

そんな彼女で、そんなところも好いところなんだけど。

そういう独特な思考回路の帆影だから、僕の告白にはOKしてくれたけれど、一般的な

意味での恋人関係を築けているかは自信がない。

間違いないのは、最近の僕が彼女のことばかり考えているってことだ。それと、帆影歩は読書と入浴をなにより愛してるってことだ。

だから僕は、彼女に読んでもらうと約束した作品を仕上げなければならない。なんとかして、仕上げたい。

——書き上げた物を読む帆影の顔を想像しながら、僕は改めてパソコンに向き直った。アイディアはあるんだ。後はそれを文章のリズムに流し込むだけ。僕はキーボードに乗せた十指の関節を蜘蛛のように立ち上がらせ——

——本棚の本が、著者順に並び替えられた。

——スマホの使っていないアプリが、すっぱり消えた。

——買ったまま忘れてたコンセントキャップが、部屋中のコンセント口にはまった。

.....

だ、ダメだ………書かなきゃと思えば思うほど、いつもは後回しにして気にもしない生活アメニティが充実していく……これじゃ時間を持て余した有閑主夫じゃないか。

書く、ってこんなに大変なことだったのか……世の作家さんはどういう脳の構造をしているのだろう。何万字もキーボードを打っている途中に掃除をしたくならないのだろうか？ 音楽プレイヤーのアプリを起動して、「僕の考えたオシヤレな再生リスト」を作りたいくなったりしないのだろうか？

せっかく一念発起したというのに、初手から挫折してしまった。

今さら「やっぱり書けなかった」と告げたら、帆影はがっかりするのだろうか。それも、いつも通り淡白に「そうですか」で終わるのだろうか……

自分の文才のなさへの失望が、考えを悪い方へ悪い方へ墮としていく。

「……はあ………」

我知らず吐き出した溜息に反動でもあったかのように仰け反って、背もたれを支えに天井を見上げる。古びた蛍光灯の微かな明滅に詩的な物寂しさを感じるのは、心境のなせるわざだろうか――

そんな時だ。

出し抜けに、ドアが開かれた。

ノックの一つもなく僕の部屋に入ってくるような狼藉者は、この新巻家あらまきには一人しかいない。ためらいもなくすたすたと入ってきて、ぽかんとしている僕の顔をずっときき込んでくる慎み知らずは一人しかいない。

つい最近、自分の親友とライトノベルにまつわる相談事を持ってきた記憶も新しい、我が妹だ。

「おい映はゆ……いつも言ってるだろ。入ってくる時はノックくらい——」

言いかけて、言葉に詰まる。らしくもなく、妹の目には涙が溜まっていた。

寝る前なのか髪を下ろして、外出時のポニーテールに比べるといくらかは大人っぽく見える。初夏の今、定番の部屋着であるタンクトップとショートパンツは寝間着も兼ねていて、惜しげもなくさらされた手足が静かな夜気の中で燦然と映えていた。

だが、そんないかにも健康的な四肢は何故かふるふる震え、どこかしら猫を思わせる眼まなこに溜まった水滴を揺らしている。

……なんだよ。

「まさか……また果穂かほちゃんとかんかしたのか？」

直近の落ち込みの原因となった親友の名を出してみるが、映は答えず、ただぶんぶんとして首を横へ振った。

まだ映が小さな頃、泣いていると上手くしゃべれなかったことを思い出す。しゃくり上げるばかりでなく、胸が詰まってしまつて声が出せないらしい妹を前にして、どうしてやればいいのか解らず困り果てた記憶がいくつもあつた。

こうなるとまあ、三つ子の魂なんとやらで、放つてもおけない。

「とりあえず座れよ」

よほどショックなことがあつたのか、いつもは生意気三昧さんまいの映が素直に従つて、僕のベツドへ腰を落とした。僕は椅子を動かして、妹の前に座り直す。それから腰を屈めて目線を合わせ、訊きく。

「で……なにがあつたんだ？」

まさか失恋とかだろうか。それだったら……力になれないかもしれない。

そんな不安が心をよぎつたが、映の口から出てきたのは意外な名前だった。

「……今日さ、学校の帰り道で、伊井坂先輩いいさかに会つたんだ」

伊井坂隣りんは僕の同級生で、リアルで見るのは珍しいツイントールの髪型と眼鏡がトレードマークの女子だ。オーブんなオタクで漫画研究会に所属し、部室が隣同士なこともあつて僕や帆影と話す機会も多い。

映は先日来、暇な放課後は文芸部の部室に遊びに来る。伊井坂ともだいぶ親しくなつた

ようだ。オタクを毛嫌いしている映と伊井坂がコミュニケーションを築けたのは、ひとえに伊井坂のポジティブで物怖じしないキャラ故ゆえだろう。

伊井坂の輝度の高い笑顔を思い浮かべながら、目顔で先を促す。映は僕から視線を外して、ぼそぼそ話を続けた。

「それで、今オススメのラノベを持つてるから貸してあげるよ、って本を押し付けられたの……初めて見る背表紙のやつ」

映が知らないレーベルだったのだろう。その本の内容に、なにか衝撃を受けたということだろうか。インパクト重視で過剰にグロイ描写とかする作品も多いみたいだしな。

「……どんな本だったんだ？」

訊くと、妹の中でなにかが込み上げたらしかった。肩をすくめてうつむき、ぎゅつと目を閉じる。

……こんなに弱った映の姿は久しぶりに見る。まるで、なにか悪いことをして、叱られるのを恐れる幼児のようだ。

いつもは小憎たらしい妹だが、今日は優しくしてやろう。そんな風に思いながら待っていると、映はかすれた声で恐怖の理由を語った。

第四話

色
々
殺
し

校舎の壁の厚さでは、ドンとは鳴らなかったが。

僕は伊井坂隣を文芸部室の壁際に追い詰めて、彼女の頭の横に手を突いていた。

「……………どしたのシヤケ先生……………？」

僕より一〇センチほど背の低い伊井坂は、至近距離で見下ろされ、さすがに戸惑った声を出した。いかに行き過ぎて陽気な彼女といえど、この体勢で平気な顔はできないようだ

——ちなみにシヤケ先生というのは伊井坂が（勝手に）僕へ付けたあだ名だ——

放課後、ちよつと話があると言って伊井坂を文芸部室に連れてきた。授業が終わってすぐのことなので、まだ帆影ほかげも来ていない。

僕は据わった視線を斜め下の女子に落とした。窓から差し込む初夏の日差しが、伊井坂の小洒落た眼鏡の中でたつぷりとした光を揺らめかせている。

「……………あの……………？」

無言で見つめ続けると、伊井坂は困惑を深めたようだった。窓を開けたばかりの蒸し暑さも手伝ってか、額に汗が浮き始めている。

落ち着かない視線が、僕の顔と、壁に置かれた手を往復して。

さらに数秒の沈黙の後、伊井坂がなにか言いかけるタイミングにかぶせて、僕は口を開いた。

「判らないか？」

「……うん……」

「今朝……映は洗面台に置いてあったローション（父さんのひげそり用）を見て悲鳴を上げかけて、それから汚らわしい物を見る目で視界の外へどかしたんだ」

伊井坂はすぐさま目をそらしたりはしなかった。むしろ、ピンで留めたように瞳孔の動きを固めた。

ただ、肩を微かに震わせ始めただけだ。そして汗がさらに、さらに、にじむ。

僕は繰り返した。

「判らないか？」

「な、なんでだろうね……？ まあ、ハユユンもお年頃だから——」

『英雄たちが一晩中 男殺し粘魔之地獄』

映から回収した文庫本をポケットから取り出し、書名を告げると、今度こそ伊井坂は眼を揺らした。半開きにした唇も、落ち着かない吐息とともに震えだす。

「な、なんで……なんでシャケ先生がそれを……っ!？」

「昨日、お前が映に貸したこの本。僕もちよつと読ませてもらったよ」

「ふっ……？ 見せたのハユン？ ああいうの、兄上に見せるモンなの!？」

一人っ子らしい伊井坂は、そこにシヨックを受けたようだった。まるで度し難いブラコンの話でも聞かされたかのような驚きようだ。

それはともかく、

「いかがわしい物だつて認識はあつたんだな」

「いや……ちよおつと表現が過激でヌルヌルしてるだけで……純愛、じゃよ？ 年齢制限もないし……純愛、じゃよ？」

「裸に白衣を羽織つた美少年を、羊の骨と猫じゃらしを構えたスライムマン伯爵が一晩中追いかけて続ける『純愛』はレベルが高すぎるんだよッ！」

「じゅ、純愛にレベルもないじゃろ……」

あと、裸じゃなくてパンツははいてる……と、この期に及んで——目をそらしながらも——言い訳する伊井坂に、僕は辛抱強く説いて聞かせた。

「たとえばだ……初めてスキーをする初心者が、いきなりえげつない斜度の上級コースに挑んだら、どうなる？」

「……………」

「大怪我だよな」

「……………」

「初めて登山する素人が、ろくな備えもせず冬の八甲田山に登ろうとしたら、どうなる？」

「……………うう……………」

「死ぬよな」

伊井坂が理解しているのを確認して、僕は息を吸い——声にして吐き出した。

「——お前はうちの妹に、そういうことをしたんだよっ！」

至近距離で怒鳴られた伊井坂は「ひっ！」と身を縮ませて、それからいやいやとするように頭を左右へ振った。

「だって——だって、そんな……死ぬは言い過ぎじゃないかね!？」

僕は紅潮する伊井坂の頬に文庫本の角をぐりぐりと押し付け、断じた。

「唐辛子と軟膏なんこうを自在に使いこなして『お前のダンジョンはぬるすぎるぜ』がキメセリフのスライムマン伯爵は、心得のない人間には危険極まりない断崖絶壁なんだよ！

映はこれを読んで泣き出したんだぞっ！」

「うっ……………く……………」

伊井坂は苦渋にうめき、頬に押し付けられた文庫に潤うるんだ目を落とした。

「本当は……本当は、解つてた……これが一般市民の考える幸福のカタチとはちよつと違うんじゃないか、つて……でも、それが人を泣かせることになるなんて……」

あああ、罪……これが、罪………」

「じゃあ」

その罪の本の背表紙で伊井坂の頬のラインをなぞりながら、僕は伊井坂にささやく。

「映に言うべきこと、解るよな」

「………わっ………わたっ………」

うつむいて言いよどむ伊井坂。その顎を文庫で押し上げると、その拍子に少し眼鏡がずれた。

「……ワタ、シは、可愛いハユユンに、ちよつと……カッコヨすぎるフレグランスを、嗅がせてしまいました……」

「リリカルすぎて誠意に欠けるっ！ やり直し！」

「うううっ………なに？ 今日のシヤケ先生怖い……」

……じゃあ、ええと………わたくしめは、恥ずかしい欲望丸出しのドギツクエキセントリックなどゆつろどゆつろ粘性エロスな品物で純真な御令妹のお心を脅かしてしまい………申し訳ありません………でし………た」

僕は、よし……とうなずいて、近付けていた顔を引いた。微振動する瞳を僕の顔と足下の間で往復させながら、化粧つ気のない唇を擦り合わせる伊井坂は、心から懺悔ざんげしているように見えた。

「映にちゃんと謝って、もう二度と変な本読ませるなよ」

「……それは………解ったけども——」

僕が表情を緩めたからか、大雨に打たれてぐったりした猫のような顔をしていた伊井坂も少しは落ち着いたようだった。

両手で眼鏡の位置を据え直しながら、上目遣いに訊いてくる。

「いいのかい？」

「？ なにが？」

「いや、この体勢は良くないんじゃないかと思ってる」

すっ、と横へスライドした伊井坂の視線を追ってみれば——いつの間にやってきたのか、帆影の静かな目と映の軽蔑したような視線に見返された……

「ホンつつつとにごめん、ハユエン！」

新刊があんまり面白かったから、感想を話し合う仲間が欲しかったんじやよ……」
 僕と帆影、映が並んで卓に着き、対面に座った伊井坂がテーブルに額を擦り付けて謝っていた。

あの後、トンプソン機関銃もかくやの早口でなされた僕の釈明を、帆影はどほんとした無表情で聞いて、それから「はあ」と、やはり素っ気なくうなずいた。

怒っているから無愛想になっている……のだったら解りやすいのだが、帆影はいつもこんな感じの女の子だ。活発で感情表現の激しい映とは正反対の性格をしている。

ふわりと柔らかく、少しくせの付いた髪。うつむくと前髪に隠れる眠たげな目。顔立ちは整っていると思うけど、人によっては存在感に欠けると言うかもしれない。物腰がスロースローストで静かなせいか、周囲の気配に沈み込むような印象があった。

体付きの方も映とは対照的で、ほっそり伸びやかな映とは逆に、起伏の大きいプロポーションをしている。

それが僕の恋人、帆影カフシヨ歩あゆむだ。

二人だけの文芸部の片割れ。彼女はいつも通り僕の右隣に座り、伊井坂が映に謝り倒すのをぼけっとして聞いていた。僕が伊井坂に迫っていた——ように見えただろう——ことに怒っている様子はない。

事情を解ってくれたから……ならいいのだが、そもそも気にならないのだとしたら少し寂しい。我ながら、身勝手すぎる感情を持て余す。

……いや、今は帆影のことより、映だ。

昨夜は初めて歌を聴いた戦鬨種族の如くカルチャーショックを受け、僕に『英雄たちが一晩中 男殺し粘魔之地獄』を預けた後、半泣きのまま寝込んでしまった妹。

今朝は平気な顔をして、朝食も昨日の残り物の焼き鳥（タレ）と生卵を御飯茶碗にぶち込み、適当にかき混ぜて平らげていた。朝からダイエツトなんてクソ食らえとでも言いたげな健啖ぶりだが、あれで太った姿を見たことがないのだから、たぶん野犬のような本性を隠して優等生でい続けるのにカロリーを消費しているのだろう。

今も、頭を下げ続ける伊井坂へ遠慮がちに手を振っていた。

「い、いいんですよ伊井坂先輩。ああいう内容だって知らなかったから、ちょっと驚いちゃっただけで……あと、そのハユウンて言うのやめて下さい」

最後の一節だけ声がかミソリめいていたが、ともかくも伊井坂は顔を上げた。僕の説教が効いたのか、眉をハの字にして映の機嫌をうかがうような、しおらしい顔だ。

「でもハユウン、あの美に耽る華麗な描写の数々に魂の在り方を翻弄されて泣いちゃったってシヤケ先生が……」

がッ！

テーブルの下で僕の足が思いつきり踏まれた。言うまでもなく、左隣の妹の仕業だ。自分の弱みを外の人間に知られるのがそんなに我慢ならないのか。

反射的に映を見やるが、こちらには視線もくれず善良そうに苦笑いしている。

「そんな、泣いてなんかなくてー。なんで、そんなウソを言ったりしたんでしょうね、この兄あには」

困ったように言いながらも僕の足の甲を踏みにじってきている。……なんでこんなにリアルタイム二重人格みたいな妹に育ってしまったんだろう。

伊井坂はまだ、この妹の凶暴な本性を知らない。僕への私刑には全く気付かず、映ゆゑに赦しを請い続けた。

「あたしもね、これがニツチな趣味だというのは解ってるんだよ……でも、純粋にラノベを学びたいと言ってくれたハユユンなら、もしかしたら理解してくれるんじゃないかって……そんな、はかな儚い希望にすがってしまったんだよ」

「え？ ……あー……………あぁ……………」

そういえば、そんな設定だったっけ——と、続ける映の声が聞こえた気がした。

もともと、この妹はオタク文化全般を激しく毛嫌いしている。そんな映が文芸部室を訪

れるようになったのは、ライトノベルを書いてネットで発表していた親友を理解するためだった。

最初に相談を受けたのは僕だが、ライトノベルにはあまり詳しくなかったので、隣の漫画研究会に所属しライトノベルも読み込んでいる伊井坂に助言を求めたのだ。

そんな行きがかりから、伊井坂は映が本当はオタク嫌いであることは知らず、ただ純粋にライトノベルに関心のあるビギナーオタクだと思っ込んでいた。

問題となった映とその親友とのトラブルは、なんやかやあつて解決した。なのに映は、数日に一度は文芸部室に顔を見せる。それはたぶん惰性で、まあ要するに暇なのだろう。

あるいは、もしかすると、僕と帆影を二人きりにしたくないのかもしれない。相性の問題か、映は帆影を苦手にしているようだから。

押し強いオタクである伊井坂も映の苦手なタイプではあるが、自分の嘘を疑いもせず信じている先輩を冷たくあしらえる妹でもなかった。

遠慮がちに、こちらこそ……と頭を下げ、卓上の『英雄たちが一晩中』を見やる。

「ごめんなさい先輩、わたしにはこれ、ちよつと合わなかったかも……」

お断りを入れつつも相手に悪印象を与えない、如才のない困り顔だった。中学時代はこのはにかみ顔で全校生徒をだまくらかし、圧倒的人気で二年連続生徒会長を務めたのだ。

家での雑な生活ぶりを知っていると、未来の詐欺師のようにしか見えないが。

「う〜ム……ハユンはBL嫌いかのう」

「いえ……同性愛はともかく、ええと……内容が前衛的すぎて……」

ボーイズラブ

B Lと同性愛は同一視していいのだろうか？ ちよつとニュアンスが違う気もするが、僕も詳しくないのでよく解らない。

いずれにしても、あの本の問題はBLだからというものじゃないだろう。具体的に言うと、猫じゃらしのローション・フォンデュにまさかあんな使い方が……——と、テーブルの上を眺めて、ふと気付く。

今回の罪体である文庫本が消えていた。

反射的に部室中へ目をさまよわせるとすぐに見つかった。帆影が読み始めていたのだ。——って！

「ダメだ帆影！ そんな物を拾って読んじゃ！」

「そうだよ先輩！ 早くペツペして！」

僕に続いて映まで椅子を蹴って帆影を制止する。普段静かな部室に響き渡った大声に、本に目を落としていた帆影はびくつと肩を跳ねさせた。超然としているようで、こういう仕草は小動物めいている。

「うう……兄妹そろって、あたしの愛書を毒キノコかなにかみたい……」

無念げに両の拳を震わせる伊井坂はさておき、ゆっくりと僕の方を向いた帆影は、不思議そうに小首を傾げた。

「そんなに問題のある本なんですか？」

帆影の物言いは、一応彼氏であるところの僕に対しても丁寧だ。と言うか、誰に対しても敬語で話す。相手によって態度を変えるのが面倒、という理由だという。

そんなミもフタもないところがむしろ落ち着くくらいに、僕は帆影歩に馴らされてしまっている。

僕と映が返答に困っている間に、伊井坂が目を輝かせてテーブルへ乗り出した。

「帆影ちゃんっ！もしかしてBL……男子同士の愛に興味があるのかい!？」

「はあ……『雨月物語』の青頭巾の話などは興味深いと思います」

帆影はとりあえず文庫本を閉じながら、ほんの微か、熱を帯びたように答えた。他の人間には判らない程度の本当に小さな高揚なのだが、高校入学から一年以上も帆影を見続けてきた僕には判る。

でもって、たぶん、この場合の「興味」は伊井坂の言う「興味」とはだいぶ意味が違う。

いや、雨月物語とか読んだことないけど。伊井坂も知らないだろう。

しかし伊井坂が詳しく話を聞こうとする前に、テーブルに頬杖を突いた映が挑むような声を出した。

「それはちよつと意外ですね。帆影先輩のことだから、

『子供の産まれない恋愛なんて無意味です』

とか、ロボットみたいなこと言い出すかと思いましたがよ

「おい映……」

やはりと言うべきか、帆影に対する映の態度はむやみに攻撃的だ。果穂ちゃん——映の親友だ——の件では帆影も解決に協力してくれたというのに、恩を仇で返す気か。

映は咎める僕の声をいつも通りに無視した。僕を挟んで座る帆影の方へ、ジトツと細めた半眼を向けている。

帆影は帆影で応えない。映の言葉を生真面目に受け止め、ふるふると首を横に振った。

「そんなことは言いません。むしろ同性同士の恋愛は、人類にとつとても合理的な習慣となるかもしれません」

——まただ。

また帆影の発想の飛躍が始まった。

何度かその突飛な思考を経験した映は畏れるような、呆れるような顔をしたが、僕は先

を促す^{うなが}ように帆影を見つめた。

なぜなら、こういう風に考えを膨らませて語る時、帆影はとても活き活き^いして見えるからだ。

「つまり『良いこと』ってことかい？」

伊井坂にも勢い込んで訊かれて、帆影はこくんとうなずいた。

「はい。根本的な意味で、世界平和につながる道と言えるかもしれません」

「世界平和に……」

コーヒーに溶ける粉砂糖のように薄甘い声で宣言された、あまりに壮大な主張に、期せずして僕と映、伊井坂の声が重なる。

「どうして同性同士で恋をすると、世界平和につながるんだ？」

映と伊井坂がどう反応していいか困っている中、二人よりは帆影に慣れてる僕が聞き返す。帆影は僕に向き直って、始まりの数字を表すように指を一本立てて見せた。

「そもそも、戦争という行為はどうして生まれたのでしょうか」

「どうして……」

顎に手を当てて考えてみるが、咄嗟^{とつさ}には答えられない。そもそも戦争の定義から考えないといけないし、理由にしても複雑すぎて、

「一言で言えることなのか？」

帆影は「はい」と、あっさりうなづく。すぐ隣に座っているので、さらりとそよいだ髪から良い匂いがした。

帆影は本を読むことと同じくらいに風呂が好きで、朝風呂も欠かさないらしい。だからなのか、暑気しよきの迫る今の季節もいつも清潔なたたずまいだ。

そんな物理的に清楚な彼女が、戦争の根本こんぽんを本当に一言で答えてくれた。

「セックスが、止まらないからです」

.....

僕も、映も、伊井坂も。

どう反応していいか解らず、ただ硬まっていた。

帆影が平気でこういうことを言う和解っている僕と伊井坂はともかく、映などは少しずつ頬を紅潮させていつている。

そしてその赤い血が脳に達したか、ばんっ！とテーブルを叩いて帆影へ指を突き付けた。「だから！ どうしてそういう単語を平気で口にするんですか!!? 男子もいるんですから、

少しは恥じらいを持って言葉を選んで下さい！」

「性行為が、止まらないからです」

「素直に言い直されてもなんかムカツつく……………っー！」

外面を取り繕うのも忘れてぶんぶんと拳を振り回して怒気を放熱しようとしている妹はいつものこととして、今日は伊井坂も珍しく帆影をたしなめた。

「ハユユンの言う通りだよホカちゃん。この男——」

と、立てた親指で僕を示しながら、

「うっすい色の草だけ食べて生きてますって顔して、その実体はとんだサディスト野郎だよ。見たろ、さっきの追い込み。きつとホカちゃんにもよからぬことを考えてるぜ」

とんでもない濡れ衣を着せてきた。

帆影は絶句する僕に平板な視線を向け、「そうなんですか……………？」と問いかけるように小さく首を傾かせる。

僕は、あわてた。

「あれはただ、妹がセクハラで泣かされたから注意しただけって言うか——」

「泣いてないってば！」

「セクハラは酷くないかい!? あたしはただ、純粋な愛の物語をいっしょに楽しみたいくて

だねえ……」

「いえ、あれは普通にセクハラでした」

「ええ………」

映と伊井坂はなおも言い合っていたが、この話題を引つ張りたくない僕は急いで話をレールに戻した。

「そ、それで帆影っ。どうしてセツ………イ行為が戦争になるんだ？」

帆影は少し、僕の顔を見ていたが、伊井坂の発言には特に触れず、質問に答えてくれた。

「人間には性衝動があります。無いと子供を作らず、滅びるので、当然あります」
まあ、それはそうだろう。

「人間のグループが性衝動に従って子供を作っていると、人数が増えます。人数が増えると、全滅しにくくなる代わりに多くの食料が必要になります。」

人数が少ない内は、動物や魚を狩ったり木の実を採っても、そうそう尽きることはありません」

動物も植物も、人間と同じように繁殖して数を増やすから、元々の規模が人間を上回っていけば全滅することはなく、いずれは再配置リスボーンされるわけだ。そういうスポットを巡回することで、原始人たちは生きてきたのだろう。なんかロールプレイングゲームの素材集め

みたいだ。

僕が卑近な感覚で理解をする間にも、帆影の話は続く。

「ところが人間の数が増えすぎると、グループの行動半径の食料が足りなくなってしまう。農耕や文明を拓く^{ひら}ことで問題は緩和されますが、それでも結局、人が増え続ければ食べ物は足りなくなります」

帆影の言わんとすることが、なんとなく解ってきた。

「増えた人間を養おうとすれば、さらなる採取・生産のための領域を得なければならなくなり、その候補地にすでに人間が住んでいれば争いになります。

土地ごとに養える人数が決まっているなら、自分のグループ全員を生かすために、他のグループの人数ないし密度を減らさなければならぬからです」

まごうことなき侵略戦争だ。しかし、帆影のように淡々と流れを説明されると、利己的ではあるけれど、いわゆる悪という概念以前の、なにか化学的なシステムのようにも思えてくる。

「そうならないように子供の数をしぼれないもんなのかね」

伊井坂が素朴な疑問を口にした。帆影もまた、素朴に返した。

「人間には人生の大半の間、性欲がありますから。その強制力はなかなか強力です。

子供を産む数を抑制できてしまうと、その子供が死んでしまった時の危険が大きくなりすぎます。ちよつとしたアクシデントで家系が断絶してしまいますからね。

遣伝子というのは冷淡なもので、絶滅のリスクを負うくらいなら、余るほど子供を増やした後で、余った分を処分するようにわたしたちを設計しています」

「処分って……」

不穏な表現に眉をひそめる映に、帆影はこともなげに答える。

「餓死や栄養不足での衰弱死、そして養いきれない赤ん坊を殺してしまうことです。産まれすぎた赤ん坊がそのまま死んでいく状況は、つい近世まで各国の大都市でも続いていたそうです」

「なんで、そういうこと平気な顔で言えるんですか……？」

映はうげつと喉を鳴らしそうな顔をして帆影に抗議した。薄気味悪そうな上目遣いで帆影を睨んでいる。

映の言いたいことも解らないでもない。けれど、そういう風に、いろいろなものと距離を置いた話し方も帆影の個性だ。

だからか、映の険しい視線を受けても帆影は動じず補足する。

「性教育の普及や、コンドームなどの避妊具が産業革命とともに世界中へ広まったことも

あつて、現代ではだいたいぶ状況が改善されていると言っていていいでしょう」

「なんでそういうこと平気な顔で言えるんですか!？」

映は一転、顔を赤くして平手で机を叩いた。コンドームくらい保健の授業で習う単語だろうに、こういう方面の話には妙にウブなところがある。

それはさておき、僕にも帆影の言いたいことはおおむね解った気がした。

「つまり……以前に比べれば子供が死にくくなっている現代なら、同性愛みたいに子供の産まれない恋愛も、むしろ人口にバランスをもたらすってことか？」

「そういやそんな話をしてたんだったね」

伊井坂がポンッと手を打った。

「でもって、人間が資源の再生速度に対応した少なさになれば、戦争とかも起こらなくなるわけかい」

人間には絶滅を回避するための強い性衝動がある。

しかし人口が増えすぎると資源を巡って戦争が起きる。

それなら、子供の生まれない恋愛で性衝動を満足させればいい。

本当に、そこだけを見た理屈の上の話では、そうなるのだろうか。実際にはもっと雑多な要素が絡んで、そう単純な話にはならないだろうけど。

BLや百合が世界平和につながる、という発想の意味は解った気がする。

異性同士、男同士、女同士——その恋愛形態がバランス良く鼎立ていりつすることによって、性衝動を満足させつつ人を増やしすぎない均衡、天下三分の計が成るわけか。

「もちろん、急に出産が減ってしまうと前の世代を物理的・経済的に養うことができなくなったりするので、無責任に奨励するわけにもいきません。それによって生活水準や治安が悪くなつては本末転倒ですから。」

なまじ長寿の時代、一度増えてしまった人口を減らすのも大変です」
聞きようによつては呪いめいたことを、心なし悩ましげに語ったところで、帆影の話は区切りが付いたようだった。

しかし今回も、映がノックアウトされたBL小説からずいぶんと飛躍した展開になった。人類の設計上、性の欲求は抑えられないし、抑えられてしまうと種しゅが絶える。しかし文明が発達し、死亡率が下がっていく中で自然の欲求に従えば、人の数が増えすぎて資源が不足する。そうなれば、弱い子供、老人から順に死んでいく。

そうじゃなければ、戦争だ。もちろんその前段に諸々の政治はあるだろうが、究極的に

は自分のグループの数を保ち増やすために、他のグループの数を減らすことが求められる——求められて、しまうのだろう。

避妊は効果的だろうが、そうそう徹底できるものではないし、育てられる環境がない者にほど知識や避妊具が行き届かないという悪循環もある。

それらの認めがたい事情を認めた上で、人が幸福な生活を送りつつ人口の限界を超えないためには、愛欲の対象を同性に求める人が一定の割合に達すればいい……………

……
そこまで考えて、頭を抱えてしまった。これは……この考え方は、倒錯している。

「帆影先輩は、やっぱりおかしいです」

僕はびくりと背をすくめた。僕の考えをなぞったようなタイミングで、映が口を開いたからだ。

帆影は目顔だけで映に聞き返した。

映は席を立ち、僕の頭越しに帆影の静かな視線を見返す。

「人が人を好きになるっていうことを、そんな打算で話さないでください。

先輩の言い様は、『子供ができないから同性愛はおかしい』と言ってるのと同じことですよ。ロボットみたいなこと、言っちゃってるじゃないですか」

「……………」

帆影は答えなかった。返答を求められていないからかとも思ったが、帆影は、唇が微かに開いたまま固まっていた。

いずれにせよ、映が続ける方が早かった。

帆影がなにも反論しないことに焦れたようにも、見えた。

「異性にしろ同性にしろ、子供が増やせるから好きになるとか、子供の数を抑えられるから好きになるとか、そんな話はないんです。……いや、昔はどうだか知りませんが、今はそんな時代じゃないはずです。」

その人といっしょに居たい、その人に幸せでいてほしい、その人と結ばれたいって、そういう……気持ちで、心で、恋をするんです。

帆影先輩の言うことには、人間らしい意志や気持ちが全く感じられません！」

長々と言って、映は息を切らしたようだった。そうでなければもつと言いたいことがあったかもしれない。

帆影は、やはり答えない。無反応なようにも、ぽかんと呆れているようにも見える。代わりに、僕が口を開いた。

「落ち着け、映。」

帆影はお前が最初に言ったような『子供の産まれない恋愛は無意味』という意見は持つてないと言つて、その通りのことを話しただけだ。帆影は意見の内容が違ふと言つて、お前は意見の性質は同じだと言つてる。話が噛み合つてない」

「そんなこと、解つてるけど……」

本当に解つていたかは怪しいが、めんどくさいから信じたふりをしておいた。

「けど、じゃない。解つてるなら、帆影に絡むんじゃない。先輩だぞ」

反射的になにか言い返してきそうになつた映の機先を取つて、額にぺしつとチョップを入れる。

映はおでこを押さえて息を詰まらせたような顔になつて、パイプ椅子に座り直した。それから何秒かむつとりとしていたが、つと立つて（ガタンッ）、鞆が床に置きつ放しなことに気付いてまた座つて（ガタッ）、鞆を掴んで、また立ち上がった（ガタンッ）。

そのまま、きつと刀を横薙ぎにするような一瞥を僕へ向け、
「用事を思い出したので帰ります。」

失礼します、先輩方^{がた}」

切り口上に言い捨てて、文芸部室から出ていってしまった。大きく反らせた小さな背中が、ぴしやりと引き戸に遮断される。

取り残された二年生三人、しばし無言でそれを見送って。

「いかなあ、オニイチャン。カノジョばっか鼻屑して。ハユエン拗ねちゃったじゃん」
 いかんと言いつつ、伊井坂はにやにやと口の端を笑わせていた。

「別に。家の中じゃ、いつもあんな感じだよ」

自然と溜息が出る。あんな癩癩玉でもクラスでは落ち着いて頼りがいのある美少女で通っている——少なくとも中学ではそうだった——というのだから、ある意味、我が妹は大変な努力家と言えるだろう。そこは積極的に評価したい。パツとしないオタクの兄とは大違いの、出来た妹だ。

その出来たところを帆影にも向けてくれれば、僕の生活も落ち着きそうなものなのだが。

「……帆影もごめんな。映の奴が好き放題言つて」

「いえ」

帆影は小さく頭を振って、自分の膝の方向へ吐息を落とした。音のしない、薄くて虚しいような息だった。

「わたしが、妹さんの言いたいことを解らなかつただけです」

帆影が机を見つめていたのは、それから数秒のこと。

おもむろに手を伸ばして『英雄たちが一晩中 男殺し粘魔之地獄』を読み出そうとする

彼女の腕を、僕はそつと押さえた。



翌日。

昨夜も小説を書くことはできず、ウィキペディアの「三国志の登場人物」のカテゴリを漫然と眺めていたら寝なきやいけない時間になっていた。自分に課した宿題が真っ白なわけで、爽やかな寝覚めとは言い難い。

映は昨日以来、母さんや父さんには普通に接しているが、僕のことには無視している。機嫌を取るにしても、もう少し頭が冷えてからの方がいいだろうと、僕も放っておいた。

そんな半端な気持ちで午前を送ったせいだろうか、昼休み、僕は思わぬ冷水を浴びせかけられた。

「帆影が、怪我をした……?」

「んー、そんな大したのでもなさそうなんだけどね」

それを教えてくれたのは帆影のクラスメートで、なにかと行動をとみにしている酒々井さんという女子だった。今みたいなジャージに短パン姿だと遠目には男子にも見える、ポ

ーイッシュユな人だ。

帆影が彼女といっしょに歩いてる時に何度か出くわして、お互いに面識がある。知り合ったのはまだ一年生の頃で、その時はまだ帆影と付き合ってたので「同じ文芸部の新巻くん」と紹介されたが、今はどう認識されているのだろうか？

そんな程度の関係である酒々井さんに廊下で呼び止められ、何事かと思つて振り向くと、弁当箱を突き付けられたのだ。

「今は帆影、保健室で休んでるんだけどさ、暇だったらこれ、届けてやってくんない？」話も弁当箱も唐突な上、帆影の負傷という事態に混乱した僕は、にわかには返事もできなかった。酒々井さんはすまなそうに手刀を立てて続ける。

「ウチが持つてつてやるつて言つちやつたんだけど、柔道部の昼ミーティングあるの忘れててさあ」

ハンカチで奇麗にまとめられた、男の僕から見るとこぢんまりした弁当箱だ。帆影が家から持つてきた昼食だろう。要するに、帆影はまだ教室に戻れないから、誰かが弁当を届けないと昼飯抜きになるということか。

「新巻くん、帆影の友達だよな？」

トモダチ……帆影は友人に、僕のことを「友達」だと説明しているのか……いや、

帆影のことだから、付き合い始めたなんてわざわざ報告してないだけかも知れないけど。ちよつと落ち込んだものの、まさか否やはない。

僕は酒々井さんから帆影の弁当を受け取って、保健室へと急いだ。

保健室の前まで来て、ノックしようとしたところで中から戸が開かれた。

出てきたのは養護教諭の保村先生やすむらで、戸を開けたらすぐ外に立っていた僕の姿にびっくりしたようだった。少し大げさにたたらを踏む。

「え？ なに君きみ？」

「あの……帆影、さんの、弁当を届けに……」

「ああ」

保村先生は三十代半ばくらいの女性で、この仕事ももうベテランなのだろう。健康診断以外では初めて訪れる保健室に緊張して性急に用件を切り出す僕にも、柔和な笑顔を見せられた。

「あれ？ でもさつきは、酒々井さんが持つてくるって言ってたけど……」

「なんか部活のミーティングがあるとかで………あ、僕は二年A組の新巻です」

ふと思いついて、あわてて名乗る。いきなり保健室に押しかけて、きよときよと落ち

着き無く女子に弁当を届けに来たと言い出す……これじゃ不審者だ。緊張と情けなさで顔が赤くなった。

それをどう取ったか、保村先生はふうん……と息を抜きながら僕の肩を叩き、

「帆影さんは奥のベッドで休んでるから渡してあげて。わたしは用事があつて留守にするけど、昼休みが終わるまでには戻ってくるから。」

よろしくね」

そう言い置いて、言葉通りにどこかへ行ってしまった。白衣を揺らしながら去って行く背中がちよつとカッコイイ。

……なにが「よろしく」なのかはよく解らなかったが。

ともかく僕は、先生と入れ違いに保健室へ足を踏み入れた。少し迷ってから、引き戸を閉じる。

あまり馴染みのない保健室は、無人を疑うくらいに静かだった。食べ盛りの空腹を癒す生徒たちの声が、遠くから、幾重にも反響して無音の隙間に忍び込んできている。

節電のためか電気は消えていたけれど、窓から差し込む陽の光だけで、この部屋は嘘くさいくらい真っ白に染まっていた。

ポスターの中で健康問題を論じる絵本めいたキャラクターたちや、目玉にも似た体重計

のメーターからの視線を感じながら、なんとなく神秘的な気持ちで奥へ進む。

ベッドは三つ並んでいたが、カーテンが閉まっているのは壁際の一つだけだった。

「……帆影、いるか？」

「新巻くん……？」

聞き慣れた静かな声で返事があったことに、予想していたよりも大きな安堵があった。知らない内に溜めていた息を吐き出しながらカーテンを開ける。

そこで、うつ、と固まる。

別に、何かおかしいことがあったわけではない。聞いていた通りに帆影が居ただけだ。

学校標準の体操着と短パン姿で、酒々井さんと違ってジャージは羽織っていない。足を伸ばした姿勢で座っていた。暑いからか掛け布団は隅っこにたたまれている。

体操着は汗を吸ったせいもあってか、彼女の凹凸の大きな体型を従順になぞっていた。

短パンから伸びる両脚も、男のそれとは全く違う曲線をくつきり浮かび上がらせるくらいに、白く映えている。

この格好の彼女を見るのは初めてではなかったが、カーテンの中の狭い空間で、しかもベッドの上に放り出されているのを見ると、全然平気というわけにはいかなかった。

しかし惚けていたのは一瞬で、すぐに我に返った。帆影の右膝の下あたりにラテックス

の氷嚢が載っかっている。体育の授業で脚を痛めて、それで教室に帰れなかったようだ。「……どうしてここに？」

カーテンのせいで薄暗い中、いつも通り茫洋とした帆影の瞳だけが光を集めて照り返し、僕に向けられている。暗いので顔色はうかがえないが、特につらそうな様子はない。

ただ、少し落ち着かなさそうに、額にかかっていた前髪をかき上げていた。

「うん……酒々井さんに頼まれてさ。帆影の弁当、持ってきた」

答えながら、ベッドの脇にある小さな棚の上に弁当と、途中の自販機で買ってきた紙パックのカフェオレを置く。

「酒々井さんは部活のミーティングがあるんだって」

「そうですか……ありがとうございます」

帆影は本当に小さく頭を下げてきた。載っかってるだけの氷嚢を落とさないようにバランスを取っているのかもしれない。

「いって。でも……脚、痛むのか？」

帆影はゆっくりと、僕から自分の脚へ目を移した。

「転んで打っただけです。大したことはないので痛みが引いたら戻っていいと」

酒々井さんが割りと平気な顔をしていたので、そんな感じだろうとは思っていたが、直

に帆影から聞いて胸を撫で下ろす。

自分が怪我をするのは我慢すれば済む話だけど、帆影が怪我をしたら、僕にはどうにもできない。それは、ひよつとしたら、つまり他に想像できないという意味で、なによりも怖いことだ。だから、

「よかった……」

半ば無意識に、声が出る。反応して顔を上げた帆影が、僕の表情かおを見て、それから何度かまばたきした。

——彼女が目を閉じるだけで、腹の底に水滴の落ちる心地がする。好きな女の子と二人きりでいるというのは、僕にとってはそういうことだった。

その帆影が、おもむろに上体を屈めて脚の氷嚢へ手をかけた。

「もう、だいぶ痛くなくなりました」

告げながら氷嚢をずらして見せる。釣られて見ると、確かに傷はなかった。しかし、すぐに見て取れるような青アザになっていた。

自分でも意外なくらいに狼狽した。思わずのぞき込んでしまう。

「えっ……これ、痛くないのか？」

対する帆影は小さく首を傾げて、

「触ってみますか？」

出し抜けなことを言ってきた。顔を見ても平静なもので、例によって、なにを考えているのかよく解らない。

一瞬、まさか誘われているのかと頭に血が上ったが、話の流れや帆影の性格を考えると、単に僕を安心させようとしているだけな気がする。だとしたら、断る理由はなかった。

(い、一応……………恋人同士なわけだし…………)

帆影の脚に手を近付けながら改めて彼女をうかがうが、変わらず委任の眼差しだ。

音を立てないように唾つばを飲み込んでから、ゆっくりとアザあざになっている部分に触れる。氷で冷やされていた肌が指に吸い付いてきて、僕の方に鳥肌が立った。

「……………うん。触った感じ腫れてないし、ホントに——」

平気なんだな……………と、視線を帆影の顔に戻して、言葉を失う。

じゅつ……………と目を細めて、口を引き結んでいた。知り合ってから一年以上経っているが、初めて見る渋面だ。睫が震えているのがちよつと色っぽい……………いや、そうじゃなくて。

慎重に、そつと、手を離した。

「……………痛そうじゃないか」

「痛いですが……ぶつけた直後ほどではないだけで」

詰めていた息とともに言っ、表情を和らげる帆影。僕は困惑した。

「じゃあなんで、触らせたりするんだよ」

帆影はちよつと答えなかった。自分が口の中に用意した言葉が適当かどうか、迷っているようだった。

「……喜んでもらえるかと思っ」

………まあ、それは、帆影の体に触れるのは、正直、当然、うれしい。足を踏まれたり人混みの中でくっついたり手を握り合ったりしたことはあっても、脚に触れるのは初めてだからすごく緊張した。ドキドキした。

でも、なんで患部を？ そもそも帆影は、なんで急に僕を喜ばせようとしたのだろうか？
僕は素直に訊いた。

「ええと………なんで、僕が帆影の怪我を触ると喜ぶと思っただ？」

帆影は、とても素直に答えてくれた。

「昨日、伊井坂さんが新巻くんはサディストだと教えてくれたからです。そこに折良く打ち身を——」

「いや忘れてくれ！ あれは伊井坂の悪ふざけだから！」

僕の全力の否定に、帆影は「そうなんですか？」というようにぼかんとしている。そういえば昨日、伊井坂の暴言に具体的な否定をしなかった気もするけど……ちよつとショツクだ。

「帆影も、なんであんなホラ話を信じちゃうんだよ……？」

「以前にも足を踏まれたり、不意に強く手を握られたりしましたし。そういうのが好きなのかと」

そう言われれば……そんなこともあったかも知れない。でも、ああいうのは精々おふぎのレベルだろう。Sっ気があるとかではない……と思う。

「新巻くん」

ふと静かな声で呼ばれ、追想への言い訳から引き戻される。見ると、帆影はいつもより少しだけ真剣に見える目をしていた。なんだろう。

ベッドのそばに椅子がなかったもので、少しためらってからベッドに座る。ぎつとベッドのスプリングが鳴いて、その揺れでまた痛んだのか、ソックスに包まれた帆影の足先がきゅつとすぼまった。

帆影と目線を合わせて、続きをうながす。帆影は神妙に口を開いた。

「わたしはどうも、痛いのは苦手みたいなので加減してもらえると……」

「だから忘れてくれってば！」

両手をわなわなさせて訴えるが、帆影はまだ疑いを持っているらしかった。

『英雄たちが一晩中』のように、ワサビは水溶性だからそこにはマスタードを塗り込むべきだ、とか言い出さないということですか……？」

「結局読んだの!? せっかく没収したのに！」

「昨日、電子書籍で買いました」

しかも買ったのか……まあ書店で探さなかっただけダメージは小さいかもしれない。

ちよつとした目眩めまいに額を押さえながら、訊く。

「なんでまた……そんなに読みたかったんだ？」

「………新巻くんも、妹さんも、伊井坂さんも読んだ物なので」

………

取り残されると、思ったのかもしれない。いや、僕はたぶん、自分からは二度と思い出さないとと思うし、映も三分の一くらい読んだところで投げ出したみたいだけど。

そういう問題じゃないのだろう。

三人で勝手に盛り上がってしまった(？) 昨日の態度はちよつと無神経だったかもしれない。反省だ……

「夜遅くに読み始めてしまったので、ちよつと寝不足です」

……いや。

「ちよつと待て。まさか、そのせいで転んで怪我したって言うんじゃないだろうな」

「それもあるかもしれませんが」

ダメじゃん……

読書好きは結構だけど、日常の注意力が下がるほどの困る。これから暑くなるし、これは少し説教すべきか……と口を開きかけた時、帆影が先に続けた。

「でも直接の原因は、考え事をしていたせいです」

「考え事？」

「はい。昨日はまた、妹さんを怒らせてしまったので」

「だから、気にしなくなっただけ。いつものことなんだから」

帆影は珍しく、頑なに首を振った。

「いつも……いつも……いつも、わたしはどこで間違えてしまっただけでしょう？」

……どうも本気で悩んでいるらしい。帆影はいつも超然として見えるし、相手に理解されないことを恐れている様子もなかったけど、少しずつ変化しているのだろうか。それとも、ごく単純に、映と対立することを不利益だと思っているのか。

なんにしても、それなら僕も考えてみよう。

「……昨日の件で言うと、映は、同性同士で恋愛するのが正当化される理由じゃなくて、人を好きになつたら性別なんて関係ない、本人たちの気持ちが大切、って答えを期待してたんじゃないかな。あいつロマンチストなところあるから」

「キモチ、ですか」

帆影は、くさむらに住んでいる虫の名前を聞いたような顔をした。バツタ、カマキリ、コオロギ、キモチ。明らかに要領を得ていない。僕は考え考え付け足した。

「たとえばさ、帆影の言つてたような、人間の性衝動。それをオフにできるスイッチが発明されたとして、オフにした時に人を好きになつたら、それが純粹な恋愛である、とか」

自分で言つてて胡散臭いうさんくさが、映はそんな風に意識しているフシがある。そうでなければ、ああいう欲望に特化したような本を読んで泣き出しはしないだろう。

「難しい話ですね」

割りどぎっくりしたたとえ話のつもりだったが、帆影は思いのほか深く考え込んでしまった。

「心というのはつまり、意識的にか無意識的にか『結果的に利益を得た行為』を反復しようとする働きです。」

一番単純な例では、泣くことです」

「泣く？」

「はい。赤ん坊は生理的な欲求で泣きますが、それを繰り返す内に『泣けば世話してもらえ』ことを覚えて、大人になっても、悲しいことや感情が不安定になることがあると泣くようになります」

なるほど。「助けを求める」状況と「泣く」という行為が、精神的に紐付けひもづされるといふことか。

それだけでは端的すぎると思ったか、帆影は例を重ねた。

「たとえば、小さな子供が欲求のままにおやつを食べ過ぎると、晩御飯が食べられなくなつて親に叱られたり次の日の分のおやつが足りなくなつたりして後悔します。

そこで逆におやつを我慢してみると、晩御飯を美味しく食べられて親にも褒められ、次の日もほどよい量のおやつを食べられました。そういう環境に育つた子供は、『我慢』を『良いこと』とする心を形作るわけです」

我慢しなくても怒られなかったり、翌日もたっぷりおやつが食べられた場合、「我慢」は「無駄で不利益なこと」として避ける心ができるわけか。

「だから、思春期以降は常に発情期の人間の精神活動には、およそ全てに性的な欲求が関

与していると考えることができます。もちろん性的な充足より他を優先する決断も多いと思います。少なくとも比較対象として参照して、一挙一動に影響を与えるでしょう。

そうなると、性衝動を取り除かれた人間は、全く別人のココロになってしまいます。その別人の恋愛は、純粹にその人の恋愛なのでしょうか？」

……確かに難しい話になってしまった。性を抑圧すること自体に性が関わってしまう。プラトニックな恋愛と言う場合、その定義は「性的でない」恋愛だ。性の概念を使わないと定義できないなら、それは結局、性の話になってしまう。

生まれながらに性欲の無い体質の人同士の恋愛なら、純粹と言えるのだろうか。僕が思わず考え込んでしまって、帆影が返事を待ったせいで、沈黙が落ちた。

昼休みの保健室、空虚に脱力した空気。遠くから聞こえてくる、休息を謳歌する生徒たちの嬌声が、かえってこの場所は寂しいのだと語り聞かせてくる。

……校舎の中で帆影と二人きりになるのは、部活で慣れているのだけれど。保村先生だって、すぐに帰ってくるのだろうか。

しかし、それでも、同じベッドの上でこんな近い距離に居るというのは、初めてのことだ。意識してしまうと、考え事とは別の理由で声が出なくなる。次になにを言うべきか、言っているのか、解らなくなる。

そんな中に、帆影の透き通るような声がした。

「新巻くんは、どうしてわたしと恋人になろうと思ったんですか？」

「どうしてって……」

決め手になったのは、僕が文化祭の時に書いた小説を読んでもくれた姿を見た時だった。他には伊井坂くらいしか評価してくれなかった掌編を読んで、帆影は柔らかく微笑んでくれた。その時に、どうしようもなく惹かれた。

………うん？ おお、我ながら純粋な好意だ。幻かと思われた「純愛」は、まさか僕の中にあつたのか。

しかし、さらに思い返してみると。

初めて出会った日、脚立を踏み外して文字通り僕の腕の中に飛び込んできた帆影の体の柔らかさ。そこに好意が発していないと言い切れるだろうか——否。

入浴中にフリーズしてしまったタブレットについて相談の電話を掛けてきた時、タブレットの写真といっしょに誤って送られてきた、帆影のあられもない姿。あの、控えめに言っただけで一番魅力的だと思った写真を消してしまったことを後悔していないと言い切れるか——否。

付き合い始めた後、初めて帆影と握り合った手の感触を思い出し、その晩中ベッドの中

で悶え転げ回りはしなかったか——否^イ。

なぜかいつしよに選ぶことになった帆影の下着。帰ってから帆影の買ったのと同じ物をネットで検索し、意味もなく商品画像を保存しなかったか……——………否^イ………

………ダメだ。僕の恋は欲望にまみれている………て言うか最後の気持ち悪すぎるだろう！ 他の誰かがやってたら唾を吐きかけたくなるくらい最低だよ！ クズだっ！ 僕はクズ野郎だ！

「どうしたんですか新巻くん。急に頭を抱えて突っ伏して、あまつさえふるふる肩を震わせだして」

「いや……自分の不純さに絶望しそうになって……」

解ったことは、僕は強烈に帆影を求めているが、それを精神的なものと同体的なものに分けて考えられそうにはないということ。それだけだった。

自分のゲスさ加減と向き合いながら顔を上げ、きよとんとしている帆影に向き直る。

深呼吸して少しは落ち着いたが、さすがに、自分の変態じみた部分を告白して「こんな僕でもいいでしょうか……？」と訊く度胸はない。

だから。

「帆影」

「はい」

「青頭巾、さ」

「え……？」

『雨月物語』の……昨日言ってたろ、伊井坂に。ネットで調べたら現代語訳があつたんで読んでみたんだ」

大雑把に説明すると、ある僧侶が、召使いの少年を愛するあまり少年の病死を受け入れられず、その死体を喰って鬼と化す物語だ。その鬼は、人里に現れては墓を暴いて屍肉を喰らうようになってしまう。

最後は、青い頭巾をかぶった禅師の教えを受けて成仏するのだが、食人を伴う凄絶な少年愛はインパクト抜群だった。確かに、広義にはボーイズラブに当たるとはかもしれない。「あの僧侶が死人の肉を食べるようになったのはきっと、少年を食べたって愛の行為を繰り返したってことだと思ふんだ。」

さっきの心の話で行くと、『愛する人を』食べるのは気持ちいいということ覚えて、主体を忘れて何度も反復した。

『愛』と『行為』を同一視して、倒錯した心を生んでしまった」

帆影は黙って聞いていてくれた。彼女の目に宿る落ち着いた光で、話を理解しているこ

とがうかがえる。なんだか、いつもとは逆の構図だ。

「極端すぎる話だけど、解る気もするんだ。一度結びついてしまったら、切り離せない」
「……そもそも、寺院の稚児ちごは女人禁制の場で女性の役割を担ったといえます。つまり、僧侶の少年愛は異性愛の代わりで、僧侶が変わり果てた鬼が死体を食べたのは少年を食べたことの代わり」

そう言ってしまうと、どこにも本物などないように聞こえる。全てが錯覚だ。
でも。

「でも、僧侶の愛が偽物だとかって感じはあんまりしない。仏教の話だから最後は執着を捨てて成仏するけど、僧侶のやったことが……その……、セックスでない分、少年への尽きない愛情をどうにか表現し続けている、ある意味で純粋な想いの話にも思える。ただ性的な関係が純粋な愛に変わることもあるだろうし、純真に人を慕う気持ちがあるシムレスに体の関係につながるかもしれない」

「……………」

「つまり……だから、人を好きになる心は、鬼のように強くて、異常で、死ぬまでどうにもならないくらいぐちゃぐちゃだつてことだと、思う」

そこで言葉を切って、帆影の反応をうかがう。

帆影は納得したのかかしていないのか、あるいは話を咀嚼そしゃく中なのか、生真面目な顔をして僕を見ている。

文芸部で隣り合って座っている時と、距離はそう変わらない。でも、同じベッドの上に乗って、体操着の中で彼女の胸が微かに上下して、呼吸しているのが見て取れる。この狭い空間を、伝わってくる。

また、帆影の手を握りたくなかった。けれど、帆影は両手を腹の上に重ねていた。そこから取り出すわけにもいかない。

だから。

「だから、僕が帆影と付き合いたいと思った理由は……よく解らない」
言葉はなを放はなつた。さつき訊かれたことへの答え。

「見ていたとか、話したいとか、理解わかりたい、とか………さ、触りたいとか………
あと、読んでもらいたい、とか」

あまりの気恥ずかしさに耐えきれず、目をそらした。その刹那に、帆影の瞳めが少し大きくなったような気がした。それこそ錯覚かもしれない。

「とにかく、いろいろ混じって、どうしようもなくなって告白した。あの時、帆影は『よく解りませんが』って言ってたけど、僕も同じなのかも」

昨日から今日にかけて帆影といろいろ話して、好きってなんなのか、恋ってなんなのか、以前にも増して解らなくなつた。なんか性別の話とか、どうでもよくなつた気もする。ただ、僕は帆影に強く惹かれてる。これは間違いない事実だと信じられる。

言えることは言ってしまったので言葉が切れた。帆影からの返事は返ってこない。あまりのアバウトさに呆れてしまったのか、単に返すべき言葉がないのか……

今度は沈黙に耐えきれず、帆影に向き直る。目が合った。真つ直ぐに。帆影は急に振り向いた僕に驚いたらしく、その前にどんな顔をしていたのかは判らなかつた。

「それは——」

「それでよければ——」

次に発した僕と帆影の声は重なって、いち早く口をつぐんだのは帆影の方だった。だから、というわけでもないが、僕はそのまま言い切つた。

「それでよければ……これからも、よろしくお願い……します」

言っている途中で、すごく情けない再告白をしている気がして、声が尻すぼみになってしまった。我ながらダメダメだ。ダメダメな彼氏だ。

恐る恐る帆影を見ると、彼女は息を吸ったところだった。体操着に包まれた胸がゆつくりせり上がって——それから、帆影にしては珍しいくらい大きな息を吐き出した。

なにか、怖い物をやりすごしたような仕草に見えた。脚の痛みがぶり返したのかもしれない。

そんな帆影が、いつも通り小さく唇を開く。

「はい……よろしく願います」

粉雪が溶けるような、張りのない声だけど、聴き取りづらくもない。少なくとも僕の耳は聞き逃さないその声に、僕は胸を撫で下ろした。

まずはフラれずに済んだようだ。

帆影も、少し元気になったような気がする。表情が薄いのはいつものこととして、映に言われたことに悩んでいた時のような愁うれいが消えている……と思う。

怪我也、まだ痛そうだけど、先生に診てもらった上で軽いというなら、とりあえずは心配なさそうだ。帰るのが厳しそうだったら相談に乗りたいけど……

その前に、帆影はそろそろ弁当を食べ始めないと昼休みが終わってしまう。棚に置いた弁当を渡そうと腰を上げて、ふと思いつく。

不幸な誤解を繰り返さないよう、今度は念入りに言っておこう。

「帆影」

「はい」

弁当を帆影に手渡ししながら、先ほどの会話に追伸を付ける。

「さつきさ、いろいろ、したいことが混ざって告白したって言ったけど……」

「はい」

「帆影を痛めつけたり、傷付けたりするようなことをしたいとは思ってないから。絶対」
「なんで、こんな当たり前のことを強調しなきゃいけないんだろう……逆に怪しくなってる気もするが、全ては伊井坂が悪い。」

と、そこで、弁当の包みを開けていた帆影が、箸はしの入ったケースを落とした。落としたと言ってもベッドの端に転がっただけだが、怪我けがしている帆影には取りづらそうだ。

「僕は、なんて言うか帆影に——」

僕は言葉が続けながら箸ケースに手を伸ばして——気付く。同じようにケースへ手を伸ばそうと体を曲げた帆影とぶつかりそうになっていた。ぶつかりそうなくらい、顔が近い。

互いの息で髪が揺れそうなその距離。同じく驚きからか小さく開かれた薄い唇に目と意識を奪われながら、口の中に残っていた言葉がこぼれ落ちていく——

「優しく……する、から……」

「……………あ……………」

シャツ

——というのは、カーテンの引かれる音だった。

僕と帆影の薄暗い世界は切り裂かれ、なに隠すことない光の世界へ瞬く間に呑み込まれる。

反射的に見やると、カーテンを開いたのは見慣れた顔だった。保村先生ではない。

後で聞いた話では、廊下でたまたま行き合った酒々井さんから帆影が怪我をした件を聞き、昨日の暴言を少しは反省しないでもなかったし、お見舞いくらいしておこうかと思つたのだという——

つまり家の妹うぢだった。

しかしその形相は、およそ先輩の見舞いに来た優等生のそれではない。

汚泥の底であさましく蠢うごめく無脊椎動物を見下ろすような、冷たく軽蔑的な目で、この兄を見下ろしていた。

僕は、ゆっくりと、中腰のまま帆影から距離を取り、それから毅然とした声を作ろうと

した。

「つ……………つあ映？ ノックくらいしなないと——」

「したけど。返事なかったから入ってきたんだけど」

……………帆影に集中していたせいかカーテンのせいか、気付かなかったようだ。

それから妹は、僕を見て、それから帆影——ぽかんとしていた——を見て、それからまた僕へ目を戻して、ただ一言、言った。

「下衆^{げす}」

そうか、この口調のことを「吐き捨てる」と描写するんだな。それはそれとして、せめて「不潔^{フケツ}」くらいで勘弁してほしいかった。

僕の頭が現実逃避している間にも、映は踵^{きびす}を返してすたすたと歩き出し、あつと言う間に保健室を去っていた。ちゃんと戸を閉めていくあたりはさすが優等生だったが、その際に振り返ってこちらを見やった目は、ふるふると震えて、まるで沸騰しているかのようだった。

……………一つの誤解が解けたと思ったら、また一つの誤解が生まれた。

人生、そういうものなのかもしれない。

溜息について振り返ると、帆影はまだ弁当に手を付けていなかった。僕と同じく映を見

送っていたということもあるが、一番の理由は単純で、箸のケースをまだ僕が持っていないからだった。

今の流れでまたベッドに座る気にはならず——そろそろ保村先生も帰ってきそうだし——、立ったままケースを渡す。受け取った帆影は、僕を見上げてぽつりと言った。

「ままならないですね」

「ごめん。帆影まで変な風に思われただろうけど……後でちゃんと言い聞かせとくから」
「いえ……」

そこで会話は途切れて、帆影はようやく弁当に取りかかった。

帆影の弁当は帆影と帆影のお祖母さんが二人で用意しているそうだ。全体的に古風と言うか、薄茶色いような色合いだけど、栄養のバランスを考えてか、お年寄りには敬遠しそうな肉類なんかもちゃんと入っている。

なんとなく見入ってしまうその弁当に箸を入れて、帆影は一度、動きを止めた。それから僕を見て、目を弁当に戻して、呟いた。

「わたしも、いろいろですから」

「ん？」

後になにか続くと思ったが、帆影はそれ以上なにも言わずに弁当を食べ始めた。

結局、昼休みの終了間際まで先生の帰りを待つて帆影に付き添っていた僕は昼食を食べ損ねた。

そんなところで。

本日のライトノベルは、そつとページを閉じる……

The Hokage's L/RightNovel

Episode #4

We can't take off a blue hood.

Fin.

閑話3.

簡易リフォームしたのはもう何年も前のことになるが、お風呂場の天井は汚れ一つない鮮やかなクリーム色だった。

湯船の水もキレイに澄んでいる。新巻家あらまきの一番風呂はだいたいわたしだ。お母さんとはともかく、兄やお父さんの後に入るのは気が進まない。

夏を目前にしたこの時期、わたしは半身浴よりはもうちよっと多いくらい、七分しちぶほどまでお湯に浸かることにしている。あつたまりすぎると肌が真っ赤になる体質で、なんだかみつともないし、体に悪い気がするから。

兄などはお風呂場にタブレットを持ち込んで無駄に長湯をするが、のぼせやすいわたしには絶対無理だ。猫の動画とか視ながら入りたい気もするんだけど。

お風呂と言えば——と、わたしは手で作った皿に湯をすくい上げながら思い出した。

帆影先輩ほかげはけっこうなお風呂好きらしい。伊井坂先輩いゐさかがそんなことを言って、よく帆影先輩の髪の毛の匂いを嗅いだりしている。

その帆影先輩は、わたし、新巻映の兄の恋人なのだ……ということになっている。というこゝろになつてゐる、というのは、妹の目から見て、二人の關係が怪しいものだと思ふからだ。

帆影先輩は、おかしい。

ややもすれば陰気にも見えるけど顔立ちはなかなかキレイな人だ。果穂が家出した時は、自発的に探すのを手伝つてくれた。そこを見れば悪い人ではないとも思う。

でも、すつとぼけた無表情をしながらヒワイな言葉を連呼したり、人間らしい愛情とか尊厳とかを無視して、動物を観察する目で人を語ろうとする。そういう人でもある。

挙げ句の果てに、恋人であるはずの兄を「都合のいい人」呼ばわりだ。恋も愛も、あの人にとっては、便利に利用できる相手へ向ける感覚でしかない。

ただでさえコミュ力が欠乏して頼りない兄を、あんな変人に任せるわけにはいかない。せつかくわたしが日々講じてゐる、オタクになつてしまつた兄の更生計画が台無しになつてしまふではないか。

つい先日、同性同士の……なんと言うか……濃密な小説を読んだことから始まつた話の中で、帆影先輩は戦争がどうの人口がどうのと、生物のシステムの話をして、恋する人間の切ない情感について全く考慮してゐなかつた。

これまでに知った帆影先輩の性格からすると、恋愛という概念は理解しているらしいが、それを具体的なことだと思いついて入っているようだった。仕組みがあつて、決まった条件でスイッチが押されると恋が始まつて、スイッチを切ると愛が終わる。電球のフィラメントの親戚。そう思っているようだ。

そんな人だというのに、兄は本気でぞつこんのようだ。いつもあの人の肩を持って、わたしの言うことはちつとも聞いてくれない。

この間なんて、帆影先輩が怪我をしたというので保健室を見舞つてみれば、ベッドの上の先輩に兄がのしかかるような体勢になっていた。

後で兄が言い訳してきたことによれば、落とし物を拾う時にたまたまあんな形になつただけだというが……

帆影歩あゆむは、表情に反して体付きはとても豊かだ。特に胸の脂肪が目立つ。淡白そうに見えるても高校生男子の兄が、いつ猥欲じゆうよくを暴発させるか知れたものではない。

あんな冷血なほかげトカゲちゃんに惚れ込むあたり、兄はきつと胸の大きな女性が好きなのだろう。

きつと、オタク趣味のデフォルメされた女性像に浸かる内に、胸とか、女性の記号が明確な人にしか関心を持ってなくなつてしまつたんじゃないだろうか。認識力の衰弱だ。やは

りオタクは害悪なり。

慎ましい体つきをしている果穂を、わたし実の妹より可愛がる割りに女の子としては見ないのもそのせいかもしれない。

ちなみに、湯船の中の我が胸は上品かつスポーティだ。浚刺はっらつとしてとても動きやすく、なに一つデメリットのない理想的な体型と言えるだろう。特にふくらはぎのラインが気に入っている。

体付きと言え、伊井坂先輩も案外にスタイルが良い。着痩せきやするタイプなのか、制服を着ているとむしろ幼く見えるのだが、抱きつかれるとよく解る。あれは不意打ちだ。戦慄のサプライズ・ボディだ。

兄は、その伊井坂先輩にも迫っていた。あれはいわゆる壁ドンだ。わたしに変な本を押しつけたことへのお仕置きだと言っていたけど。

その伊井坂先輩は、今日も懲りずにライトノベルを貸してくれた。

さすがに前回のようないんモラルな内容ではないらしい。なんでも、歴史上の偉人たちの靈魂が様々な時代から現代に呼び出され、いくつかの陣営に分かれて相争うという内容なのだとか。

歴史は嫌いじゃないし、これなら少しは楽しめるかもしれない。果穂が今流行はやつてると言っていたシリーズだし、寝る前に暇だったら、まあ試しに読んでみるか。

そんなことを思いながら、わたしは茹ゆだった体をゆっくりと湯船から起き上がらせた。

考え事をしたせいか長湯になって、肌が海老みたいなピンク色に染まっている。

むう……これも、あの帆影トカゲちゃんのせいだ。



「——実にくだららないですね！」

翌日、放課後。

例によって文芸部室を訪れたわたしは、伊井坂先輩ゆうべに昨夜読んだ本を叩き返した。

本のタイトルは『現前する英雄列伝』。

歴史上の人物に関わりのあるアイテムを手に入れた能力者が、そのアイテムに遺された記憶から元の持ち主の分身を顕現させ、勝ち残った者が全知を意味する「地球の記憶」を手に入れられるというゲームを行う——というのがあらずじだ。

荒唐無稽な話だけど、それはまあ、ファンタジーなんだから文句はない。

問題は、全然別のことだ。

「うーん……これも気に入らなかつたかい？ 幅広い層に人気のシリーズなんだけど」
 憤懣やるかたないわたしに、伊井坂先輩は戸惑ったようだった。駄目で元々のつもりで押し付けてきた前回のアレとは違つて、今回はわたしも気に入ると思つていたらしい。

「おい映、文芸部の室で本を粗末に扱うな。なにがそんなに不満なんだよ？」

兄が『英雄列伝』を手に取つて、ぺらぺらめくりながら咎めてくる。そんなに聞きたきや答えて進ぜよう。

わたしは兄から『英雄列伝』をひつたくると、わたしが問題だと思つているキャラクタのイラストが載っているページを開いて突き出した。

兄と伊井坂先輩、そして帆影先輩がのぞき込んでくる。

「過去の偉人を現代に呼び出すのはいいとして……なんで尉遅恭うっちききょうだとか鬼小島弥太郎おにこじまやたろうだとかが女の子になつてるんですか？」

一応、ネットで元ネタになつた人のことも調べたが、二人ともむさくるしいオジサンだった人だ。魔法少女みたいな格好をして、自分の体より大きな武器を振り回す美少女なわけがない。

わたしの指摘に——しかし三人は明確な反応を見せなかつた。帆影先輩はいつもと同じ

無表情、兄と伊井坂先輩は「ああ、それね……」的な、曖昧模稜たる態度だ。

取りなすように口を開いたのは伊井坂先輩だった。

「まあまあ。歴史上の人物のエッセンスを抽出して女体化にょたいかしたキャラなんて、昨今よくあることだし。上杉謙信うえすぎけんしんが女性だった説とか、昔からある男装の麗人異聞の延長だと思えば

……」

「これは異説なんてレベルじゃないでしょう。こんなキャピキャピした武将がいるわけないし。そういうのが当たり前に流されるのって、変ですよ」

わたしの至極真つ当な指摘に反応したのは、きよとんと瞬きした帆影先輩だった。

「妹さんは、登場人物が性転換しているのが気になるんですか？」

性転換せいせんかんって……ややこしい訊き方してくるな。

「……いえ、別に性転換が悪いというわけじゃないですよ。性同一性……って言うんですか？　そういうので苦しんでる人がいるっていうのも解ります。

でも、この場合は実在したか、したと言われる人物を扱ってるんです。当時の文化や男女観の中で活躍した人の性別を変えちゃったら、ひととなりが歪よこしまんじやうって言うか………彼らの人生への侮辱になるんじゃないですか？」

そうだ。これを言いたかった。偉人伝に材を採りながら、リスペクトが足りないのでは

ないだろうか。

「まあ、そう言われちゃうと……」

「否定はしづらいけども」

兄と伊井坂先輩も大勢で同意してくれたようだ。今日こそは、わたしの言い分がこの場で認められる——かと思われた時、

「それはどうでしょう、妹さん」

またしても、帆影先輩が余計な口を挟んできた。兄を挟んで向こう側に座っている先輩が、いつの間にかこちらに向き直っている。

「なんですか？ 帆影先輩……」

口いっぱいの反感を込めて言葉を吐き出したつもりだったけれど、帆影先輩は一向に構わず、いつも通りの淡々とした調子で返してきた。

「性別の転換というものは、この世界でそう珍しいものではありません。

たとえばコブダイは、体の小さな内は全ての個体がメスで、体が大きくなるとオスに性転換して、メスを率いてハーレムを作ります。これをせいせいせんじゆく雌性先熟じゆうくといいます」

またハーレムか……海の風紀はメチャクチャだ。

「体が小さい時期は成体のオスに守らせて生き残り、自衛できる大きさになった時点で次

の世代のメスを囲って子作りを始める。子供を産むメスと、守護者としてのオスを一個体が兼ねて、変態しながらリレーで行うことで一切の無駄なく一生を過ごせるわけです。

さらに、オス同士は力を競ってハーレムを奪い合うことで競争原理まで発生させ、強者の遺伝子を後に残していきます。

まったく、コブダイの一生には捨てる場所がありません。実に合理的な生き物です」
帆影先輩は相変わらず平坦な調子で解説したが、語り終えたところでほう、と息をついた。本気でコブダイの機能性に感心しているらしい。

「あのボネリムシも、性別が未分化の内にメスに接触されればオスに、そうでなければメスになるという性別決定をします。『なにもなければメスになる』という性質を拡大解釈すれば、ボネリムシもまた環境に応じて性別を変化させる生き物と言えるでしょう」

またボネリムシの話か……メスがオスよりずっと大きくて、オスを体の中で飼う生き物(※)だったつけ。どこまでわたしの前に立ちふさがる気なんだ……

うんざりしているわたしに気付いた様子もなく、帆影先輩は前のめりに主張してくる。

「ですから、戦争の時代から現代へ来るに当たって、故人の魂が性別を変えた肉体を得るのは、生物界に照らしてそうおかしなことではないと思います」

……何度言ったら解るんだろう、この人は。

わたしは額に手を当て、苛立ちを込めて髪をかき上げた。

「だ・か・らっ……わたしは人間の話をしているんです！ 不思議な魚がいるのは解りましたけど、人間にはそんなおかしな性質はありません」

兄が落ち着けどでも言いたげに袖を引つ張ってきたが、目もやらずに払いのける。これはわたしと帆影先輩の話なのだ。こういう変人とは恋人になんてなれないんだと、兄に示してみせなければならぬ。

「人間……」

帆影先輩はわたしの言葉の一部を切り抜いて舌に乗せ、何秒か味わった後、性懲りもなく話を続けた。

「人間の場合、妊娠の早期にテストステロンという男性ホルモンが多量に分泌されると脳が女性ホルモンを分泌しなくなって、結果として男性になります。逆に、テストステロンの分泌が少なければ女性になります。

——そう、少しボネリムシに似ています。初期のまま変異が起らなければ女性になる。つまり、考え方によっては、人間はおしなべて最初は女性なわけです」

「ということ……男はみんな、母親のお腹の中で性転換して産まれてくるわけか。人間の半数くらいが性転換してゐるって思えば、そんな大げさに考えることでもない気がする」

るな」

兄が引き取って、ポンと小さく手を打った。

……そんな風にナツトクしていいのか兄。自分が最初は女の子だったと認識するってことなんだぞ。

しかし、わたしは兄ほどチョロくない。トカゲ論法に甘々ではないのだ。

わたしも帆影先輩の方へ身を突き出す。逆側から帆影先輩が乗り出しているから、挟まれた兄は居心地悪そうに肩をすぼめた。

「……それは、生まれる前で、男も女もない状態から変わるってだけでしょう。性転換とは全然、別の話ですよ！」

帆影先輩は案外にあっさりうなずいた。いや、この人はなんでも、いちいち、こだわりがない。執着することがない。

そういうところが噛み合わない。プログラムを相手にしている気分になる。

「なるほど……しかし、人間にはもっと明確な、自然の性の変化があります」

「な、なんですか、それ？」

わたしが知らないだけで、そういう体質の人とかいるのだろうか……と、不安になってきたが、帆影先輩が言うのはよく知っていることだった。それは、誰でも知っていること

だった。

「前に、人間が子供を遺すのは、遺伝子を主体にした脱皮のようなものだと思います。親という古い細胞の塊から、新しい細胞を持つ子供に乗り継ぐのです」

……そういえば、転生について話した時にそんなことを言っていた。遺伝子が主体ってなんだよって話だけど……

「その考え方で言えば——」

わたしが思い出している内に、帆影先輩は微熱を帯びた声で続ける——

「妹さんは、お父さんが女性化した存在ということになります」

「気持ち悪いこと言わないでもらえます!？」

気が付くと。

わたしは、机に手を突いて立ち上がっていた。全身が悪寒に震えている。

予想外の剣幕だったのか、帆影先輩は目を見開いたまま固まっていた。小動物っぽくて少しだけ可愛いが、容赦の理由にはならない。

いつも通りすつとぼけた先輩へ、わたしは怒りのままに、袖をめくり上げた腕を差し出

す。

「なに言ってくれてんの!? わたし史上最大かもしれないくらいのキモさだよ! ほら、これ見てって!」

腕にびっしりと鳥肌が立っていた。……うう、あまりの拒絶感に指先が痺れてきたかもしれない……

「お、おい映。そこまで言っちゃ父さんが可哀想だろ……」

兄の言うことも解る。わたしだって別に、お父さんが嫌いなわけじゃない。嫌いなわけがない。

子供の頃から変わらず、わたしをお姫様のように可愛がってくれる、優しいお父さんだ。でも、それはそれ、これはこれ。

お風呂上がり到下着同然の姿で歩き回るとか、洗濯物をわたしのといっしょに洗うとか、歯ブラシを並べて立てるとか、絶対的NGを宣言せざるをえない。

だってお父さん、オジサンだし。

無理だし。

ありえないし。

わたしは息を整えながら、改めて思った。やっぱりこの人とは解り合えない。

そうしてそれを、きつぱりと言葉にした。

「——帆影先輩は、おかしいです」

「おかしい……ですか？」

先ほどまでの暴論より勢いをなくして、でもやっぱり無感動な声を出して、帆影先輩はころりと首を傾げた。自覚がない。

「普通の女子高生は、自分をお父さんの女体化だなんて想定する、不気味な思考はできません。」

なぜなら、なにをどうしたって気持ち悪いからです！」

「いや、だから父さん可哀想すぎる——」

「兄は黙ってて！」

……帆影先輩だって、お父さんが入ったすぐ後のお風呂とか入りたくないでしょ？」

お風呂好きだという帆影先輩なら、せめてその気持ちくらいは解ってくれるだろう。そう思っただけの確認だったのだが。

「はあ……」

帆影先輩は、やはりピンと来ない、といった風にきよとんとした目をしていった。

ただ今度は、首を傾げるのではなく、小さく頭を下げてきた。

「すみません。わたしには、そういうのがよく解らなくて」
 なんだそれ……

「よく解らないって、そんなわけ——」

「映！ いい加減にしろ！」

またしても兄が口を挟んできて——今度は、無視できなかつた。

声の調子もさつきまでと違っていたし、だから振り向いて見た顔が、思いのほか真剣だつた。

あ……れ……？ 怒ってる………？

ついさつきまでのたしなめる感じと違って、割りと本気で睨んできている。

な、なんだろう？ わたし、なにか言っちゃいけないこと言った……？ と、帆影先輩を見るが、当人は驚いたような顔をしているもの、わたしではなくて兄を見ていた。

その兄は、なおもわたしへ言ってくる。

「映。ずけずけしすぎてるぞ、お前」

「……………う……………」

そう言われると、先輩に対して失礼だったかもしれない。ちよつとタメ口になつちやつたし。普段の……他の人に対するわたしなら絶対にあんな風にはならない。

帆影歩。兄の初めてのカノジョ。わたしの常識の裏側にいる変な人。

この人を認めるといろいろな物が壊れてしまう気がして、どうしても、むきになってしまおう。

今も、そうだった。謝らなくちゃと思うのに、厳しい顔の兄を見ても、心なし戸惑っている帆影先輩を見ても、なんでか言葉が出てこなくて。

「もう……いいです！」

床置きしていたバッグを引っ掴んで、また、逃げ出すように文芸部から出ていった。

伊井坂先輩の「あ！ またおいでー！」という声だけが背中を追いかけてきてくれて、あなたは漫画研究会でしようと思いつつ、ちよつとだけ感謝した。

——いつもは百合の花の姿で歩いている廊下を花壇荒らしのように乱暴に行きながら、考える。

兄が帆影先輩の肩を持つのはいつものことだが、さっきの様子はそれと違っていた。あんな風な強さで怒られたのは、小さな頃に縁日で迷子になって二時間後に見つけられた時以来だ。

いつもと違ったのはなんだろう？ わたしが帆影先輩の非人間的な物言いを非難するのは毎度のことだ。今日だって途中までは、兄も疲れた顔をしてはいたけど怒ってはいなかった。

じゃあなんで、急に強い言葉で制止してきたのだろう。さっきの会話でいつもと違うのは………帆影先輩に、お父さんのことを訊いたことくらいだろうか？

………そういえば、帆影先輩のプライベートについては、お風呂好きということくらいしか知らない。

校舎を出て、夕方の空を見上げる。お日様は真上になかったけれど、夕日に灼かれた雲の色が目に沁^しみる。

閉じた目に残った光は、無駄に胸の大きな先輩の影^{かたち}をしていた。

「帆影先輩って………なんなんだろう？」

(※) ボネリムシについては角川スニーカー文庫刊『好きって言えない彼女じゃダメですか？ 帆影さんはライトノベルを合理的に読みすぎる』第二話を参照。

第五話

口
ボ
殺
し

——夜。

僕が向かい合うパソコンの画面には、今日もワープロソフトが起動している。

小説は遅々として進まず……つまり、遅々としたレベルで一時間に数行ずつだけ進んでいた。

午前を回ったら寝る準備を始めようと思っていたのに、パソコンの電源を落とそうとした矢先に始まった深夜アニメを見始めてしまった。

あまり興味のない、少女漫画原作のやつだったから初めて見たが、演出が面白かったのでついつい見続けてしまう。そのままAパートが終わって、CMに入った時の事だった。

パソコンの横に置いていたスマートフォンが振動して、メールが来たのを伝えてくる。

「伊井坂か……？」

こんな時間にメールしてくる知り合い、他に心当たりがない。共通して買ってるマンガの最新刊が出たりすると、真夜中に感想を送ってきたりする。他にSNSをやってる友達も多いだろうに。

しかし今日のメールは、伊井坂からではなかった。アドレスはだいぶ前に教えたけど、

メールをもらうのは始めの相手だ。

差出人欄に表示されている名前は「むらせかほ村瀬果穂」。映の親友で、ネット小説投稿サイトで書いたライトノベルが評価されて商業デビューを目前にした女の子だ。

ちよつと前、そのデビューの件でナーバスになって家出をして、映たちといっしょに捜しに行ったこともあった。今は心境を整理して、ともかく一冊リリースすることを目標に頑張っているようだ。

それでも、鉄のメンタルを持つてるといふタイプの子じゃない。この時間だし、なにか差し迫った相談でもあるのかと、少し警戒してメールを開く。

果穂ちゃんらしい、書いた人の緊張が伝わってくるような堅い文面が目に入ってきた。

『あまた天太さんへ

御無沙汰しています。お元気ですか。映に訊きいても、彼女、照れてしまうのか話してくれません。

こんな時間にメールしてしまい、すみません。でも、早めにお知らせした方がいいかと思ってお送りしています。

今日、校正の説明を聞きに会社に行ったのですが、そこでたまたま挨拶した作家の先生

から……』

本文の続きを読んで——僕は目を輝かせた。



翌日。

朝から上機嫌だった僕は、朝食の時、隣に座った映に不審そうに見られたが、果穂ちゃんから来たメールの件を話すと映も機嫌を良くした。

「へえ、兄に直接メールしたんだ。果穂、頑張ったじゃん」

まったくだ。果穂ちゃんは学校の授業もこなしながら、編集部との打ち合わせや作品の改稿に励んでいる。まだ高校一年なのにすごいことだと思う。深夜まで悩んでろくにペー
ジを埋められない僕には、想像もできない世界だ。

年下の活躍に不思議と焦りを感じないのは、まだ現実味が追いついていないからだろうか。僕に向上心が足りないだけかもしれないけど。

それよりも今の僕は、週末の予定が埋まっていることに浮かれていた。

登校時、映は僕より五分ほど早く家を出る。近所の人に、僕と連れだつて歩いているのを見られたくないらしい。町内のおぼちゃんたちの生暖かい視線まなざしはよく知ってるし、気恥ずかしい気持ちには同様なので、僕も嫌がらせで強引に付いて出たりはしない。

学校の最寄り駅に着くのも電車一本分ずれて、僕は一人で校舎へ続く路を行く。

朝の時間、駅から学校までの道はそのほとんどが生徒で埋まる。その中を僕は、前を行く同輩たちをどンドン抜かしながら歩いてきた。

特に足が速いわけではない。遅くもないと思うけど、それ以前に周りが遅いのだ。友達とはしゃいだりスマホを見ながら歩いているのだから、友達もスマホを使う趣味もない僕は相対的に足が速くなる。

生活がスマートでいい………と言つては開き直りだろうか。

入学当初はいかにも景気悪くうつむいて、前方と足下とを半々に見ながら黙々と歩いていた。通学途中になにか面白い景色があるわけでもない。考えるのは昨日の自分のことと、今日の自分のこと……

でも、今はちよつと違う。

目は常に前を見るようになった。僕が乗ってくる電車より少し早く着くものを、彼女が

使っているからだ。三日に一回くらいは先に行く背中を見つけられたし、足取りののんびりした彼女に追いつくのは簡単だった。

今朝も、ふわふわとたどたどしいような足運びをしている小さな背中を見つけることができた。髪質の軽さからか、ちよつと強い風が吹くたびに視線が遮られるらしく、何度も髪をかき上げている。

……などと一方的に観察していると、まるでストーカーだ。足を速めて、彼女へ並ぶ。

「帆影^{ほかげ}」

並ばれて、帆影は僕に気付いた。ふっと顔を上げた彼女と目が合う。視線がぶつかった瞬間に喉が詰まって、次の言葉を忘れてしまう。それは帆影も同様だったのか、口を開きかけたまま、何度かまばたきした。

見つめ合って、立ち止まって——このままだと通行の邪魔になると気付いた頃、

「お……はよう」

「おはようございます」

ようやくあいさつを交わし合って、僕らは歩みを再開した。

目を前に戻して、なんとなく視線を感じて帆影を見ると、また目が合った。帆影の目が揺れた気がしたが、揺れたのは僕の目玉の方だったかもしれない。それから帆影が目を前

に戻して、僕も前を向いて、歩いた。

僕も帆影も口数の多い方ではない。当たり前障りのないような会話を始めるにもきっかけが要る。

だから、話していたわけじゃない。でも、他の人と同じようにのたりのたりと、足の裏で地面を味わうようにゆっくり進むようになっていた。

坂道のアスファルトに早朝の白い日差しが反射して、十字星の形の光が路面ににじんでいる。それを避けるように帆影の方を盗み見て、ふと思いつく。

僕は以前、この通学路で妹に殴られた。僕が帆影を好きになった理由を邪推した映が、僕のボディを強打したのだ。その時、映はこう言っていた。

『人間を！ おっぱいで！ 決めるな！』

……たしかに。今、隣を歩く帆影の姿を見ても、その胸は大きい。制服越しにも明らかなくらいだ。姿勢が良いせいもある。正面へ張られた胸が特に強調されている。帆影歩を表す特徴の一つではあるだろう。

僕が帆影の大きな胸を好きか嫌いか、気になるかどうかを言えば、それはもう、圧倒的にポジティブだ。

風呂場から送られてきた写真の中の湯船に沈んだシルエットも、下着売り場の試着室で

一瞬だけ見えた胸元も、網膜もうまくから脳に転写されて細胞にこびり付いている。真善美という言葉に意味を与える膨らみの姿は心に刻み込まれている。

でも、映は間違っている。僕は胸の大きさで好きになる人を決めたりしない。実際、タレントでもマンガのキャラクターでも、胸に注目してファンになったりはしない。

人間をおっぱいで決めたんじゃない。帆影でおっぱいを決めたんだ。

その順番は絶対で、逆はありえない。「青頭巾あおずきん」の僧侶が恋人への愛と食人を混同したのと同じく、帆影への想いが豊かな胸への関心に転移しているにすぎないからだ。

銘ずべし、おっぱい先に立たず。と。

心の中の頭をうんうんとうなずかせ、自分の信念に納得していると、帆影が小さくあくびしたのが判った。すぐに口元に手を当てて隠したけれど。

「眠そうだな」

帆影は噛み殺した息を整えるためにか、一拍置いてから答えてきた。

「昨日は夜から本を読み始めて、途中でやめようとしたんですがやめ時が見つからなくて、数時間しか眠っていません」

帆影は顔を上げて僕を見ただけれど、太陽が視界に入ったのかまぶしそうに目を細めた。

それで寝不足とは帆影らしい。僕の知る限り、基本的には規則正しい生活を送っている

帆影だが、本のことになると歯車が壊れるようだ。

「そんなに面白い本なのか？」

「はい。柳生十兵衛やぎゆうじゆうべえが朝鮮柳生の呪術を受けて別人の体に宿らされ、復讐を考える話で」

「……なんかすごい話だな」

それは眠れなくなりそうだ。という僕の感想に、帆影は小さくうなずいた。帆影にしては少しせわしない仕草だった。そんなに面白かったのだろうか。

「はい、すごいと言うより——」

彼女がなにか言いかけたところで、残念ながら校門にたどり着いてしまった。

朝練でランニングしていた酒々井しすいさんが帆影に話しかけてきたこともあり、僕らは別れて昇降口へ向かった。

「それじゃ……また後で」

別れ際にかけて月並みな言葉に、帆影は反射的にうなずいて、その後から短い声を追わせた。

「はい」

——ほんの数分、並んで歩いただけだったけれど。

朝から顔を見られて、声を聞けて、隣を歩けた。ただそれだけで、自然と口が緩んでしまふ。

満足なような気もするし、少しだけ物足りない気もする。

帆影はどうだったんだろう……？

僕と同じように、顔を見ただけで胸が溺れるようになったり、相手の一挙一動に喜んだり不安になったりしているのだろうか？ いつも涼しげな彼女の顔からは、よく解らない。いつもの問いを頭に浮かべながら、僕は上履きに収めた爪先つまさきをトントンと廊下に馴染ませた。



漫画研究会は研究会となつてはいるが、一応、正式な部活動だ。部員も、僕と帆影二人きりの文芸部よりは多い。確か五月の時点で六人はいたはずだ。

しかし原稿や資料、それらとは全く関係なく部員が持ち込んだマンガや玩具の山で、机も柵も床も埋まってしまっている。何度かお邪魔したこともあるが、足の踏み場に困った覚えがある。

我がが文芸部室はと言えば、本は漫研に負けず劣らず多いが、歴代の部員も僕らも部屋は整頓されていないと落ち着かない性質^{たち}だった。本棚は整然としていて、床や机の上はこざっぱりとしたものだ。

だから伊井坂^{いゐさかりん}隣は、雑談したい時だけではなく、なにかスペースの要る作業をしたい時にも文芸部室を訪れる。

今日の放課後の伊井坂は、文芸部の机の上でプラモデルを広げていた。

前期に放送された巨大ロボット物アニメのグッズで、主人公の友人が乗る機体を精密に再現している。作品は、クールだが闘志を秘めた主人公と野望に燃えるワイルドなライバルが、意地とプライドをぶつけ合う内に奇妙な友情で結ばれるというシチュエーションが女性に受け、近年^{まれ}希な大ヒットを飛ばした。

しかしファン層の偏りからか、主役級はともかく伊井坂が作ってるような脇役のプラモデルはあまり売れず、ワゴンセール^{ワゴンセール}の常連になっていたはずだ。

——ということ、先生に用事を頼まれたせいで遅れて部室へ行った僕は、入ってすぐに見て取った。キャラクター物の模型にはそこそこ詳しいつもりだ。

部室には帆影ももう来ている。部室で所有する本を読んでいるが、それとは別に文庫本を手元に置いていた。タイトルからして、今朝言っていた本かもしれない。

顔を上げた帆影と目が合って、彼女が口を開きかけた時、軽く背中を押されてつんのめる。入ったところで立ち止まっていた僕を押しつけて、映が入り込んできたからだ。

来る途中の廊下で会って、そのまま付いてきた。怒って出て行った数日後にケロリと顔を出せるあたり、我が妹ながらたくましい神経の持ち主だ。

入るなり、映は微妙に鼻白んだ声を出した。

「なんでロボットのプラモデルなんて作ってるんですか？」

伊井坂は、片目をつむって手元の距離感を測り、前腕のパーツに小さなポリキャップを挟み込みながら答える。

「これの原作はイケメンいっぱいアニメで、あたしのような乙女たちに大ウケでね。フイギユアが欲しかったんだけど高くて手が出なくて。安く買えるこれを手に入れたってわけさ」

「イケメンじゃなくてロボットじゃないですか、それ」

「乗ってるキャラが好きなんじゃよ。あと、ソシヤゲで使えるコードが付いてくるし、同人誌うすいほん描く時の資料になるし」

手先が器用なせいもあってか、伊井坂はこういった手間のかかる模型作りにも抵抗がないようだ。今時貴重な資質だろう。

ちなみに僕も、子供の頃からこういった物が大好物だ。

「へえ、さすが大手メーカーだけあって、よく出来てるなあ」

ふらふらと寄っていった、伊井坂の手元をのぞき込んでしまう。最新解釈の合わせ目処理や引き出し式の関節機構に心が躍る。

おつ、と伊井坂が顔を上げた。

「シヤケ先生、こういうの好きなんだっけ？」

「ああ。日進月歩で進化する成形技術の精華は、もはや芸術の領域だよ。キットの完成度自体もさることながら、本当にスゴいのは、それだけの物を誰でも簡単に組み立てられるようになされた工業的な工夫の数々で——」

「うわ……早口になる奴……」

体ごと引いてうめく伊井坂。映も露骨に呆れた顔をしながら、いつもの席へ腰を下ろす。

「……ホント、馬鹿馬鹿しいですよ。巨大ロボットとか」

そして、開幕から恒例の暴言を飛ばしてきた。これは聞き捨てならない。

「なんだ、やぶからぼうに」

映はやれやれと大げさにポニーテールを左右に振って、肩をすくめて見せた。

「子供じゃないんだから。高校生にもなってロボットロボットの言うの、恥ずかしくない

の？」

「……こいつ。時に正論が罪もない人間を追い詰めると知らないのか。」

「それは……いいだろ。好きなんだから」

としか言いようがない。誰にも迷惑をかけていない以上、開き直って悪いこともないだろう。

両腕を胴体に接続してキットの上半身を完成させた伊井坂が、満足げに吐息して笑った。

「まあまあ、ロボ好きなのはシャケ先生だけじゃないよ。それこそ、ラノベ原作のロボット物が来期にアニメ化されるしね。なんだかんだ、^{すた}廃れても廃れきらないジャンルだよ」

「小説なのにロボなんですか。わけわかんないですね」

映はとにかくミもフタもない。理屈になつてないのに解る気がするのも悔しい。

しかも非難はそこで止まらなかった。映は、いつそロボに恨みでもあるかのように僕へ向き直って続けてくる。

「だいたい、巨大ロボなんて作れるわけじゃないでしょ。時々ニュースで見えるけど、子供サイズのロボットでも二本足で歩かせるのに苦労してるじゃん。」

それが一〇倍も二〇倍も大きくなったら無理は一〇〇倍でしょ」

「そ、それはやってみないと判らないだろ？ 今は無理でも、いつかは出来るかもしれないな

いし」

思わずむきになって反発する。映の言うことは印象論にすぎない。映も引き下がらず、いつも通りの睨み合いになる。

伊井坂が「あん、またか……」と半笑いの声を出して、それから帆影の方を見やった。

「ホカちゃんはどう思う？」

僕と映の視線もさつと帆影へ向かう。そうだ……帆影なら、この小憎たらしい妹の面白くもない現実主義をひっくり返す奇論をひねり出してくれるかもしれない。

帆影はその少し前から本を閉じていた。その本と文庫本の両方に手を置いて、目を落としている。そもそも話を聞いていたのかいないのか、少し眠たげなその目からはうかがい知れない。

一拍の後、顔を上げて——帆影はおもむろに口を開いた。

「妹さんの言う通り、巨大な人形ひとがたというのはナンセンスですね。考えるまでもなく、ありうべからざるものです」

「えっ!？」

ま、まさか……帆影も巨大ロボット否定派だとは。それにしても、

「ありうべからざる……というのは言いすぎなんじゃ？」

いかにも大げさな表現だ。次々とダイナミックな仮説を開陳する帆影だが、ここまでの断言は珍しい。

しかし帆影は、全く表情を崩さず否定した。

「いいえ」

いつもと違って、つんと弾くはじような声の張りがある気がする。

「アメリカの建築家ルイス・サリヴァンは『形態は常に機能に従う』と言いました。生物だっておおむねにおいてそれは変わりません。

形態にはサイズも含まれるでしょう。機能と形状には、それにふさわしいサイズがあります」

たとえば——と、帆影は右手の親指と人差し指をくつつけるようにした。ごく小さい物を示すような仕草だ。

「体長数ミリの昆虫であるノミは、全長の一〇〇倍もの高さへ跳躍します。これが人間のような大きさになったらどうなるでしょう？」

僕と映は顔を見合わせて言葉が出なかつたので、真っ先に口を開いたのは伊井坂だつた。「何百メートルも飛び上がれる？」

素直に考えればそうなるが、帆影は首を横に振つた。

「それどころか、自分の重さでろくに動けないでしょう。」

ノミの筋肉の質自体は人間のそれと大差ありません。それなのに体が大きくなるほど体重が加速度的に増大するわけですから、それに見合う筋肉量は、とても元の形状には収まらなくなります。

しかし昆虫は外枠の決まっている外骨格ですから、自重にふさわしい筋肉量が無制限に増やすこともできません」

かと言って骨格の形状や配置が変わってしまったら、それはもうノミではない。

「ノミは数ミリの小さく軽い体に、跳躍と吸血に特化した体構造があつて初めて驚異的なジャンプができるのです」

「……人間と巨大ロボットも同じってことか？」

帆影はコクンとうなずいて、伊井坂が作っているプラモデルを指差した。

「形状にはそれにふさわしい形と大きさがあるということです。大きい物には大きい物なりのメカニズムがあつて、それを体現した形を持っているはずです。」

その模型も、その大きさだから安定するのであつて、本来想定した大きさではすぐ分解してしまふでしょう」

伊井坂の作っているプラモの縮尺は1/60^{スケール}。原作アニメの設定上の全長から六〇分の一

に縮小したという意味だ。これだけだと大したことないように聞こえるが、実際の「大きさ」は体積だから、縮尺は三乗される。

そこにあるプラモを、二一六〇〇〇倍に大きくしたとすれば……まあ、現実感はない。

旗色悪く沈黙する僕に、帆影はとどめとばかり言葉突き込んできた。

「人間の形は、最大でも二メートル前後くらいまでの身長とそれに適切な体重で、この星の環境に適するように収斂しゅうれん進化したわけですから。それより大きくても小さくても、生き抜くには不利になつたということです。

——その体型を極端に拡大・縮小するという発想自体が、そもそもナンセンスと言えるでしょう」

根本こんぽんッ……！ 根本ねもとから……巨大ロボの存在意義を刈り取られた！

……そう言われてしまうと、たしかに「ありうべからざる」存在というのも解る気がする。ロボットだけでなく、巨人の存在もアウトだろう。人間は内骨格だから筋肉量は外側に増やせるとして、体重に見合うだけ筋肉をまとったら、どこもかしこもぶつとくなくて姿勢も変わり、とても人型には見えない物になってしまう。

ロボットの場合は素材や動力次第で条件が変わるだろうけど、重すぎれば脚が折れたりバランスが取れなかつたりするだろうし、軽すぎれば風に煽られる。人間の前後に扁平な

体型は、巨大ロボほど重いことも表面積が広いことも想定していないからだ。

……いや、そんなざつくりした想像すらしなくても、ある機能を持った形をそのまま巨大化すること自体が馬鹿げてるってことか。

悔しいが、どうしようもなく納得できることもある。

僕が帆影でおっぱいを決めるように、立体の形状はサイズによって決めるのだ。その逆はありえない。そういうことなんだ……それが真理なんだ。

ふへっ、と。

鼻で笑う声に見やれば、映が嫌みったらしい笑顔をこちらへ向けて勝ち誇っていた。

「ほーら、やっぱり。巨大ロボなんて無理の極み。ありがたがってるのは兄みたいに幼稚な坊やだけなんだから」

くっ……「どうよ？ 今日のカゲちゃんはこっちサイドみたいだけど」とでも言いたげなツラしやがって……

「ま、こういう日もあるって兄。元気出しなよ。今日の晩御飯はハンバーグだったよね？ ソースに入ってるマッシュルームあげるからさ」

お前が嫌いなだけだろ、それ……

巨大ロボを否定されたことより妹への屈辱が怨めしくて、うめき気味に帆影を見る。

目が合って、帆影の唇が小さく開いて。

——目をそらされた。

……………えっ!?

……これは、まさか、ロボなんてあんまり子供っぽい話題を引きずるから呆れられている……のか?

だとしたらマズい。せつかく告白して、まずまずうまく行っていたのに、こんなことで愛想を尽かされるのは御免だ。

……どうしよう? どうするべきだ?

一瞬、大人になってロボ支持論を捨て、帆影の言うことに合わせようかと思った。

……だけど、それはなにか違う。いくら帆影が好きでも、なんでも迎合するのが彼氏ではないはずだ。

それに、僕にもまだ言うべきことはあった。

「待ってくれ帆影……まだ結論を出すのは早いんじゃないか?」

帆影は一度ちらりとこちらを見てから、ゆっくり向き直って、

「……どういうことですか?」

さつきまでより小さな声で訊き返してきた。心なしうつむいて、いつも真っ直ぐに目を

見て話す彼女らしくない、なにかをうかがうような上目遣いだ。やっぱり距離を感じられてしまったのかもしれない。

タイムリーと言うべきか、僕は週末に予定があった。奇しくも、さつき伊井坂が言及していたロボにまつわる予定だ。

僕は帆影をのぞき込むように身を乗り出して、提案した。

「論より証拠だ。実物を見に行こう」



待ち合わせは、近場のターミナル駅の改札内だった。日曜の朝なので構内はそこそこに混み合っていて、待ち合わせ相手を見つけるのに少し時間を食った。

彼女が、いつもと違う装いをしていたからということもある。

全体的に淡い色合いのコーディネートで、ワンピースの上にボレロのような物を着込んでいる。テレビや雑誌のグラビアで見えるようなトレンドとは違うかもしれないけど、ふわりと落ち着いた雰囲気がよく似合っていた。

見慣れた制服姿よりいくらか柔らかいシルエットになった帆影は、肩をすぼめるように

して両手に小振りなバッグを提げ、駅ナカのコンビニ前で所在なげにたたずんでいる。人の波に琢磨たくまされてごろごろと鳴る雑踏の中で、見慣れた彼女の姿は逆にくつきりと浮き上がって見えた。

思わず駆け足になりそうになって、思い直して立ち止まり、改めて身繕いする。家にあつた中で一番垢抜けた服を選んできたつもりだが、元々の中身が垢抜けないせいかどうかどうにも落ち着かない。

髪に手櫛まで入れ、改めて足を速めて近付くと、帆影もこちらに気付いたようだった。髪留めの位置を据え直す手を止めて、一步だけ踏み出してくる。

「ごめん……待った？」

なんだこいつ、まるでベタな漫画で見るデートのようなセリフを言っていやがるぞ、と自分自身が冷や汗の温度のツツコミを入れてくる。

「いえ」

対して帆影は、普段通りの淡白な答えだ。この素っ気なさに安心するようになってしまっているのは良いことなのか悪いことなのか。

「約束の時間まで三〇分あります」

言われて反射的にスマホを確認すると、確かに三〇分ほど早く着いてしまっていた。遅

延やなんやに備えて早めに来たのだが、帆影はいつから来ていたのだろうか……？

帆影も時間を見ていた。それを目で追って、彼女が腕時計をしているのに気付く。男物に比べると半分ぐらいの太さしかない革ベルトが付いた、オモチャみたいかわに小さな時計だ。

——女の子の時計だ……と、ただそれだけの感慨に呼吸が止まった。普段の帆影は時計をしていないから、実用品でなくアクセサリに見えたせいかもしれない。

小さく首を傾げながら、くたりと曲げた左手首を見下ろす帆影の姿は、よそ行きの服装とあいまって僕の頬から力を抜かせる。

休みの日に、いっしょに出かけたから見られる仕草。その事実がじわじわと胸をくすぐってくる。

あんまりまじまじと見ていたせいか、帆影はつと顔を上げてまばたきした。

「どうかしましたか？」

「あ、いや……良い時計だなと」

「……はい。新巻あじまきくんと出かけると言ったら、お祖母ばあさんが用意してくれました」

帆影のお祖母さん、僕のこと知ってるのか……具体的にどう聞いているのだろうか。想像すると照れくさいような怖いような……

それはともかく、帆影は時計を褒められて少し顔をほころばせたようだった。心なし満

足そうに、ほうと息を抜いている。

ロボの件でちよつと溝ができたかと心配していたので、不機嫌でないとは知れて胸を撫で下ろした。あの時計、自分でもお気に入りだったのかもしれない。

ちなみに映は、布以外の物を肌に触れさせるのが苦手なので腕時計の類は滅多にしない。それはまあ、どうでもいいけど、

「三〇分て……いくらなんでも、ちよつと早く来すぎじゃないですか？ 重つ……兄もだけど」

その時計を持たない妹が、僕のスマホを引つ張つてのぞき込みながら暴言を吐いた。

気を悪くしていないかと帆影を見ると、彼女は平気な顔をして、ただほけつとして映を見ている。「重い」の意味がよく伝わっていない気もする。

僕は緩んでいた顔を固めて、妹の手からスマホを取り返した。

「お前は来なくてもよかつたんだぞ？」

——妹同伴であることから解る通り、今日は帆影とのデート……というわけではない。先日、巨大ロボットについての話で、帆影はその存在を全否定した。僕としてはその考えに異を唱えたくて、ちよつとよく誘われていたイベントへ帆影にも付いてきてもらうことにしたのだ。

動きやすさ優先の、いつも休日にシヨッピングへ行く時の格好をした映は、頭痛かなにかをこらえるような顔をして答えてくる。

「だって……果穂がいるんでしょ？ 兄と先輩二人だけで行かせるわけにはいかないし」
たしかに、今日のイベントに呼んでくれたのは果穂ちゃんだ。この間の夜のメールで案内をくれた。でも、

「なんで僕らが二人で行っちゃいけないんだよ？」

「……果穂はわたしの友達なんだから、わたしも行くべきでしょ」

そう言われるとそれまでかもしれないが、微妙に目をそらしているのが気になる。言いたいことはなんでもずけずけと口にする妹にしては齒切れが悪い。

しかし、こんなところで問い詰めても始まらない。それに、三人で立ち止まっていたら通行の邪魔になりそうだ。

「……それじゃ、ちよつと早いけど、行こう」

「はい」

帆影がこくりとうなずくのを見てから、乗り換え先のホームへと歩き出す。せつかな映はすでに先行していた。

帆影はちよつとつむいて、それからまた髪留めに手をやってから、僕の後を付いて来

た。

土日のダイアに気を付けながら電車を乗り継ぎ、海岸付近の駅に着いたのは一〇時過ぎのことだった。

線路沿いに数分歩けば、ショッピングプラザとオフィスビルが一体になった複合施設が建っている。そこが今日の目的地だ。

天気は快晴。並木道の木々は初夏の日差しに熱せられて緑の匂いを振りまいている。僕は日向の側に回って帆影と並び、手庇てびさしを作って行く手を眺める彼女の横顔をうかがう。

頭上の枝葉を塗って差し込む光に細められていた彼女の目が、不意に見開かれた。

「……あれですか？」

まだ数十メートルほども離れているけれど、その姿がはっきり見える。僕も実物は初めて見る、今日のイベントの目玉だった。

「ああ。あれが『幻げんじゆう獣駆除会社Li・o・t』に登場するロボットの等身大立像だ」

——『幻獣駆除会社Li・o・t』は、アニメ版の放送を間近に控えたライトノベル作品だ。

人口の密集した都市部に巨大モンスターが現れるようになった地球を舞台に、そのモンスターを市街地で迎撃するために作られた人型ロボット「リムド・チャリオット」に乗って戦う民営業者の若者たちを描いたアクション巨編。

脂の乗ったベテラン作家が満を持して放った、大分おおわけにすればメカ物でありながら、お仕事物としてもポリテイカル・サスペンスとしても大人の鑑賞に堪える話題作だ。それについて、ジェットコースターのスピード展開で飽きさせず、せっかちな若者の心こころも捉とらえている。

ライトノベルはあまり読まない僕も、これだけは必ず発売日に買ってその夜の内に読んでしまう。それくらい好きな作品だ。

そのことを知っていた果穂ちゃんなつみが、偶然会った原作者の先生からサイン会の見学に誘われたから、僕も来てみないかと気を利かせてくれたのだ。

そして今日は、1リアル／1サイズの登場ロボット立像の正式公開日でもあった――

「――ほら見る」

全高一五メートルを超える立像は、アニメ化のプロモーションとこの施設のランドマークを兼ねて建造されたオブジェで、大人でも一踏ひとふみみにできそうな足の周りには早速人集ひとだかり

ができていた。

オブジェの足下を囲む進入禁止の柵に張り付いて、高級おたかそうなカメラをパシヤパシヤや
ってるのはオタクの人たちだろう。しかし、遠巻きに「なにあれ？」「ガ〇ダム？」とか
言い合いながらスマホをパシヤパシヤやってるのはいわゆる一般の人たちだと思う。

僕らのすぐ目の前には親子連れの姿もあって、小さな子供をお父さんが抱き上げて巨大
ロボの勇姿を見せてやっていた。

鉄骨の内部フレームが完成して以来、つい今朝までは幕で覆われていて誰も全貌を見る
ことができなかった。今日が公開初日ということもあって人出の多さにつながっているん
だろう。

けれど、そんなことを知らずに通りがかった人たちまで立像に目と足を止めている。
なんだかんだ、そこに巨大ロボットがあれば人はパシヤパシヤやってしまうものなのだ。

「やっぱり大人気じゃないか。みんなロボットに釘付けだよ」

「そんなの物珍しいだけでしょ。今時の大衆はSNSでイイネもらうことしか考えてない
から」

立像の設置された広場の群衆にまぎれながら、やれやれと冷めた目をして言い捨てる映
しかし、

「いや、お前も。パシャパシャやってるだろ……」

僕らは兄妹並んで、丈高くそびえるロボットたけたかの立像に向かってスマホのカメラを鳴らし続けているのだ。

——蒼天に突き立つ白い巨体。それに装甲の隙間からのぞくフレーム部分の金属色が相まって、五感にのしかかる圧倒的マッス量塊。装甲面が間延びしないようびっしりと、かつ強度を損ねないよう計算されて配置されたパネルライン……止まらない。現世に具体した巨大ロボを前に、シャッターほうえつと法悦ためいきの溜息が止まらない……

人の形をして遥かに巨大。二足で直立する重力への叛骨格はんこつかくは、まさに現代のバベルの塔だ。学校ならば屋上に近い高さにある眼差カメラアイし、地面よりも空に近いその視界を想像すると、世界観の塗り変わる高揚を覚える。

中身は色気もない鉄骨だと頭では解つていても、それは胸を熱くする偉容なのだ。美術館で塑像を見る時に、石膏の塊だと知りつつダイナミックな存在感を感じるのと同じことだろう。

創作の世界から顕現した巨体をたつぷりと「浴びている」僕をかたわらに見て、ただぼつとたたずんでいた帆影が、ふと合点が行ったように手を打った。

「これが、伊井坂さんがイベント会場に出没すると言っていたローアングラーですか」

「違う……いや、物理的な意味は合ってるけど。まあ違う」

僕は広場中で撮影に興じる人々の名誉のために訂正を入れ、シャッターを切る手を止める。すぐ隣で僕を見上げていた帆影と目が合った。

帆影は「そうなんですか」と少し僕の方を見ていたが、ややあつて自分もスマホを出してカメラを起動したようだった。

しかしアングルが決まらなかったのか迷っている内に、例の親子連れがカメラの前を横切つて、それを機にか、帆影はそのままだらりと手を下げた。

……ロボの実物（？）を見てもまだ、ピンときていないようだ。

「ちなみであれば、主人公しか使いこなせない設定の専用機なんだ」

「専用ですか」

「うん。いいよな、専用」

「はあ……しかし、道具なら誰でも等しく使いこなせる方が理想なのではないかと」

「それはそうだけど……」

さり気なく（？）設定を語ってみても帆影の琴線に触れる様子はなく、会話が途切れた。話せば話すほどドツボにはまる気がする。

それでも僕に諦めるつもりはなかった。今日は、少しでも帆影とロボについて通じ合う

ために来たのだから。

巨大ロボを実際に見てもらおうと今日のイベントに誘った時、帆影はただ、

『わたしも行っていいんですか？』

と首を傾げただけだった。特に嫌なようでもなかったのも、是非にと頼み込んだ。趣味を押し付けるつもりはなかったけど、僕が「いい」と感じているものを少しでも伝える努力をしたかった。

僕には帆影のような知識はないし舌つ足らずだけど、彼女と同じように臆さず自分を表現したいと思っている。帆影に出会えたからこそ、そう思う。

……もちろん、単純にカノジョと休日に出かけてみたいという欲もあった。とはいえ、あの状況からデートというのも無理があったから伊井坂も誘ってみたのだが、別の用事があるとかで今日は来ていない。

結果、妹はなという悪性の瘤こぶを引き連れての外出になったわけだが……まあいいか。映の言う通り、映を連れて行った方が果穂ちゃんも緊張しないでいいかもしれない。彼女は今、サイン会の準備を見学しているはずだ。

そんなことを考えながら、なかば無意識に写真を撮りまくっていたが、いつまでも撮影タイムというわけにもいかないだろう。映も飽きる頃だ。

早く着いたせいもあってサイン会まで時間があるけど、とにかく動こう——と、不意に気付く。

「帆影っ……大丈夫か？」

人波に揉まれながらもすぐ隣にいた帆影が、うつむいてぐったりしているように見えた。ハツとして肩に触れると、ふらりと見上げてくる顔が蒼い。

「すみません、人込みに慣れないもので……でも、平気です」

請け負う声からして頼りない。額に汗をかいて、とろんとした目をしている。混雑だけでなく、暑さにもやられているのかもしれないなかった。

僕は、うろたえた。

「平気じゃないだろ。休めるところを探そう」

会話の聞こえていた映——さすがに心配そうに帆影を見ていた——を目で促しつつ、僕は半ば強引に帆影の腕を取って歩き出した。

複合施設の下層はショッピングセンターになっていて、若者向けのショップやレストランが入居している。休日とあってどこも混み合っただけはいたが、まだ昼時には早いせいもあって喫茶店に席を取れた。全国チェーンの、比較的安価で手堅い店だ。

店内に行き渡る冷房が、焦りきっていた頭をほどよく冷やしてくれた。

「ごめん……帆影」

テーブル越しに彼女と向かい合い、僕はすっかり恐縮していた。ロボに浮かれ上がっていた心もしなびて枯れている。帆影が具合を悪くしているのにも気付かず、呑気に写真を撮っていた自分の間抜けぶりには呆れ果てるほかない。

映は果穂ちゃんと連絡が付いて、先に会いに行っていた。だから、今は二人席に帆影と差し向かいだ。

「なんで謝るんですか？」

帆影は本当に不思議そうにしている。人込みから離れたせいかな顔色も良くなり、今はカフェラテのカップをちびちびと口に運んでいた——学校の近くの喫茶「るそう園」では「カフェ・ラッテ」表記だったが、この店では「カフェラテ」だった——

……帆影と二人で喫茶店に来るのは夢だったはずなのに、今は自分の情けなさが先に立って楽しめない。

「いや……一応は彼氏なのに、実物大ロボに溺れて帆影が気分を悪くしてるのに気付かなかったし。ダメだな、ホント……」

なんとなく上目遣いに見ながら言うと、帆影はちよつと長めにカップへ唇を付けて、そ

れからカップの中身へ視線を落として、それからゆっくりとカップを置いた。

二人の間に次の言葉が出てくるのに、少し間があつて、

「新巻くんは、どうして大きなロボットが好きなんですか？」

帆影が口にしたのは、状況から少しばかりジャンプした質問だった。

場違いというわけでもない。この喫茶店の窓からも、例の立像の一部が見えていた。

しかし改めて訊かれると——首を捻^{ひね}る。

「なんでって……小さな頃からのヒーロー像だから、かな？ いや、自分でも子供っぽい趣味だとは思うけど」

ぽつりぽつりと答えていく内に気恥ずかしくなつて、帆影から目をそらしてしまう。

「……ああ、でも、それだけじゃなくて——」

言葉を切ったのは、新しい客が僕の背後の席に案内されてきたからだだった。すぐ横を通られて、反射的に声を落としてしまう。

新来の客は僕らより少し下くらいの子の二人連れで、なにやら盛り上がっているのか大声で話しながら席に着いた。

「いやー、どうだったよ？ 外のやつ」

中肉中背で眼鏡をかけた方が、やや太めの相方に問いかける。

「あのリムド？ 全然ダメ」

リムド、というののは、外の立像の原作である『幻獣駆除会社 L i ・ o t 』に登場するロボットのカテゴリ「リムド・チャリオット」の俗称だ。

な……なんだこいつ、あのありがたい神像のどこに文句があるって言うんだ？

僕は、ず……と音を立ててコーヒーをすすりながら、思わず聞き耳を立ててしまった。まさに聞き捨てならない発言である。

僕がカップの中のコーヒーに修羅の瞳を映しているとも知らず、背後のお調子者たちは声を弾ませる――

「やっぱさあ、あれじゃマシンって言うより建造物なんだよね。デカすぎ」

「だよー。て言うか、人型兵器とかありえないでしょ。あんなの関節が保もつはずねーじゃん。被弾面の塊だし、少しミリタリーかじっちゃうとさ、戦車や戦闘機に瞬しゅん殺さんなのが解とちやって冷めるっつーか」

……その時の僕の心境を端的に言うなら「やろう、ぶっころしてやる。」だったが。

一六年以上も生きてロボ好きをしていれば、この程度の批判は当たり前に見聞きする。

ソーサーに載せたカップをカタカタと震わせながらも、僕はあくまで平静を保った。向かいの席の帆影が心なし気遣わしげな顔をしていたが、自分では平静なつもりだった。

ふっ……大人になれ新巻天太。目覚めたばかりの批判精神に酔い、安易な批判を安易と知らずに振りかざすのが中二病。誰にでもそういう時代はあるもの……て言うか愚妹が真っ盛り。

——だが、ありもしない大人の余裕にすぎり付こうとする僕とは別に、彼らのかたわらに立つ者があつた。

「やあ。外の機体、君たちはお気に召さなかつたようだね」

まるで知り合いに対するようにフランクなアプローチだったが、話しかけられた二人がぎよつとして固まっているところを見るに、おそらくは初対面なのだろう。

いや、初対面でなかつたとしても、あんな男に突然話しかけられれば驚きもするか。年の頃は四〇前後だろうか、現役プロレスラーだと言われても信じてしまいそうながつしりした体格、猪首いぐびに支えられた金槌のような頭。態度は友好的だが、かなりな強面こわもてだ。

まったく似てないのになんとなく思い出されるのは、帆影と行った「るそう園」で行き合わせた奇矯な兄妹の顔だった。

………なんで僕らは、喫茶店に入るたびに変な人に遭遇するのだろう。

露骨に警戒する二人を見下ろし、がたいの良い男はふと気付いたように後頭部へ手を当てた。

「ああ、いきなりですまなかったね。実はわたしは、あれの関係者でね。ちょっとしたマ―ケティングとして、意見を聞かせてもらいたいと思ったんだ」

関係者というと、あのロボの展示を企画した業者の人とかだろうか。なるほど、それなら、通りすがりに声が聞こえて急に話しかけるといいうことも……まあ、因果関係としては解らなくもない。

ロボアンチの二人もそれで安心したのか、いくらか態度を和らげ、互いの顔をうかがい見合わせた。それからぼつぼつと、やがて調子に乗って意見を口にしていく。

「気に入らなかつたって言うか……今時ロボって……なあ？」

「そうそう。ぶっちゃけ時代遅れって言うか、子供にも売れてないんでしょ？　これからヒットを狙うのは難しいんじゃないかなあ」

「ははははは、そうかそうか。ロボは解らんか――」

関係者を前に失礼な発言を受けても、大柄な男はあくまで朗らかに笑って聞いている。そして朗らかに笑ったまま、雷雲のようにごろつく声で宣告したのだ。

「――それはお前が小さいからだ」

「……………え？」

「それはお前がフニャフニャだからだ」

「なっ……なにを……?」

言われた方は目を点にして、恐らくは自覚なく仰け反っていた。「関係者」の傲然たる口吻こうふんと鬼気にお圧され、打ちのめされ、追いつめられていく……

「——人間には共感能力がある。他者に自分との類似点を認め、それを魅力的に思い信愛するのだ。しかるにお前たちは、大にして強固なる人形ロボットを厭いとうと言う。

その意味するところは、だ」

憐れなまでに萎縮した二人の少年に、怪人物は豁かつ!と目を見開き、容赦なく言葉の鉄槌を打ち下ろした。

「鋼の巨人に己を見出みいだせぬような大きくも硬くもない男に、生きている価値などないということだああッツツ!!」

「えっ、ええええええええ……!?!」

大音声の一喝と、その理不尽さへの二人組の悲鳴が喫茶店に響き渡る。

喧噪に満ちていた店内がしん………と静まりかえり、店中の視線がおずおずと、しかしはつきりと彼らに集まる。

僕とは言えば、突然の大声に驚いてカップを倒しかけた帆影の手を押さえていた。

その姿勢のまま様子を見る僕の耳に、他の客たちのささやき声が聞こえてくる――

「え、なにあの人たち……？」「小さいんだ……」「ロボがどうか……」「外のあれ？」

「あの子たち、フニヤフニヤって……」「かわいそうに……」「硬くならないの……？」「かわいそう……」「おかーさん、あのおにいさんたち、ちいさいの？」「しッ！」

……非常にいたたまれないささめき声と、二人組に対する同情の視線が喫茶店の一角に蝟集いしゆろうしていく様が見えるようだった。

無論、当の二人組は第三者の僕らよりもいたたまれなかったのだろう。

まだ注文していなかったのをいいことに席を立ち、「なんかやベーオツサンにカラまれた……」「フニヤじゃねえし……」などとぶつぶつ言い合いながら店を後にする。

………ついさっきまで彼らへの怒りに燃えていた僕をして、気の毒としか言い様のない光景だった。これはまさにオーバーキルだ。

「あの……新巻くん……」

戦慄に固まっているところに声をかけられて、帆影を見る。彼女の視線は手元のカップ

を向いていた。こぼしかけた帆影の手を押さえるため、包み込むように僕の手が添えられている。

——意識した途端に帆影の細い指の柔らかさと暖かさが手の内に広がってきて、僕はあわてて手を引いた。

「うあつ、ごめん……」

「いえ……ありがとうございます」

帆影は目を落としたまま、解放されたカップに手をやろうとして、こぼれたカフェラテが指にかかっていることに気付いたみたいだった。

拭き取るか迷ったような間があつて、それから帆影は自分の指先に口付けするように液体を啜り取った。さりげない仕草で不作法というほどでもなかったけれど、ふいとのぞいた舌先の鮮やかさにドキリとして、目をそらしてしまう。

僕は自分の掌を見て、手汗をかいてなかったかと今さらになって気になりだした。帆影の手を握るのは三度目だったけど、やっぱり緊張する。あんなに繊細なものを握っているのかという罪悪感。それでいて、もつと触れ合いたいという欲も強くなつていく。

特に汗ばんでいなかったことを確認して顔を上げると、例の大男はまだそばにいた。また人の良さそうな物腰に戻って「いや、お騒がせしました」などと周りへ愛想を振りまい

ている。

……ホント、なんなんだあの人は……？

不審人物の動向を目の端でうかがう僕だったが、知った顔が店に入ってくるのに気付いて注意を奪われた。向こうはきよろきよろと店内を見回しているが、僕らには気付いていないようだ。

もしかして、映から聞いて僕らを探しているのかもしれない。こちらから声をかけようと腰を浮かせ——と、その女の子が声を上げた。

「——あ、先生。こんなところに！」

きちつと整えられたショートカットに利発そうな目鼻立ち。今日はコンタクトレンズなのか眼鏡はかけておらず、スーツ姿——お母さんから借りたらしい——のせいもあって大人びて見える。

彼女——映の親友・村瀬果穂は、そんな風に言っただけで一直線に足を急がす。行き着く先は……例の大男だ。

「おお、新瀬先生。探しにきてくれたのかい」

先生と呼ばれた大男の方も果穂ちゃんのことを知っているらしい。「新瀬穂乃果」は投稿サイトの時から使っている果穂ちゃんのペンネームだ。

果穂ちゃんはずいぶんあわてているようで、コンパスの小さい脚をせわしなく動かして大男の前に立ち、切実な目で見上げた。

「もう打ち合わせが……編集さん、また胃薬飲んで。それは、反応を見て回りたい気持ちも解りますけど……」

なにか必死に訴えているが、よほど焦っているのか言葉がまとまらず、急かされている側の大男が「まずは君が落ち着け」となだめている。

よく知っている子がわたわたしているのを覗き見するのはなんとも気まずい。僕は席を立て果穂ちゃんの腕を引いた。

「果穂ちゃん。だいじょうぶ？」

「え？ あ……天太さん？」

さらに目を白黒させてしまったが、声をかけてきた相手が僕だと気付くと、果穂ちゃんは一転して安堵の息を吐いたようだった。

「そういえば喫茶店で休憩してるって映が……ここだったんですね」

「ああ。映が会いに行っただけだと思っただけ」

「すみません……ちようどわたしがお遣いに出たせいで入れ違いになって」

その「お遣い」というのが、この大男氏を探すことなのか。果穂ちゃんは出版社のサイ

ン会の見学と手伝いに来ているはずだから、ということはこの人は……

僕が例の大男に目を向けたのに気付いて、そつちをほっぽっていたことを思い出したの
だろう、果穂ちゃんは早口に紹介してくれた。

「あ、あの、紹介します。こちらは『L i ・ o t』原作の、ジョー鉄くろがね先生です」
「えっ!？」

こ、この人が、そうなのか……

戦場の緊迫感を活写する熟達の筆致と精細なメカ描写で絶大な人気を誇り、ライトノベルばかりでなく一般文芸にも作品を供給する職人的作家、ジョー鉄。作品には著者近影が載っていないから素顔は初めて見るけど、こんな……壮絶な人だったのか……「あとがき」の語り口は理知的かつ紳士的なのに。

愛読している本の作者を目的まの当たりにするのは生まれて初めてのことだ。棒立ちで硬直する僕に、果穂ちゃんが説明を続ける。

「鉄先生はわたしがコンクールを受賞した時の審査員のお一人で、その縁で今日も声をかけていただいたんです」

その辺のことは、この間のメールにも書いてあったから知っている。それで、もしかしたら引き合わせられるかもしれないと、今日のイベントに誘ってくれたのだ。

僕だって、ファンをしている作家先生には会って見たかった。しかし実際に鉄先生に会ってみると、さっきの二人組への仕打ちを見ているせいもあってガチガチになってしまう。元から対人関係に不器用な僕には、にわかには言葉も出てこなかった。

驚き、憧れ、混乱、困惑、放心……………

僕の惑乱を察したのだろう。果穂ちゃんがこちらへ手を向けて、先生へ紹介してくれる。「それで、鉄先生。この人はわたしの……………あの……………友人のお兄さんで、新巻太太さんです」

仕事でつながりのある人にプライベートの知り合いを紹介するのが面映おもはいのか、果穂ちゃんは照れくさそうだ。

鉄先生は意味ありげに僕と果穂ちゃんを見比べ、顎に手を当ててうなずいた。

「ほう。君が新瀬先生の言っていた……………」

それから、あくまで鷹揚に——しかし眼を底光りさせながら——問いかけてくる。

「君はロボが好きかね？」

「もちろん好きですよ！ いいですよ、ロボ!!」

僕は即答した。

元よりウソではないけれど、ことさら食い付くような勢いになってしまったことは否め

ない。——ふツと脳裏に差したのは、あまりと言えはあまりの罵倒を喰らって退散した二人組の悲惨な背中だった。

「……？ さつきは子供っぽい趣味だと思つていたような……」

いつの間にかすぐ背後に来ていた帆影がぼそりと訝いぶかるが、今は無視するしかない。僕はラージでハードな男でいたいんだ……

帆影に反応したのは鉄先生の方だった。

「む？ その彼女は君のお連れさんかな」

「あ、はい……」

「帆影です」

帆影は僕の横に並ぶと、ペこりと行儀正しく鉄先生にお辞儀した。迫力満点のプロ作家を前にしてもいたって平然としているのが帆影らしい。

「二人で文芸部をしているんですよね？」

果穂ちゃんが補足してくれた。家出した時の件で、帆影には親しみを感じているようだ。その視線にはほんのりと尊敬の念が感じられる。

鉄先生が「ほお」とうなった。

「それは羨ましいな。カップルで部活か」

「っ……」

思わず息を呑んで、帆影を見る。一拍遅れて、帆影もゆっくりと僕を見た。やっぱり淡々として、いまだに感情の読めない目だった。この目を見ると、いつだって自分に向き合うことになる。常勝無敗と言ってもいいくらいの消極思考、引つ込み思案、そんな僕の性格と。

帆影とは付き合い始めて二ヶ月ほどになるけど、世間の高校生が体験しているであろう「恋人らしいこと」はほとんどしていかない気がする。こんな状態で、初対面の人に胸を張って交際宣言などしていいのだろうか？

僕らは、客観的に見て果たして恋人同士なのか。それすら定かでないのに。帆影だって、いまだに酒々井^{しすい}さんに僕と付き合っていることを話していないみたいじゃないか。

あいまいに済ませてしまった方が、帆影にも先生にも気を遣わせないでもいいかもしれない。弱気や気恥ずかしさから来る言い訳は湯水のように湧いてくるのに、喉は渴いてしかたない……

「え、え……と……そういうわけではなくて、二人はお友達——」

僕らが困惑しているように見えたのだろう。果穂ちゃんが助け船を出すように言葉を挟

んでくれる。けれど。

喫茶店の窓からは、フィクションの世界から現れた巨大なロボが見えている。

鉄先生も言っていたではないか。人間には共感能力がある。大きな人形ロボを見たばかりの僕は、いつもより気が大きくなっていた。

「はっ——はい。ちよっと前から付き合ってます」

半歩踏み出しながら言ったので、帆影がどんな顔をしたのかは見えない。

鉄先生は微笑ましそうにうなずき、なぜだか口元を押さえた。

「お、おう……まぶしいな……そんな風に真っ赤になって恋を語る初々しさを忘れんくれよ……っ」

……どうも、笑い出すのを我慢しているようだ。僕は今の言葉を、よほどテンパった顔で言ったらしい。ますます顔の赤くなるのが、これは自覚できた……

ふと気配を感じると、帆影が横に並んでいた。ただそれだけで、なにを言うでもないし、僕と違って顔色にも変わりない。ちよっとうつむいていて、目も合わない。でも、なんだか胸が緩んだ。

余裕が戻って周りの様子が目に入るようになって——頬が引きつった。周囲の席の客たちがちらちらとこちらを見て、笑ったり冷めた目を向けてきたりしている。

しまった……なんにしても衆人環視の喫茶店でする話じゃなかった……！

自分のうかつさに絶望しつつも、にわかには冷静になった僕はこれまでの成り行きを思い出していた。果穂ちゃんは鉄先生を捜してここに来たのだ。

「そうだ果穂ちゃん、ずいぶん急いでたみたいだけど——」

「おお、そうだ新瀬先生。打ち合わせの時間だったか——」

と、鉄先生と二人ながら彼女へ目をやって、言葉が途切れた。

果穂ちゃんは、どこか遠くへ放心していた。

虚ろな目を誰もいない方向にピン留めして、呆ほうけていた。

「か、果穂ちゃん……？」

「二人………お、お付き合ひ、してたんです、か……？」

辛うじて出てきた言葉には、干からびたように力がない。

「う、うん……ああ、そういえば果穂ちゃんにはまだ言ってなかったつけ」

「そう、ですか………へえ、そうだったんですね………映、あの子、なにも

言わないから……」

最後の、映に対する言葉だけは微妙にドスが利いていた。

……しかし、映もだったけど、僕にカノジョが出来たことに驚きすぎじゃないか？ 果

穂ちゃんのことは「可愛くない妹と違って可愛い妹分」だと思っただけに、そこまでモテないと認識されていたことがショックだ……いや、自分でも奇蹟のような状況だと思っただけ。

その果穂ちゃんが、幽鬼のようにのっそりと首を巡らせ、鉄先生に目を移す。

「……行きましょう先生。もうスタッフルームに行かないと時間がありません。わたしも、友達とじっくり話し合う問題が出てきたので……」

その生気のない顔を向けられ、鉄先生は何事か察したようにたじろいだ。

「あ、ああ。……もしかして、余計なこと言っちゃったかな……?」

「いえ、いいんです……こつちのことですから……はあっ……」

溜息混じりの果穂ちゃんに先導されて、鉄先生は喫茶店の出入り口へ向かっていく。

「ご、ごめんね!」と案外お茶目な感じで果穂ちゃんに謝りながら。

「……ホント、いいですから。ところで、なんで携帯がつかないんですか?」

「締め切り前はわざと充電してないんだよ」

「締め切り前なんですか!?!」

——そんな、他人事ひとごとながらシヤレにならないやり取りを残して。

この喫茶店に嵐を巻き起こしたジョー鉄先生は、どうも元気のない果穂ちゃんとともに

去って行った……

店内でずいぶんと目立ってしまったので、僕と帆影はいそいそと会計を済ませて外に出た。屋内の冷房で冷めきった肌に日差しが心地いい。

広場の立像にはまだまだ人が群がってひたすらにパシャパシャ撮っている。大半がスマホだ。今時のモニUMENTは鑑賞するものではなくシェアするものらしい。

ああやってみんなの撮っている巨大ロボの原作者と、ついさっき言葉を交わしたのか……

早くも現実感を失いつつあるが、あの強烈なインパクトが夢ゆめまぼろし 幻だったわけがない。

……想像してたのとは全然違う方向に凄い人だった。数十年に渡って奇想珍談で食べているベテラン作家なんて、変人にしか成りえないということなのかもしれないけど。

「でもさすが、大物って感じではあったな……」

作品とロボに賭ける熱い魂を持った、マグマのような人だった。あそこまで厳いつくなりたいかはともかく、僕もあれくらいに自信と気概を持てれば、停滞している作品を仕上げられるのだろうか……？

そんな想いに捕らわれつつ、遥か高みに在る立像の頭部を眺めながら歩いていると、ふ

と視線を感じた。隣を歩く帆影からだ。

「よく解らないのですが……」

僕のカノジョは、まったくもって純粹クリアな目をして、小さく首を傾げた。

「男の人には、大きくて硬いことがそんなに重要なんですか？」

げふつ、と咳き込みそうになった。思わずたたらを踏んで立ち止まる。

帆影も足を止めて、答えを求める目を僕へ向けてくる。喫茶店でジョー鉄先生に駆逐された二人組や僕がなにをそんなに怯えていたのか、気になっていたのだろう。

たしかに、女子には解りにくい世界かもしれない。とはいえ。

「……………いや、まあ、大は小を兼ねると言うか……自信の問題と言うか……」

僕の口からだって、しどろもどろな答えしか出てこない。そもそも、鉄先生の言っていた「大きい」とか「硬い」の意味もよく解らないんだから話しづらい。なんとなく、しかし強烈に否定されたくない気がするというだけだ。うん。やつぱり、ほら……

しかし、自分の口にした「自信」という単語に引っかかりを覚えた。そうして、ついさつき、帆影がこぼしそうになったカップを反射的に押さえた動きがどこからきたものか、思い出した。

——まだ僕も映も小さかった頃、落ち着きのない妹はよくコップを倒して牛乳やジュー

スをこぼしていた。だから僕はいつも映の手元に注意して、飲み物とか花瓶の水をこぼしそうになった時は、さつきみたいにその手を押さえるくせが付いた。

でも、いつも成功するわけじゃなくて、テーブルやカーペットを汚して両親の仕事を増やしてしまった覚えがある。

僕だってまだ小学校に上がる前後のことなんだから、上手いかない時があるのは当たり前だったろう。でも、多忙な母さんから世話を頼まれた妹をフォローできないのは悔しかった。任されて、誇らしくて、だからそれをできない自分自身への失望でたまらなくなった。

ああ……——と、悟る。だから、僕は。

「……さつきの、喫茶店での話に戻るけど」

あまりに強烈な闖入者によって宙に浮いていた話題に、帆影はすぐ対応してくれた。

「なぜ大きなロボットが好きか、という話ですか？」

「うん、それ。なんか、急に思い当たったよ」

「はい」

「いや、大したことじゃないんだけど……」

僕の小さな頃、家は両親が家を空けることが多くて、いてもいそがしくしてて、映の面

倒は僕が見ることが多かった。でも、兄貴って言っても一歳ひととせしか違わないし、できないことも多くて……だからだよ」

帆影はきよとんと目をしばたたかせた。

「だから……ですか？」

「ああ。たぶん、背伸びしたかったんだ。アニメの再放送なんかで見る、子供でも大きな敵に勝てるロボットに乗りたかった。そうしたら、いそがしくてあんまり構ってくれない親を助けられるし、映も不自由なく守れるだろ？」

だから……つまり、自分と同じ人型かたちをして、自分より大きい存在になりたかったんだ。巨大化する超人でもよかったんだろうけど、ちょうど放送してない時期だったから、ロボットだ」

「だから、大きく硬くですか」

帆影は物分かり良くうなずいてくれた。……なんだかごまかしてしまったような気もするが、だましたつもりもない。

「それからは『青頭巾あおずきん』の僧侶と同じで、ロボットのアニメのストーリーが好きだったのが変化してロボットその物が好きになって、フィギュアとかも集めるようになったんだ」

帆影は興味深そうに、おとがいへ指を添えた。

「なるほど……大きなロボットを使ったフィクションは、一種の類感呪術なのかもしれないね」

「ルイカンジュジュツ？」

オウム返しに聞き返すと、帆影はざっとさわりを解説してくれた。

要は、類似した物はお互いに影響を及ぼすという考え方のことで、たとえば呪いの藁人形に釘を打ち込めば、その釘を打った場所を呪いの対象となった人間も怪我するはず、といったような対応だ。

とすると、自分を仮託した人形フィギュアを組み立てることは、自分自身を相対化して再構成する行為みたいにも取れるのか。

「なんてこった……プラモは呪術だったのか……」

「どうでしょう……？　でも、心理療法に箱庭セラピーというのもありますし、案外に実用的かもしれません」

大仏や巨大な人型ロボを見ることで、自分が大きくなったイメージ、巨視的な物の見方を感じ取る……あの立像も含めて、人型の巨体にはそんな呪具じゆぐの作用もあるのだろうか。

ともかく、僕の早く大きくなりたい、実力が欲しいという欲求が、巨大ロボへの憧憬につながったのだろう。今だって、そういう欲求は強いのもかもしれない。

「……やっぱり大した理由じゃなかったかな。誰にでもありそうな成長への願望が、たまにロボ好きって形で表れただけで」

それが、喫茶店から続く会話の結論だった。

そして、こんな所まで帆影を連れ出して、僕が帆影に伝えたかったことの答えでもあるのかもしれない。たったそれだけのことだ。

我ながら力弱く苦笑いする僕に、帆影はしばらくの間、ただ静かな視線を向けてきていた。それから自分の足下へ目を落として、また顔を上げて、広場を見回しながら言うてる。

「ここは親子連れが多いですね」

「え？ ……ああ、休日だし、遊ぶ場所も多いしな」

建物の上階にはボーリング場やスポーツアトラクション施設、ゲームセンターもあって、主な客層は若者だけど子供連れで遊びに来ている人も多いようだった。……ただロボを見てサインをもらいに来た僕のようなのは圧倒的にマイノリティだろう。

帆影は、すぐ近くで父親のカメラを自分にも使わせてほしいとねだっている小さな子に目を留めて、少しかすれたような声を出した。

「大きなロボットも、あの親子と同じなのかもしれません」

「? どういう意味だ?」

「小さな子供は、親やそれに準じる人のマネをして生活を覚えます。手足の使い方、歩き方、表情、言葉……自分と同じ形をして、自分より大きいものに倣ならいます」

……なるほど。そう聞くと、子供が親のマネをすることと巨大ロボに憧れることは心象的には似ているのだろうと思える。

家に両親のいない時間の多かった僕は、だから人一倍に巨大ロボに憧れたのかもしれない。参考になる親の姿の代わりに、ロボを見ていた。

幼い頃への回顧にけぶる視界の中、帆影は親子連れから視線を剥はがして、こちらへ向き直った。いつもおっとりした所作の彼女には珍しく、ワンピースの裾すそがふわりと翻ひるがえって僕の目の中へ躍り込んだ。

そうして彼女は、予想外の言葉を口にした。

「今日は、誘ってくれてありがとうごさます」

「え? いや、頼んだのは僕だし……そんな」

カノジョを子供じみたシュミに付き合わせてそんな風に感謝されると、逆に恐縮してしまう。

しかし、目を伏せたのは帆影の方だった。

「嫌われてしまったかと思っていたので、安心しました」

「またも予想外のことを言ってくれる。開いた口が塞がらない、という感覚を味わったのは、映が小学生の時、文房具を買うためにもらった一〇〇〇円を「怪僧少女ラスプーチゃんコレクションカード」に全てつぎ込んでしまったのを聞いた時以来だった。

「きらわ……え？　なんだ？　なんで僕が帆影を嫌うんだ？」

「わたしは、新巻くんが好きだという物を否定してしまいました」

「ああ……文芸部室でロボについて話した時のアレか。たしかに帆影は、巨大ロボの存在意義について割りと根本的に否定してくれた。でも、

「そんなことで嫌いになったりしないよ。帆影の言うことはたぶん、ざっくり正しいと思っただけ」

「……………」

呆れ半分、焦り半分に告げる僕に、帆影はなにも答えてこなかった。ただ、ゆつくりと視線が戻ってきて、目が合った。むしろ僕の方が安堵に息を緩めた。

「て言うか……逆に僕の方が、趣味を押し付けるなって嫌われるかと怯えてたくらいだ」

「帆影は虚を突かれたという風に目を見開いて、息を呑んだようだった。声もなく動いた唇は、「そうか……そうなんだ」と言ったように見えた。」

それから、ゆっくりと左右へ首を振る。その動作のまま、人々に囲まれる立像を見上げた。

「今日は来られて良かったです。ロボットについてはまだよく解りませんが……

さつきみたいに新巻くんのが聞けるのは、うれしかったです」

……………

立ちくらみを起こしそうなくらい、顔の赤くなるのが自覚できた。

あるいは不思議な話だけど、さつき喫茶店で付き合っていると宣言した時よりも気恥ずかしくて、足が浮き出しそうだった。

……………ああ。僕は自分から言うのより、帆影に言ってもらう方がドキドキするタイプなんだな。と、思った。

爽やかに肌を打つ初夏の日差しの下、むずがゆいように弛緩した空気が僕らの間に流れる。

広場の並木を揺らして吹き来る風が帆影の髪を煽って揺らす。持て余し気味の前髪を押さえて撫で付けながら、帆影は僕へ視線を戻して、

「新巻くんは、きつともう——」

なにか言いかけたところで、広場にアナウンスの音が響き渡った。

『間もなく、「幻獣駆除会社Li・ot」アニメ化&立像公開記念、原作者ジョー鉄先生のサイン会、整理券の配布を開始いたします。先着六〇名様となっておりますので、新刊文庫の代金を御用意の上、広場西側の特設ブースまでお早めにお越し下さい。なお、整理券はお一人様一枚となっております——』

スピーカーからの声を聞くと、なんとなく上を向いてしまうのはなんでだろう。それともかく、

「……それじゃ、僕はちよつと行ってくるよ。映も果穂ちゃんとそこにいるみたいだし。帆影はどうする？ 並ぶの退屈だろうし、後で合流するか？」

帆影はふるりと首を振った。

「いえ、わたしも並びます。伊井坂さんに、せっかくだからサインをもらってきてほしいと頼まれているので」

「そうだったのか……まあ、僕が代わりにもらうわけにもいかないしな」

こうして僕らはサイン会の列に並び、無事に整理券をもらうことができた。こうした催しで集まる人数の相場というのはよく知らないけど、立像披露の影響か定員以上に参加者

が集まり、急遽、二〇人ほど員数を増やしたほどの盛況だった。

果穂ちゃんと映は鉄先生がサインをしているテーブルの向こう側、スタッフらしき人たちにまぎれて立っていたが、お互いに視線を合わせようとせず、どこか陰悪な雰囲気だった。

……またケンカしたのか。

とはいえあの二人、この間の家出騒動ほど大きなものでないケンカなら、小さな頃から何度もしてきた。だから二人の友情についてはあまり心配はしていないが、映の不機嫌のはけ口がこつちを向くのかと思うとそれが憂鬱だった。

僕の番が来ると鉄先生は「おう、来たね」と短く笑って、新刊の最初の中なかとびら扉にさらさらとサインをしてくれた。先生のサインに加え、「アラマキくんへ」という宛名書きまで付いていた。

あつ、と思ったのは、帆影は伊井坂への土産みやげなのにすでに名乗ってしまっていることだった。

その指摘を帆影にするには列が混み合いすぎていて、結局帆影は、伊井坂宛のサイン本をゲットすることができなかった。

「困りました。これでは伊井坂さんに渡せません」

「まあ、帆影宛じゃなあ」

「いえ、わたしの名前は入っていません」

？ どういうことだろう？

と、そのサイン本を借りて開いてみれば、こんな風に書かれていた。

『アラマキくんのカノジョへ』

……………鉄先生。気を利かせすぎ、と言うか……

大変失礼ながら、ちよつと世話焼きオバサンみたいなセンスだと思ってしまった。

う…………と、照れるやら辟易するやらしている僕の顔を見ながら、帆影が訊いてくる。

「名前も入ってないですし、これを伊井坂さんに渡すべきでしょうか」

「ダメに決まってるだろ！」

即答して本を閉じ、帆影へと押し返す。そして、僕の勢いにたじろいでいる彼女へ、なんとなく目をそらしながら告げた。

「これは……………帆影専用だから」

「あ……………はい」

帆影は手の中の文庫本をしばらく見つめ、それからバッグにしまおうと手提げの口を開いて、そこに入れてから思い直して座り込み、本が傷まないようにかバッグを整理して、そうしてようやく中にしまい込んだ。

「専用……」

起き上がった彼女は小さく呟いて、真昼の日差しを浴びる巨人の立像を眺めやった。

——その後、ジョー鉄先生が急遽ゲリラ的に敢行した「文明及び社会経済のイントロピ―萎縮の時代における、スーパーロボという膨張化身けしんの在り方について」という講演でファンたち——もちろん僕も含む——は感涙にむせび、スーパーロボ文化が人類の未来を左右するという確信を得るに至ったのだが、それはあまりに深遠かつ衝撃的な内容でありここで語るには適さない。

目から滂沱ぼうたと鱗を落として感銘に震える僕と果穂ちゃん——果穂ちゃんもロボサイドの人間だ——の姿を、映だけでなく帆影も醒めたような目で見守っていた。彼女らの目は端的に「あほらし……」と語っているようにも見えたが、被害妄想かもしれない。

それから、担当編集さんと話があるという果穂ちゃんに別れを告げ、三人で昼食を取ることになった。ゲリラ講演が思いのほか長かったため、もう昼下がりとといった時間になっ

ている。

学期中はバイトもしていない高校生の財布なので、フードコートで各自適当な物を買ってきて食べたのだが、案の定、映が不機嫌で閉口することになった。

「……なんで果穂に、帆影先輩と付き合ってること言っちゃったかな？ そのせいで怒られたじゃん……」

冷製パスタを注文した帆影がトイレで席を外し、兄妹でラーメンをすすっている時に、妹は前触れもなく愚痴りだす。

「いや……なんで果穂ちゃんに隠さないといけないんだ？ 果穂ちゃんは帆影のことも知ってるんだし、言わない方が変だろ」

映が怒られたのは自業自得としか思えなかった。自分が帆影のことを気に入らないからって、僕と帆影の関係を隠すことはないだろう。

「どうせ、付き合ってるかどうかも怪しいビミョクな関係なんですよ？ 速攻で自然消滅しそうだし、言いふらすだけややこしくなるだけじゃん」

……我が妹ながらなんて暴言を吐くんだ。しかも、僕が金を出したチャーシューを頬張りながら。

しかし、そこは痛い。痛い所を突かれた、というやつでもあった。

たしかに、恋愛漫画とかでも、相手の身内と仲良くなっちゃうと別れる展開になった時にダメージ倍増するよなあ……でも。

「少なくとも僕は、別れることなんて考えたことないぞ」

「どうだかね。兄がそう思っても、日本の国技と恋愛は一人じゃできないよ」

……いやホント、なんでこんなに可愛くない妹に育ってしまったんだろう？ 僕の育て方が悪かったということになるのだろうか。いや、学校では八面玲瓏なパーフェクト優等生で通ってるわけだから、育成には成功しているはずなんだけど。

今だって、箸とレンゲを巧みに使って、汁の一滴も飛ばすことなく上品かつ気取りなくラーメンを食べている。あんなに食器を倒していた妹が奇麗に食事できるようになったのは素直に褒めたいところだ。ちよつとした感動すら覚える。

問題は、僕にだけはどんな仕打ちをしても平気だろうと高をくくって悪態三昧なことだった。事実なだけに始末が悪い。

そうやって、ラーメンの湯気越しに睨み合っている内に帆影が戻って来た。兄妹ほくらの間に流れる険悪な空気には無頓着でパスタをぱくつき始める。やりあっているのはいつものことだと覚えたのかもしれない。

淡々と麺をフォークに巻き付ける彼女を眺めて、粉チーズは多めに振りかけるんだなど

思った。



食事を終え、施設内の店舗を一通り冷やかした頃には夕方になっていた。家へは電車でも一時間近くかかるので、もう帰らなきゃならない時間だ。

同様に休日の外出を終える人や、仕事があつた人の帰宅の時間も重なつたのだろう。帰りの電車は往きの何倍も混み合っていた。

夏の陽はまだ落ちない時間なので酔っ払いだとかやたら声の大きいパーティーピープルだとかの姿はなかったが、それでも、車体が揺れる度に四方から肉弾で圧され西日で灼かれるのはなかなかストレスだ。

最初は近くにいた映だったが、いつの間にか空いた席に座つたかと思うと一駅で妊婦さんに譲つて——ラーメンをすすっていた時の仏頂面からは信じられないような天使の笑顔だった——、結果としてだいぶ離れた位置で釣り革に掴まっている。

帆影はと言えば、ドアのそば、僕と壁に挟まれる場所で身を縮こめていた。比較的小柄な帆影だが、主に胸部にボリュームがある上にバッグがぐちゃぐちゃにならないように抱

え込んでいるので居心地悪そうだ。

電車が揺れる度、帆影の肩が僕の胸に当たり髪が顎のあたりを撫でるのがうれしくないとさえ大嘘になるが、それよりも彼女を困らせていることに胸が痛む。

……くつ、帆影にこんな思いをさせるなら、もうちよつと早めに帰つとけばよかった。家に帰るまで快適にエスコートしなきゃいけなかったのに……

これは完全に僕のミステイクだ。彼氏失格の四文字が頭を過ぎる。

せめて、帆影が苦しくないようにしないと……と、僕は帆影の頭の横、壁に手を突いた。そのまま肘を突つ張る。つかえ棒になつて帆影が潰されないよう空間を確保するのだ。

「あ……………」

気付いた帆影が小さく声をもらし、すぐ横の僕の手を見て、それから顔を見上げてきた。他の客の迷惑にならないよう腕を伸ばしすぎないようにしているので、顔が近い。いつもは前髪に隠れがちな、透明感のある彼女の両目が息のかかりそうな場所にある。

——考えてみるとこの体勢、いわゆる壁ドンというやつだった。意識してしまうと恥ずかしくなってくる。こんなマンガみたいなポーズ、現実でやるもんじゃやない。

つい最近、伊井坂にも同じことをしたが、あの時とは緊張の度合いがまるで違った。

気恥ずかしさをごまかすように、帆影へ話しかける。

「あのさ……この間の」

電車の中なので、なかば無意識にささやくような声が出た。それでも聞き逃すような距離ではない。帆影はまばたきした。

「はい」

「この間の朝、帆影が面白かった……いや、すごかったって言ってた本の話、聞きそびれてたと思って」

まさに、今日立像を見ることになった発端、巨大ロボの存在意義について部室で議論した日の朝に聞いた話だ。あの日、帆影は部室でもその本を机に出していたし、よほど気に入ったのだろう。

帆影はちよつと答えなかった。ただ、目の中でなにか感情が一回転したように見えた。

「……それでは、今度貸して——うッ」

と帆影の言葉が途切れたのは、電車がカーブに差ししかかって大きく慣性がかかったせいだった。

バランスを崩した帆影の頭が僕の胸にすっぽり収まって、小さな息がシャツに染みる。僕は僕でよろけたけど、座席のバーに掴まって踏ん張った。

一瞬ならず帆影の体が僕に押し付けられ、足が絡む。

電車はすぐに直線に戻り、僕も帆影を支えながら元の体勢へと復帰した。帆影もすぐに顔を上げ、もつれた舌をほどくようにしながら謝ってくる。

「すみません……」

「いや……しようがないよ」

笑いかけた表情が自然だったか自信がない。

正面からこんな密着するのは、文芸部室で初めて出会った時以来かもしれない。あの時と同じ柔らかい感触だけど、あの時よりも体が離れるのを名残惜しく感じている。

あの日から変わってないようで、ずいぶん贅沢になったと、思う。

帆影は少し、そんな僕の顔を眺めていた。それから、ぽつりと口を開く。

「やつぱり、ロボットのことはよく解りませんでしたけど——っ」

ガタンツ、と電車が小さく揺れ車輪の音が大きくなる。

それで聴き取りにくくなると思ったか、帆影は少し声を大きくして続けたのだ。

「新巻くんはきつと、十分に大きくて硬いと思います」

——揺れた直後だったので、ちょうど車内には他の声がなく。

その帆影の言葉は、彼女が思っていたよりずっと広く伝わったようだった。

そこに露骨な反応はなかった。が、しわぶくようなざわめきが隠微に広がり、やがて僕の耳に断片的な言葉が入ってき始める……

「え……なに？」「電車でなに言わせてんのあの子……」「痴漢……？」「いやプレイでしょ」「なんかさつき抱き合ってたし……」「やだ……ちよつと、変態ってやつ……？」「あー、録っとけばよかった……」

……………

解ってる。

帆影はたぶん、僕がもう、映の世話も満足にできなかつた子供ではないと褒めてくれたのだろう。今日一日の流れからして、なにをどう考えてもそれ以外の他意はありえないし、カノジョからのポジティブな評価を、僕は素直に喜ぶべきなのだろう。

しかしそれはそれとして、この動く密室。視線とささやきの牢獄。周囲からの好奇の気配は耐え難いものがある。

焦熱地獄のように赤くなっているであろう僕の顔を、その理由を作った自覚のない帆影

が不思議そうに見上げてきている。

次の駅で一旦降りようにも、映は離れた位置にいる——悪いことに、スマホの充電が切れそうだからオフにしとくと言っていた——し、はぐれると面倒だ。

——逃げられない。

かくして、周囲からのドン引きと軽蔑、下世話な揶揄の視線に囲まれ、朝に帆影と待ち合わせたターミナル駅までの長い道のりを行く羞恥の満員電車が始まった……

自分の乗ったロボットが暴走を始め、脱出もできなくなったパイロットの気持ちはこんな感じなのかもしれない。そんな……よりにもよって、そんなところで……

本日のライトノベルは、そつとページを閉じるのだ……

The Hokage's L/RightNovel

Episode #5

Colossal figure always shaped like brave.

Fin.

閑話4.

「えー？ そんなことないよー」

——わたし、新巻映あらまきはゆが学校内で一番多く使う言葉はたぶん、これだ。

「新巻さん肌キレイだね。どんなケアしてるのー？」

「中間テストも総合一位だっけ。全然ガリ勉って感じじゃないのに、ホント天才だよー」

「ソフトボールの授業の時すごかったー！ あれ、フェンスあったらホームランじゃね？」

「映ちゃんめっちゃ可愛いし、ゼツタイ彼氏いるでしょー？」

——えー？ そんなことないよー。

四方八方から弾幕の如く押し寄せる賞賛の声を、ひとくくりにして下手したて投げする魔法の言葉。凶に乗らず、かと言って悟った風も見せず、ちよつとうれしそうにはにかんで手を振ってみせる。

こういう時は微妙に低い背丈が良い方に働いて、クラスの女子たちは自慢のペットを見るような視線でわたしを甘やかすのだ。他のことで負けても背やスタイルで勝ってる、という一点が彼女たちに余裕を与えるのだろう。

身だしなみはケアしつつ化粧やアクセサリーは地味に保つことで、自己顕示欲の強いギャルたちからは幼稚と侮られ、つまりバカにはされても敵視はされない。

あと、男子とは距離を置く。それでいて戦わない。兄のように異性に溺れたりしない。

これでいい。これがBEST。埋没せず悪目立ちわるめだもしない絶好のポジション。この位置から模範的な生活をしつつ、うるさく押し付けるようなことも言わなければクラスに最低限かつ平和な秩序を生むべくコントロールできる。

幸い、この教室にはそれを阻むような問題児はいなかった。中学校の三年間で磨き上げた人心掌握術は、今のところ通用している。

「あー、新巻さんー」

……ただ一人の例外を除いては。

「ねーねー、隣の駅前の古本屋さんで、中古CDのワゴンセールやってるんだけど、なんかアニメのもけっこうあるみたいだから、いっしょに行ってみないー？」

語尾を伸ばしているのは最初、可愛かわい子こぶっているのかと思っていたが単にスローペー

スなだけらしい。象や亀は代謝が遅いから寿命が長いと聞くけど、この同級生、小戸部歌子ことべうたこさんもそうなのかもしれない。

女子としては上背があり、いつもおっとり微笑んでいる。顔立ちからして笑ってる感じだ。性格も温厚で人当たりがよく、ただし人の言うことを聞いていない時がある。

長生きしそうなタイプだ。

そんな感じの小戸部さんがわたしに懐いてきているのには、理由がある。

彼女は漫画研究会に所属していて、なにか用事があったて文芸部へ伊井坂先輩を呼びに来た時、わたしと伊井坂先輩がライトノベルについて話しているのを聞かれてしまったのだ。以来、彼女はわたしのことを「オタクの話が通じる人」と勘違いして馴れ馴れしく話しかけてくるようになった。

しつこく言ってくるタイプではないし、特に迷惑しているわけではないのだが、やっぱりオタクは空気が読めないという認識が更新されていく。

今日も、昼休みのトイレ帰りに声をかけられた。

「ごめんなさい……わたし、昔のアニメよく解らないから」

オタクへの抵抗感が露わにならないよう、やんわりと断る。申し訳なさと、きっぱりしたお断りと、また誘ってねというニュアンスをミックスした笑顔を作るのはさすがに難し

かった。

「あー……そっかあ。いいCDあったら貸してあげるね」

「う、うん……ありがとう」

小戸部さんはとても素直な性格をしているので、適当にごまかしても疑ったりはしない。しかも、ありがた迷惑な善意があふれすぎていてこっちの胸を刺してくる。

どう引き離したものと心の中で腕を組む……うーん……

わたしがデリケートな問題に思い悩む内にも、彼女は脳天気におタクニュースのヘッドラインをぺらぺら口に出してくる——

「あ、そういえば新巻さん知ってるー？ シュールな設定がバズったウェブ小説の『生首に転生したボクの自分探し』が今度、書籍化？ されるんだって」

「買って。それ買って。もう予約始まっている所もあるからして。そして買って」

「ええっ？ 突然のすごい食いつき……」

「とにかく発売日に買って。なんか初動が大切なんだって。だから買って。出たらずぐ買って。できれば週末がずに買って。直営だと電子書籍も紙と同時日発売で零時配信だから早く読めるしそれも買ってライバルに差を付けて。シヨップ特典というのも何種類かあるらしいから全部買うのもいいと思うの」

「あ、新巻さん目が怖い……」

……

……はッ！ 果穂の本——生首になった某——を一冊でも多く売り込まねばという使命感のあまり、つい我を忘れて小戸部さんに詰め寄ってしまった。いけないいけない……

あははは……と、愛想笑いを浮かべつつ身を引いて、さてどう弁解しようかと考え始めた時。また声がかけられた。

「お、新巻妹。ちようどいいところに！」

……今日は千客万来だ。階段近くで話していたのがいけなかったのか、顔見知りの上級生に見つかってしまった。

酒々井さんという先輩で、帆影先輩の同級生だ。帆影先輩のどこがいいのか、日常、行動をともにしていることが多いらしい。

ベリーショートの髪といいスレンダーな体付きといい、全体的にボーイッシュな印象でいかにも「女子にモテそうな女子」だ。外見の印象通り、竹を割ったような性格の先輩だった。

以前、帆影先輩と酒々井先輩が連れ立って歩いているところに遭遇し、紹介された程度の縁だがしつかり顔を覚えられていた。

「……どうかしたんですか？ 酒々井先輩」

「どうもこうもないよ。妹は知ってたのか？」

会うなり目的語のない質問をぶつけられ、さすがに面食らう。小戸部さんは呑気に「わー、カッコイイ先輩だー」とでも言いたげにこちらを眺めていた。

わたしは軽く頭を振った。

「落ち着いてください先輩。なんの話ですか？」

「だから……帆影とお前の兄貴、付き合ってたって！ 知ってたか!？」

それだけのことを言語化するのももどかしそうに尋ねられ、わたしは自分でも意外なほど戸惑った。

今まで、兄と帆影先輩が交際している事実は文芸部の中にしか存在しなかった。そこを切り離せば別の日常が始まるトカゲの尻尾だった。

それが先日、果穂にあっさりバレた。今日は酒々井先輩だ。ここへ来て急速に拡散されていくことに、なぜか、胸がざわつく。

固まった喉を意志の力で震わせて、訊きいた。

「え……っと、一応、知ってましたけど、先輩はどこでその話を聞いたんですか？」

伊井坂先輩あたりだろうか。あの人は兄と帆影先輩が付き合ってるのを知っているはず

だし、なにせあのおしゃべりだ。

だが、酒々井先輩の答えは予想外のものだった。

「え？ 帆影だよ。最近、ジョシジユウ（※女子柔道部の略）の部長に彼氏ができてクソオって話を帆影にしてさ、そろそろ彼氏欲しいよなーって話を振ったらさ、『もういるの
で』って……」

もういるので、のくだりは帆影先輩の口真似だったが、無駄に上手かった。そうだ、そんな風に温度のない声でしゃべる人だ。

「あまりにも信じがたくて、最初は冗談だと思ったけど、そういうおふざけを言う奴じゃない。で、マジかよ誰だよ彼氏、いっちょお姉さんが面接してやるよって言ったら、お前の兄貴だって言うわけだよ。」

しかも、二年になってすぐに付き合い始めたって！」

酒々井先輩は、オーバーな仕草で自分の額を叩いた。ぴしやりと良い音がして、形のキレイなおでこが赤くなる。勢い余って強く叩きすぎたようだ。動揺のほどがうかがわれる。「いやー、びっくりしたのなんの。……まあ、あいつら二人きりで部活してるわけだし、『言われてみれば』って感じもあるけど……でも、二人で帰ってるところとか見かけても全然イチャイチャしてないし、なんなら微妙に距離あるし。」

あいつら、ホントに付き合ってるの？」

「それはわたしが訊きたいです」

思わず本音で即答してしまった。

兄と帆影先輩は、言葉の上では付き合っていると明言するものの、外からではどういう関係なのかよく解らない。仲が悪くないのは判る……と言うか、兄が帆影先輩を大切にしているのは見てて恥ずかしくなるくらい明らかだが、それも含めてお互いに遠慮が強すぎる気がする。

やっぱり、世間一般の言う恋人関係とは大きくズレているのだろう。帆影先輩の友達ですら疑っているのだから相当だ。

「すごい。新巻さんのお兄さん、カノジョさんいるんだー」

すぐ隣から発せられた小戸部さんの歓声は、朗らかで純粋な好意に満ちているからこそ癪に障るものだった。

「お隣の部室の人だし、二人とも知ってるけども、全然気付かなかったよー」

「……どうかな？ 帆影先輩、変わった人だし、普通の『付き合ってる』って感じじゃないよー」

今後、妙なからまれ方をすると面倒くさいので釘を刺しておく。小戸部さんはいつもの

無責任めいた素直さでうなずいた。

「うん。たしかに帆影さんは、昔からちよつと話が解らなかつたなー」

あたしがバカなせいもあるけど、と続ける小戸部さんに、首を傾げる。

「待って、小戸部さんは帆影先輩と前から知り合いなの？」

「うん。近所に住んでるから、小学校の途中からいっしょだったよー。縦割り班で行事の準備とかしたの。懐かしいな」

縦割り班というのはたぶん、別学年の生徒とチームを作って学校行事に参加する制度のことだろう。そう言えばわたしもやった。その頃は今と違ってちよつとばかりお転婆なキヤラをしていたから、横暴な上級生や生意気な下級生とケンカして先生や果穂に怒られるのがパターンだった。

帆影先輩に下級生の世話ができるのか。真面目だし律儀なところもあるから、やる気はあったのではないかと思う。が、ただでさえ一学年が異次元のようかけ離れていた小学生時代だ。エキセントリックな先輩がまともなコミュニケーションを取れるとも思えない。「いつも難しそうな本を読んで、話しかけると一生懸命内容を説明してくれるんだけど、ちゃんぶんかんぶんだったよー」

高校いまとやってること変わらないじゃん！ そんなことだろうと思っただけ。

「へー、今とやってること変わるいなあ」

酒々井先輩も全く同じ感想を抱いたようだ。成長しないな帆影先輩……兄が甘やかすせいで、というのは、あながち邪推ではない気がする。

小戸部さんは、わたしが話に食い付いたのがうれしいのか、さらに記憶を探るようにぼつりした唇に指を当てた。

「本人もねー、『わたしは両親と暮らしていないせいかな、年下の人とのしゃべり方がよく解りません』って言ってたよー」

「? どういうこと?」

「なんだっけな? 家のお母さんうちに聞いたんだけど、帆影さんのお宅は帆影さんのお父さんの実家で……なんかあつて、帆影さんのお祖父さんが帆影さんを預かってるんだって。

たまに、帆影さんがお祖母さんを手伝って買い物してるの見るよー」

「なんだそれ。知ってたか?」

酒々井先輩も知らなかったようだ。わたしは無言で首を振って、小戸部さんに訊いた。

「なんかあつて、て、具体的になにがあつたの?」

「さあ……お母さんも井戸端会議で聞いただけみたいだから……あ、でも、お父さんが亡くなったとかじゃなかったと思うよ」

ちッ……思わせぶりな……

しかしどういうことだ？ 帆影先輩はどうして両親といっしょに暮らしていないんだろう？ 兄はその事実や理由を知っているのか？

そして、そういう事情が帆影先輩のユニークすぎる人間性を形作ったのだろうか？

ただでさえよく解らない人なのに、余計に謎が増えた。本当に面倒くさい。

せっかくわたしが品行方正かつ柔軟な世渡りを身につけて更生の道を示してやっているというのに、兄はオタクのまま、変人な上に家庭環境も不明なカノジョに入れ込んでいる。

不条理だ。

果穂とのケンカが終わったと思ったら、次から次へ謎が増えていく兄アニカノの恋人に振り回される日々。やっぱりあの人は敵だ。どうにも相容れない。デビューを控えているにもかかわらず目が死んでいる果穂のためにも、なんとかしなくては……

しかし、帆影先輩の胸部に心を奪われた兄に別れろと言ったところで聞かないだろう。

先輩は兄の思っているような女ではなく、兄は利用されているだけなのだと言っただけなのだと証拠を突き付けてやらねば。

敵を攻略するには、まず情報だ。彼を知り己を知れば百戦して殆あやうからず——この間、

果穂が貸してくれた戦記物ライトノベルに書いてあった言葉が出典は昔の偉い軍略家ら

しいので間違いないだろう。

なんとかあの人の家のことを探れないだろうか……そうでない、兄はあの胸ばかり柔らかそうな鉄面皮に都合よく搾取され続けてしまう。

顎に拳を当てて考えに沈みかけたわたしに、小戸部さんの祝福に満ちた声が聞こえてくる。

「でも、帆影さんは不思議系だけどマジメで可愛いし、新巻さんのお兄さんも控えめで優しいそうそうな人だから、お似合いのカップルだねー」

……………

わたしは小戸部さんに振り返ると、はにかみも謙虚さもゴミ箱へ捨てた、のしかかるような笑顔で答えた――

「ええー？ そんなことないよおー？」

「お前はあの二人のなんなんだよ……？」

珍しく鼻白んだ酒々井先輩の声には、聞こえないふりをしておいた。

第六話

作者殺し

「言えよー」

と酒々井しすいさんからまれたのは登校中、駅から学校へ伸びる坂の途中だった。通学路であり、ほどよい勾配こうばいからか多くの運動部がランニングコースに使っている。

さすがに朝練のランニングに柔道着は着ていない。体操着姿の酒々井さんは、すらっとした体付きもあって美少年のようにも見えた。体操着の首元を引っ張って胸元に風を招き入れる姿からは、目をそらさざるをえないけど。

「いや……なんの話？」

端的すぎる要求に戸惑って聞き返すと、酒々井さんは息を整えて続けてくる。

「新巻あらまきくん、帆影ほかげと付き合ってるんだって？　なんで早く教えてくれないんだよ」

自分でも不思議なくらいに、動揺した。

「それっ……誰に聞いたんだ？」

「兄妹して同じこと訊きくなー。帆影だよ」

「帆影が……？」

単に訊かれたから答えただけかもしれないけど、他の人に僕とのことを明言してくれた。

今までも言う機会はあつたらうに、自分からは言わなかった帆影が。

喫茶店、本屋、下着売り場にロボ見物。いっしょに出かけたりして、なにか変化があつたのだろうか。だとすればうれしいけれど。

「その話をした時の帆影、どんな感じだった？」

「え？ いつも通り、すんとして、なに考えてるか解らない感じ」

……まあそうだよな。

結局、帆影が僕との関係をどう捉えているのかは、外からじゃ知りようもない。直接的に質問したって、たぶんまだ「よく解らない」という答えが返ってきそうな気がする。

僕にはそれを責められない。なぜなら、僕にもまだよく解らないからだ。

帆影が大人しい子で、根暗な僕でも対しやすいから好きなのか。僕の書いた物を読んでくれたから好きなのか。隙の多さに下心を刺激されているだけなのか。どれもあるだろうし、それだけではない気もする。

恋ってなんだ、愛ってなんだ。

僕は朝っぱらから深遠な懊悩に想いを囚われながら、そればかりは教えてくれないであろう学舎へと歩きだした。

「え？ ウチは放置かよ」

間もなく梅雨入りを予報された曇天の下、酒々井さんのつぶやきが灰色の背景に溶けて消えた。

特にこれといった波乱もなく、今日の授業は過ぎ行き——放課後。

部室で顔を合わせた帆影は、やっぱりいつも通りにすんとしていた。

担任の先生の性格なのか、ホームルームは帆影のクラスの方が先に終わることが多い。たいていは帆影が先に部室へ来ていた。

一見ぼんやりと読んでいた本——実際、帆影は読書家だが特に読むのが速いわけではない——から顔を上げ、僕と目を合わせて小さく会釈する。すっかり見慣れた仕草だ。

伊井坂いいさかも映はゆもないから、今は二人きりだ。

今朝の酒々井さんとの会話のせいか、いつもより少し緊張しつつ隣に座る。一年の頃は椅子を一つ挟んで座ってたんだよな、と思い出す。椅子一個分の距離を詰めるのに一年かかったわけだ。

ちらと横目で帆影を盗み見ると、目が合った。向こうも顔は本に向けたまま目だけでこちらを見ていて、だから驚いたようだった。いつも凧いでいる瞳が広がる波紋のように大

きくなった。僕も同じようなものだったと思う。

なんとなく動けなくなり、そのまま目の端で見つめ合う。先に動いた方が負けだという気がしたが、なにがどう勝ち負けなのかは知れなかった。

いずれにせよ、僕は勝負に強い方ではない。先に口を開いた。

「帆影」

「はい」

という帆影の返事は、唇の動きだけで聞こえた。

なぜなら、部室の引き戸が開かれる音にかき消されたからだ。

「……ふうふううっ……」

立て付けの悪い扉の悲鳴に続いて、大きな、とても大きな溜息が部室に落ちる。

——伊井坂隣りんだ。いつもうっとうしいくらい澁刺はっらちとしていた彼女が、今日は雨に濡れた野良猫のようにとぼとぼと歩を進め、慣れた動作で僕らの対面に座る。肩にかけていたバッグが、力なくどさりと落ちた。

今さらだけど一応、言っておく。

「お前……せめて漫研とまりに顔出してからこっちは来いよ」

「今日は休みなんだって」

小戸部^{ことべ}さん、再放送のアニメ視るって帰ってたし、と答えてきたのは、今日も暇そうな妹だった。来る途中で伊井坂と行き合ったのだろう、開きっ放しにしていた戸を閉めて、僕の隣へ腰を下ろす。

僕は続けて、当然の疑問を伊井坂に訊いた。

「だったら、どうしてここに？」

「聞いてほしい……話を聞いてほしいんじやよ……」

合板のデスクに伏せながら、顔だけを上げて伊井坂は僕と帆影を見る。陰のある目だ。

……そういえばこいつ、午後から浮かない顔をしていた気がする。

僕は帆影と顔を見合わせてから、伊井坂を促した。

「まあ……聞くだけ聞くけど」

『歌神^{うたがみ}ボイスライズ』は知ってるかい……？』

「伊井坂の好きなラノベだろ。ハマったのはアニメからだっけ？」

たしか、音声合成ソフトで作られ、動画サイトで人気になった楽曲をモチーフに書かれたライトノベルだ。モチーフこそ音楽だが、マイク^{がた}形の武器に魂の歌声を込めて戦う少年少女を描く異能バトル物だったと思う。

僕は視なかったけどアニメ化もしていて、マイクとスタンドが一体化して死神の鎌のよ

うになった武器を構えた。パンキッシュな美少年のイラストをネットや書店でよく見かける。何年か前に始まった作品なので旬は過ぎているかもしれないけど、まだまだ根強い人気があるみたいだ。

伊井坂はぐったりしたまま、顎だけでうむとうなずいた。

「刊行ペース落ちてるなりに、まいかん毎刊楽しみにしてるコンテンツなのだよ……」

「……まさか、名前を呼んではいけないアレ打ち切りになったとか？」

思わず声を落とす。それは古今東西、出版作品を追う者にとって、世界で最も邪悪な事態だ。

しかし伊井坂は、力なくかぶり頭を振る。

「そうじゃあないけど……小説版の作者がね、SNSで差別的な発言をして炎上中のだよ……昼休みにそれを知っちゃって。」

下手すると、検討中だったアニメ二期がお流れだとかなんだとか……」

あー……ああ。そっちなか。

僕が反応に困っている内に、スマホをいじっていた映はみが面白くもなさそうに口を挟んでくる。

「有名人とかでありがちなやつですね。最近は、とにかく騒ぎたい人たちが、言葉尻を無

理矢理に悪い方へ解釈して叩いてるだけって気もしますけど」

「そ、そうだよ。SNSってメールとかと違って文面確認せずに投稿するから、誤解されただけなんじゃないか？」

と、僕も映に同調して慰めてみるも、伊井坂の目は死んだまま輝かない。

「いや……カッティングで発言が曲げられるとか表現の問題とかじゃなくて。

去年あたりから発言が政治的にぐんぐん偏っていつちやってたから………あーあ、ついにやつちやったよって感じの、まごうことなき暴言なんじゃよ……」

うわあ……

「うわあ……サイアクですね」

映……兄が思っても口に出さなかったことを言うんじゃない……

伊井坂は、ほろ苦い吐息を机に落とした。

「大好きな声優が怪しい健康食品にハマった時もショックだったけど、そういうのは『ピュアゆえに』と思えばむしろ萌えポイントだったさ……でも今回ののはなんか、力が抜けちゃってね……」

気持ちには解らないでもない。

お気に入りの作品の作者が、いわゆる「イタイ人」だったらなんとなくショックだ。失

望すると言ってもいい。この場合、犯罪がらみではないようだし、なにを言おうが個人の勝手なのは解っているけれど。

やっぱり、好きな作品の作者には好ましい人でいてほしい。

僕などは素朴にそう思うのだが、御存知の通り、この部室には素朴でない者もいる。

「しかし」

そう、ようやく自認してくれたらしい僕のカノジヨ、帆影^{あゆむ}歩だ。

「そのなになが問題なんですか？」

ふざけているわけでも、なにか挑発しているわけでもない。本気で不思議そうに首を傾げている。

いや……逆になになが問題でないのか。僕と伊井坂が返答に困っている内に、映がオーバーに眉をしかめた。作品名から検索したらしく、問題の発言のスクリーンショットが映ったスマホを帆影に突き付ける。

「見てみたら、たしかにこれ、偏見バリバリの差別発言ですよ。いくら表現の自由だったって、これじゃ問題視されるのは当然、当たり前です」

目を細めてスマホの画面を読んだ帆影は、あつさりうなずいた。

「そうですね。因果関係の不明瞭な文面で、これで中傷された人は当然反発するでしょう。」

攻撃の自由と反撃の自由は常に双子です」

意見が容れられたにもかかわらず、映は頭痛をこらえるような顔になった。

「いや……だから、問題ありだつて言ってるんです」

「作者に問題行動があったとして、作品には関係がありません」

……そういえば、家出した果穂ちゃんを連れ戻しに行った時、「わたしは本と作者は切り離して考えるタイプ」と言っていた気がする。帆影にブレはなかった。

映はやっぱり納得しない。ますます険悪に目を据わらせる。

「関係ないわけではないでしょう。本を書いているのは作者の人なんだから」

「出版された時点でもう、書いていません。『書いた』だけです」

なるほど……そう言われると、僕らの手元に本がある時、作者と本との関係は、

「過去形だな」

「はい。わたしたちの手にある本と作者は物理的に分断されていて、この場に来て本を損壊でもしない限り影響を及ぼすことはできません。」

『作者と本』の関係と、『本と読者』の関係は完全に独立しているのです」

そう言われてしまうと自明ではある。彼我は無関係だ。しかしまあ、映がどう反発するかは予想はできた。

「そんなの……屁理屈ですっ」

「よく見て下さい、妹さん」

今度は帆影が自分が読んでいた文庫本を開いて、映に示した。……狭い部屋の中、僕を挟んで映と帆影が身を乗り出していているせいで物理的に肩身が狭い。

「これは紙に文字やイラストを印刷して製本しただけの物です。どこを探しても作者は潜ひそんでいません」

「そういう話をしてるんじゃないくて……えっ、と……そう、作品には作者の精神、心が反映されてるでしょって話をしてるんです！

その作者の人間性にケチが付いたら、作品の価値に影響が出るに決まってるじゃないですか」

映のひねり出した反駁はんぱくに、帆影はちよつと目を机に向けて、それから映へ戻した。

「たとえば……オックスフォード英語辞典は、本体二〇巻に加え補遺三巻という単一言語を扱った物としては世界最大の辞書で——重さ六〇キロだとか——、多くの学者、研究者に参照され知見を与えています。

控えめに言っって偉大な大部です」

「はあ……それは立派な辞書ですね。でも、それがなにか？」

要領を得ずに聞き返す映。帆影はやはり平板に答えた。

「この辞書の成立に大きな貢献をしたウィリアム・マイナー博士は、殺人犯です。従軍時の経験から妄想に取り憑かれ、無関係の人を射殺して犯罪者用の精神病院に入れられました。」

博士は辞書編纂の協力者を募集する声明に応えて病院から用例を送り続け、辞書の完成に多大な貢献をしたのです」

「なるほど」

うなずいたのは僕だった。

「成立に犯罪者が関わっていても、辞書の価値には関係ないな」

「はい。精神を患っていたとはいえ、罪もない人間を殺したことは赦されない罪です。だから彼は、あくまで囚人として辞典の編纂に関与しました。」

しかし、当然ながらそのことを理由にこの辞書の価値が疑われたという話は聞いたことがありません」

「そ、それは辞書だからでしょう。客観的で無機質な文章なら、作者の個性なんて関係ないですから」

映はもう、むきになっているようだった。対照的に帆影は冷静だ。

「いえ、辞書は決して無個性な書物ではありません。採録する語彙の選定、単独で項目とするか派生語として従属させるか、なにより語義の記述などは個性の塊です。

『マンション』という単語の意味を、改版の度に何度注意されてもしつこく『貧民街のアパート』と定義し続けた辞書などはもう、ちよつとした奇書の類と言つていいでしょう」

「なぜマンションがスラム……?」

それまでぐったり聞いていた伊井坂が、思わずといったように聞き返す。帆影は机に伏している伊井坂に視線を合わせて答えた。

「当時編集主幹だった人の実体験に基づく見解だそうです。

その辞書に限らず、辞書はむしろ文芸以上に個性を持った『作品』なのです」

「それでも、重要なのは使いやすいかどうかであつて、作者の人格ではない……。辞書を編集した人のことなんて、普通はあんまり気にしないもんな」

僕が引き取つてまとめると、体を起こした帆影はこくりとうなずいた。

「本の実体は結局、印字された文字列や図画です。そこにあるのは本と読者の関係だけで、作者の存在はもはや過去のものです」

こう滔々と語られてはにわかに言葉を返せず、しかし納得もできないらしく、映は喉の奥で唸った。

作品の生みの親である作者が、発表された作品とは関係を持たないという考え方が直感的に理解できないのだろう。

帆影はもう一つ例を出した。

「ポール・ド・マンという著名な文学理論家があります。独自のセオリーで文学作品を読み解く優れた著作をいくつも残し、所属する学派の大物として没しました。

ところがその死後、ジャーナリストだった戦時中にナチスへ迎合するような記事を新聞に発表していたことが発覚してスキヤンダルになります。彼を攻撃する急先鋒になったのは、対立する学説を持つ派閥でした。

作者の過去を暴き立てることで、自分たちに都合の悪い学説を潰そうとしたのです」
これは説明されなくても解る。

「学説の内容と作者の過去の行状は関係ないのに、わざと混同して排除しようとしたんだな」

「はい。これに反論したのはポール・ド・マンに近しい学者や弟子筋で、問題の親ナチス的文章に使われた語句の端々から『これは本意で書いたものではなかった』という論拠をひねり出して、スキヤンダルの誹謗者たちを猛批判しました。

ド・マンがナチスシンパだと決めつけられて、身内として巻き添えになつては困ります

から彼らも必死です」

それはそれで、記事の意味をねじ曲げて敵を殴る棒にするような行為だ。ここにあって文章の内容はどうでもよく、ただ政争の口実におとし貶められてしまっている。

僕らが理解していることを目録で確かめて、帆影は話をまとめに入った。

「このように、作者と作品を混同するのは読書という行為の価値を損なう不毛な行為なのです。」

さくしやすでにしす
作者已死 どくしやまさにたつべし
読者當立。

本を開く時、『作者』はもう死んでいますし、死んでいるべきなのです。
ですから」

帆影はもう一度、伊井坂の目線に顔を下げた。

「伊井坂さんも、気にしない方がいいと思います」

「んっ……」

伊井坂は確かに受け取った。顎は机に載せたまま、にっこり微笑む。

「ありがとね、ホカちゃん」

もちろん、帆影と違ってそう簡単には割り切れないだろうけど。

笑う元気を見せてくれた伊井坂に、僕はこっそりと安堵の息を抜いた。

——息といっしょに空の栓も抜けたように、しとしとと雨が降りてきた。

地面に落ちずに空気へ溶け消えるような静かな雨だったけれど、それが今年の梅雨の始まりだった。

僕も帆影も折り傘を持ってきていたので困らなかったが、伊井坂が忘れた。今日は踏んだり蹴ったりだ。さすがに同情したか、映が駅まで傘を貸すと申し出た。感激した伊井坂に抱きつかれて映は迷惑そうだった。

「あ、でもハユンはどうするんだい？」

「傘ならあります……て言うか、ハユンはやめてください」

顔をしかめた映の言う傘とは、要するに僕のことだった。まあ、この状況なら兄妹ほくらが同じ傘を使うのが順当だろう。

いざ傘を差して歩き出してみると、いくら映が小柄とはいえ、折り傘だから二人で入るとだいぶ濡れてしまう。こうなると妹の世話を任されていた頃のくせが出て、僕は映の方へ傘をかざして濡れないように注意した。

仮面優等生らしく物腰は落ち着いているが、足運びが妙にせっかちなのは昔と変わらな
い。映は時々こつちを見てにっこり笑い、

「あんまりくつつかないでね」

と、人道を外れた発言をかましてきた。そのくせ機嫌はよさそうだから腹が立つ。そんな中、ふと気配を感じると、帆影がすぐそばに来ていた。同時に気付いたのは、映に傘の面積を譲って雨を受けるままになっていた肩に、雨粒が落ちてこなくなっていることだった。

——帆影がすぐ横に来て、僕の傘からはみ出している部分に自分の傘をかざしてくれていた。帆影は僕より背が低いから、そのまま歩くのはちよつと窮屈そうなのに。

僕の視線に気付いて、彼女はただ小さくうなずいた。それから目を前方に戻して、自分も濡れないようにさらに僕へ体を近付けた。

夏服で露わになった二の腕が微かに触れる。

感謝の言葉を口にしようかと思つて、やめた。それをしたら、前を行く映や伊井坂に気付かれてしまう。だから。

僕は無言で帆影に甘え、傘を打つ雨の音に耳を澄ました。

今までで一番、駅までの道を短く思つた。

夜になっても雨はやまなかった。

しばらく暑い日が続いたので、いいお湿りではあった。日中曇っていたから気温も低く、夜の今は肌寒いくらいだ。

そろそろ寿命の来そうな蛍光灯が健気に照らす自分の部屋で、僕はディスプレイに表示された自分の小説を読み返していた。

仮タイトルは『秋葉原ゴールデンフリース』。

時は近未来。地殻変動によって半ば水没した上、バイオテロでゾンビだらけになった秋葉原。封鎖された電気街には、大量の商品が取り残される。

一方、首都移転の混乱と全国的な災害ダメージの影響、綱紀肅正の目的から、日本は娯楽産業の大規模な縮小を余儀なくされる。災害で失われた品も多く、日本産の娯楽品は世界中で市価を高騰させることになった。

主人公は、復興の中でギリギリの生活を送る少年少女。彼らは封鎖された秋葉原からオタクグッズを運び出して高値で売りさばくビジネスを思い付く。

首ほどの高さまで水没した電気街。建物内に潜むゾンビの群れ。ゾンビを避けつつ不法居住する武装変態たち。主人公たちはそんな障害を乗り越え、一攫千金の夢を掴むことが

できるのか？

——というのが大まかなあらずじだ。

どうでもいいような娯楽品オタクグッズが状況や見方によって思わぬ価値を持つ、というあたりに、文化祭で書いた宇宙人が地球文明に接触する短編からの流れがある……気がする。

筆の進みは遅々としたものだったけど、連作短編形式の最初の話はどうか形になった。そろそろ帆影に見せられるかもしれない——そう思っていた矢先に、今日の文芸部だ。

……本を開く時、作者はもう死んでいる、か。

だとしたら、僕の書いた小説を帆影に読ませることに意味はあるのだろうか。

いや、書いた物の感想をもらうのは良いことだと思う。本はそうやって洗練されていくのだろう。でも、僕が書く気になったのは、僕の書いた物を帆影に読んでもらいたかったからだ。

作品を通して僕に言葉が欲しい。今の僕になにができて、なにができないのか伝えたい。帆影に見てほしい。でも帆影は、単純に、絶対的に、ただの物語として文章を読むだろう。

その時、帆影の中で作者ほくは死ぬ。帆影ほど極端な読書観の持ち主なら、きつとためらいなく殺す。この小説の中から僕は消える。

——死にたくない。そんな、あるいは奇っ怪な命乞いが頭で叫ぶ。

そもそも、本として配布された時点で作者の意志が死ぬなら、人間はなんのために本を書くのだろう。

なにかのノウハウを書いた実用書や啓蒙書なんかはまあ、解りやすい。知識を広めて社会を豊かにする。

僕が書いているような物語はどうだろう。商業用なら、読者の感情をマッサージすることで賃金を得ていると解釈できる。でも、最初から売るためではなく書いてる人は大勢いるし、現に僕がそうだ。

でも、帆影にメッセージを送りたいなら手紙を書けばいい。なんで小説を、物語を書くうと思つたのだろう、僕は。

新瀬^{しんぜ}先生こと果穂ちゃんはたしか、受験のストレスに耐えかねて気分転換として書き始めたって言ってたか。僕が子供の頃に映と果穂ちゃんにした即興の「お話」に影響を受けたとも言ってたけど、あれは社交辞令のようなものだろう。果穂ちゃんは映と違って、昔から僕に気を遣ってくれる。

ううん………どうも、よく解らない。ここしばらく、よく解らないことをよく解らない自覚もなく一生懸命にやっていたらしい。

無意味な時間だったのだろうか？ いや、でも、それを自覚できたことに意味があるのか……？

いくら自問しても答えは見つからなかった。

ただ、書いた物を帆影に読んでもらえば、その時に答えが垣間見えるかもしれない。そんな気がした。

僕は小説のデータをUSBメモリにコピーして、バッグにしまった。プリントアウトしなくても部屋のパソコンで読み込める。

——明日、帆影に読んでもらおう。

文化祭の時のように微笑んでもらえるだろうか。期待と緊張でちよつと吐き気がしたが、書いてしまったからには後戻りはできない。

なにより、僕から帆影にした約束だ。

明日のことで頭がいっぱいになって、今日はなにも手に付きそうにない。帆影に告白した日のことを思い出しながら、僕は電気を消してベッドに入った——

しかし翌日、帆影は学校を休んだ。



『きょうはやすみます』

——メールの文面はそれで全部だった。あの性格の上、機械全般が苦手な帆影のメールはもともと簡素で用件のみを伝えるような感じなのだが、それでも漢字変換くらいはする。と言うか、使えるようになるまで僕が教えた。(SNSとかは混乱するだけっぽいし、前みたいに入浴中の写真とか誤爆されても困るのであきらめた)

メールが送られてきたのは昼休みも終わる頃で、僕はあわてて帆影の教室に行つて、酒々井さんを捕まえた。

「ああ、帆影？ 来てないよ。センスは、なんか風邪つて言ってたなあ」

ヨーグルトドリンクのストローから口を離し、酒々井さんはあっさり教えてくれた。

学校に連絡があつたのなら、そう心配は要らないのかもしれない。帆影家の家庭環境は複雑みたいだけど、一人暮らしではないはずだし。

部活のこともあるから、僕にも連絡をくれたのだろう……とは思うけど。

僕は、ひよこひよこ教室へ戻つていく酒々井さんほど気楽になれなかった。

「ま、季節の変わり目だからなあ」

去り際の酒々井さんが残した言葉に窓外を見やれば、今日も降り続ける雨。昨日よりは
大粒な水滴が、さわさわと地上を撫でている。

夏服だとふとした時に鳥肌の立つ——しかし体を動かすと暑く感じる——微妙な肌寒さ
も、昨日から続いていた。

力無いメールの文面からして、軽い風邪という感じじゃなさそうだ。

……まさかとは思うけど、昨日、僕に傘を差してくれた分、自分が濡れちゃったとかじ
や……ないよな？ 急に不安が押し寄せる。もし僕のせいだったら……

少し迷った後、メールに返信した。休むのは解ったということと、無理せずゆっくり休
んでほしいということ。月並みな内容になったけど、「早く良くなって」だとか期待する
文言はプレッシャーになるかも……などと考えると及び腰になってしまう。

返事は、放課後になっても帰ってこなかった。

午後の授業の内容はほとんど記憶にない。帆影のことで頭がいっぱいだった。

風邪で学校を休むなんて大したことじゃないはずなのに、隣の教室の女子一人の欠席に
狼狽ろうばいが収まらない。

（一年の時はどうだったかな……休んでた記憶はないけど、クラスは別だったし部活も毎

日あったわけじゃない。ひよっとしたら帆影は体が弱いのかもしれない。体付きは……とても發育してるけどがちりちりしてる感じじゃないし、運動も苦手みたいだし……風邪をこじらせてどうにかなつちやつたりするかも……)

「だ、大丈夫、新巻くん……?」

不意に声をかけられて見れば、近くの席の赤名さんだった。のんびりした性格の同級生で、以前、映に頼まれて僕を呼びにきて以来、顔を合わせればあいさつくらいはしてくる。

「ホームルーム終わってるよ?」

深刻な顔をして机に張り付いていた僕を心配してくれたのだろう。まだまだ話し慣れない女子の言葉に、僕は舌をもつれさせた。

「あ、ああ……平気。ちよつと考え事してた」

「はっはっは、赤名クン。シヤケ先生は大事な人の具合を心配しているのだよ」

そこにへらへらと割り込んだのは伊井坂だった。オタクでありながらオープンで陽気な伊井坂は、赤名さんともそこそこ仲が良いようだ。だからか、僕のことを「シヤケ先生」と呼んでも普通に話を通っている。

伊井坂の眼鏡に映る自分の顔を眺めながら、赤名さんは小さく首を傾げた。

「大事な人って？ あの可愛い妹さん？」

「いや、アレはこの際どうでもいいんだ」

思わず即答してしまったが、赤名さんは眉をひそめた。

「そんな言い方しちゃダメだよ。礼儀正しくてお兄さん想いっぽい、いい子じゃない。

ホント、可愛かったよ。こう、もじもじして『新巻天太あまたの妹なんですけど、兄を呼んで

もらえますか……？』って。なんか子犬みたい」

身振りまで交えて、映がこの教室に来た時の模様を語る赤名さんは相当に映を気に入ったらしい。まあ、性根に反して見た目だけは可愛いからな。

「そうだよシヤケ先生。先生が気付いてないだけで、ハユユンは可愛い妹ちゃんだと思うよ、うん」

多少は映を知っている伊井坂までもがうんうんとうなずいている。

……そうか。本性を知らないとそう見えるのか。狂犬のような小学生時代の妹を思えば、外面そとづらだけでも淑女になったことを兄として喜ぶべきかもしれない。どうにも釈然としないけど。

「でも、妹さんじゃないなら、誰のこと？」

あ、と止めようとした時には、もう伊井坂は意味もなく得意げに振り返っていた。

「そりゃあ、ヒズ・ステディだわさ」

「すてでい……え、新巻くん、カノジョいるんだ!?　へー、スゴイ……」

赤名さんの反応は、映や果穂ちゃんと違って割りと平然としていた。精々、陰気そうな男子にカノジョがいたことが意外、というレベルだ。まあ、あまり興味がないんだろうけど。

……しかし、同級生の、しかも女子に知られたというのがなんだか居心地が悪い。隠していたわけでもないけど、なんとなく。

「そうそう。そのカノジョが今日休んでるから、シャケ先生はブルーなのだよ」

「ふうん……急に寒くなったし、風邪かな」

「そうみたいだ」

僕が認めると、赤名さんはにわかにな勢いづいて身を乗り出してきた。

「じゃあつ、お見舞に行かないとね！」

「お見舞……?」

なんでか、言われるまでその発想がなかった。これまたなんでか、言い訳がましい声が出た。

「いや、でも風邪くらいで大げさなんじゃ……」

「そんなことないって。病気で家に押し込まれて、辛くて心細くて退屈で、そんな時にカレシが来てくれたら絶対うれしいよ！ わたしだったらうれしいもん！」

普段の穏やかさはどこへ行ったのか、赤名さんはここぞとばかりに力説してくる。いわゆる恋愛話好きなのかもしれない。

そして、女子からそう言われてしまうと、そういうものだという気がしてきってしまう。なにせ女子の気持ちだし。

幸い、住所は判る。部員の名簿に書いてあるし、スマホのアドレス帳にも入ってる。…でも、帆影の家の場合、他に誰がいるのか不明瞭だ。お祖父さんとお祖母さん？ 向この家庭環境も解らないのに、どんな顔してお邪魔すればいいんだ？ こういう場合、手ぶらで行っちゃ失礼なんだっけ……？

怖じ気が顔に出ているのだろう、伊井坂が溜息を吐いた。

「カノジョの家に行きづらいのは解るけどさ。そんな変顔しながら机にこびり付いてくくらないなら、思い切って行っちゃった方がいいんじゃないかね？」

ホカちゃん、きつと喜んでくれると思うよ」

最後の言葉は優しかった。伊井坂のむやみに明るい笑顔が今は頼もしい。時々うざったいとか思ってますまん……

………
喜んでくれる、か………

遠慮は言い訳だ。僕はビビってるだけだ。帆影に会いたいと思っているのに、勝手に向こうの家の都合を想像して逃げようとしている。帆影の全てを知っているわけではないけど、僕が行っても嫌がることはないだろうと、思う。

だったら。

伊井坂と赤名さんの期待に満ちた視線に追い立てられたわけでは——たぶん——ないけれど。

僕は、勢いを付けて席を立った。



帆影の家は、学校の最寄り駅から鈍行で十数分の駅周辺、徒歩で行ける距離の住所になっていた。

僕が普段乗る電車とは逆方向だから、土地勘はまるでない。スマホの地図アプリを頼りに探すしかない。

降り止む気配のない雨は、弱い執拗だった。傘を差していても肌を冷やしながら足下を湿らせて、地味な不快感を募らせていく。築年数のばらばらな家並みは雨にうるおってカエルめいた艶つやを帯びていて、たださえ初めての道をなんとはなしに怪しく、ほの暗く見せていた。

来る途中、何度か帆影にメールをしたがやはり返信はない。不安なのと同時に、とにかく顔が見たかった。

と。

「あ、そろそろこの辺じゃない？」

言われて見れば、電信柱のプレートに目的の番地が書かれている。普段は電信柱になにが書いてあるかなんて気にしてなかったけど、案内役に立つもんだ。でもって、その電信柱を指差しているのは、なぜか我が妹だった。

今日は帰りが遅くなるかもしれないと家にメールしたところ、理由を書かなかったせいか母さんから映に連絡が行き、下校中だった映が駅で待ち受けていた。そして正直に帆影の見舞いに行くと話したら、自分も行くと言い出したのだ。

ぞろぞろと押しかけちゃ迷惑だろうと説得したが、

『男がいきなり一人で訪ねるよりマシでしょ』

と返されると……まあその通りだなと思ってしまったのだった。思い切ったつもりだったが、帆影の家の人から不審に見られるのはやはり避けたい。

「それにしてもお前、なんで付いてきたんだよ」

注意深く表札を見て歩きながら尋ねると、映はお気に入りの傘をくると回した。

「別にいいでしょ。いつもお世話になってる先輩の病気を心配してるだけだよ」

なんて嘘くさいんだ……いつも一方的に噛み付いてる、の間違いだろう。

まあ、この猫かぶりが初対面の人に失礼を働くようなことはないだろうし、そこは心配していないけど、どうも底意そこいがあるように思えてならない——と。

妹への不信感に悩んでいる場合ではない。

『帆影』の表札の掛かった家が、目の前にあった。

平屋ではあるけれど広そうな家だった。スチール製とおぼしき門は引き戸になっていて、古風な木塀もくべいが門の両側に広がっている。中はうかがえそうにない。

幸い、呼び鈴はインターフォンとカメラの付いた新式の物だった。戸を叩いて中の人を呼ぶという、気の弱い学生には厳しいミツシオンを踏まずに済みそうだ。

いやまあ、ただ呼び鈴を押すだけでも激しく緊張するんだけど。動悸が激しくなるんだ

けど。掌のぬるぬるが雨なのか汗なのか判らなくなってるんだけど。

「ほら、早く押しなよ。珍しい名字だし、間違いないでしょ」

急かしてくる映もさすがに声が硬い。ホントに平気ならさっさと自分でベルを鳴らしているはずだ。

民家の前でうろうろしているわけにもいかない。僕は深呼吸とともに意を決して、呼び鈴のボタンを押し込んだ――

作動ランプは点灯するがアラームは家の中でだけ鳴るタイプらしい。通じているのかどうか不安になるシステムだが、そう待つこともなく雨音をスピーカーの作動音が破った。

『はい……………どなた？』

静かで落ち着いた、女性の声だった。最後の「どなた？」の部分で、首を傾げる帆影の顔が頭に浮かんだ。今まで聞いた帆影の話からすると、たぶん帆影のお祖母さんだ。

こっちからは見えていないが、向こうはカメラで僕らの姿が見えているのだろう。僕はあわてて、電車の中からずっと舌の上に準備していた言葉を吐き出した。

「あ、あの、僕は、あ……………」

準備していたはずなのに喉に張り付いていた声を、心の腕を突っ込んで無理矢理に引っ張り出す。

「歩あゆむさんと同じ部活の、新巻といいます。こつちは妹で……歩さん、のお見舞に参りました……」

「兄は緊張しいなだけで、怪しい者じゃないです」

僕が舌を噛みかねない勢いでガチガチなのを見かねて、映がにつこりと——そしてドスンと僕に体当たりしながら——フォローに入ってくる。カメラにどんな画えが映ったのかは考えたくない。

しかし、案に違たがってインターフォンからはあつさりとした声が聞こえてきた。

『ああ、あなたがそうなの。今玄関を開けますから、門の中に入ってきて』

門のすぐ向こうにやや古風な家屋が建っていて、その玄関から女性が出てきてぺこりと頭を下げた。

帆影のお祖母さんは、予想していたより若く見えた。

五十歳代のどの年齢だと言われても納得できる容姿だ。背中まで伸びる灰色の髪をうなじのあたりで束ねていて、ゆったりした和柄わがらの服を着ている。

帆影と雰囲気は似ているが顔立ちに面影はない。むしろ、目の色の茫洋とした感じや表情の薄さに帆影の家系を感じた。

「どうもわざわざ。歩の祖母、露子ふきこです」

しかしさすがに年の功か、声には柔らかな抑揚があつてこちらを歓迎してくれているのが伝わってくる。

僕らはあわててお辞儀を返して、改めて自己紹介をやり直した。

お祖母さんは、ほんのわずかな口の緩みで微笑みを作った。この間ロボを見に行った時の帆船の口ぶりからして、僕のことには知っているはずだけど、どの程度知っているのかは判らない。ただの友達として聞かされているのか、それとも……

僕が次の行動に迷っている内にも、お祖母さんは歩き出していた。その手には傘が提げられている。

「歩の部屋はこちらです」

帆船の部屋は別の建物に在るらしい。

外塀そとびと家の隙間を回り込んで進むと、縁側に面した小さな庭を経て、二階建ての離れ家に行き着いた。八畳間を二段重ねにしたような小さな建物だが、造りは母屋おもやより新しそうだった。

「母屋に部屋を作つてあげられなくてねえ……あ、傘は壁にでも立てかけて下さいな」

鷹揚おつように言いながら引き戸の鍵を開け、お祖母さんはすたすたと中に入っていく。ゆった

りしているようでいて、なかなかさばけた人のようだ。

離れ家の中は薄暗かった。光源はだいぶ高い位置の明かり取りだけで、天井の照明は消えている。

「お……」

「お邪魔します……」

お祖母さんに倣ならって靴を脱ぎ、フローリングの床に上がる頃に目が慣れて——ぎよつとした。

仕切りのない部屋中全てが本棚だった。年季の入ったハードカバーが多いようだが、大判の画集から文庫本まで種々様々な書籍が奇麗に分別されて収まっている。

それ以外のなにもない。まるで小さな図書室だ。

「お祖父さんが道楽で集めてる本の書庫にするために、土蔵を建て直したんですけどね。歩が家うちに住むことになって、あげちゃったんですよ。歩は二階うごの、元は書齋うごだった部屋です」

電気も点けずに進むお祖母さんの後を付いていくと、入り口からは見えづらい位置に階段があった。

土蔵……やっぱり相当に古い家を改築した家のようだ。なんとなく、ミステリー小説に

出てきそうな建物だと思いつながら、ぎしぎしと不穩にきしる階段を上^{のぼ}っていく。階段の上には窓があつて上がるのに支障はなかつたけど、ひっそりした空間が不安なのか映は僕のシャツをつまんでいた。

階段の先にあつた扉を開けば——いよいよ、帆影の部屋だ。

「歩。新巻くんがお見舞に来てくれましたよ」

お祖母さんがノックとともに声をかけたけど、ちよつと返事がなかつた。ややあつて、

「……………はい……………?」

と、なんともあいまいな声が聞こえてくる。出会ってから初めて聴くような、弱々しくはつきりしない声だった。

しかしお祖母さんはそうでもないようで、平気で扉を開けてしまう。

中は畳^{たたみじき}敷の和室になつていた。やはり電気は点いていないけど、窓が大きいので明かりに不自由はない。

こちらにも本棚はあつたが学校で使う物や辞書などで埋まつていようだ。後は古風だが品としては古くなさそうな和机——前に写真で見たタブレットが載つていた——と、カーテンの下りたカラーボックスくらいしか家具がない。

壁を見れば、見慣れた女子制服一式が掛かっている。他の服やなんやはたぶん、押し入

れの中にあるのだろう。

だから、今、帆影がぺたんと座り込んでいる布団も普段は押し入れの中にしまってある物に違いなかった。

「あらまきくん……………?」

「あ……………うん……………」

ぼんやりと言ってくる帆影に上手く答えられなかったのは、緊張していたからというばかりではない。

帆影の寝間着は薄手の夏物だった。寝相のせいか上着はくしゃりと皺になっっているが、ズボンのは寝汗で肌に吸い付いている。暑くて跳ね上げたらしい掛け布団は丸まって隅に除けられ、柔らかな四肢の曲線が露わになっていた。

眠いのか熱に浮かされているのか、焦点が微妙に合っていない瞳は涙を流せばいっしょにこぼれ落ちそうなくらいとろんとしている。普段は白い頬が鮮やかに上気して、唇にかかっていたほつれ毛を直す仕草が妙に艶なまめかしい。

ゆったりした寝間着越しにも存在感を主張する両胸が、心なし荒い呼吸いきに合わせて緩慢に上下していた。

思わず目をそらすと、初めて見るかもしれない帆影の素足の先で、冗談みたいに小さな

爪が真珠の色に輝いているのが目に入る――

次の瞬間。

帆影が握り拳でこしゅこしゅと目を擦り。

映が僕の脇腹に肘鉄を入れ。

お祖母さんが溜息を吐きながら帆影に布団をかけ直した。

「ごめんなさいね。この子、寝ることに關してはだらしなくて」

孫娘のあられもない姿をあくまで冷静に謝るお祖母さんの背後で、帆影はまだ眠たそうにまばたきしている。たしかに寝起きは悪そうだ。

体育座りの姿勢で膝ごと掛け布団を抱き込みながら、訊いてくる。

「あらまきくんは、なんで制服なんですか……？」

さらりと垂れた前髪からのぞく瞳はいつも以上に無防備で、守りたいような付け入ったような、複雑な感情で胸を騒がせる。

「え？ ……ああ、学校帰りにそのまま来たから」

脇腹をさすりながら答えるが、不思議そうに首を傾げられてしまった。

「……？ でもさつきは作務衣さむえを着て、これからゴーレムを作ると張り切っていたのに……」

……

お祖母さんに目を向けると、静かなうなずきが返ってきた。

帆影は完全に寝ぼけている。

夢と現実の境が見えていないようだ。風邪のせいでぼうつとしてしているのか、それとも眠気が取れないだけなのかは判らない。

……でもまあ、帆影の夢に出演できたというのは、正直うれしい……

などと思っているところに、映が進み出て笑顔で——一から十まで作り為なした笑顔で——帆影へ問いかけた。

「どうも帆影先輩。風邪のお加減はいかがですか？」

「あ、妹さん……？ ……なぜ……？ ……？」

帆影は、はてなあ、という風にうつむき、それからゆっくりと顔を上げ、

「坂口安吾の『風博士かぜはかせ』は一度聞いたら忘れないタイトルです。江戸川乱歩の『目羅博士めらはかせ』も……タイトルは大切です。作者が作品のために遺せる、ただ一本の鍵ですから……いい加減に扱ってはいけません……」

「……………」

映は笑顔のまま僕の横に戻って来て、耳へ顔をよせてきた。

「どうしよう。熱でアタマがイカれてるのか、単にいつも通りなのか、判断できないんだけど？」

今度は僕が映の脇腹に手刀を入れた。ぐえ、と可愛げの欠片もない声と物凄い視線が返ってきた。

「……熱はだいぶ下がっているみたいだけど」

僕ら兄妹が醜くいがみ合っている間に、お祖母さんは帆影の額に手を当てて熱を診（み）ていた。お祖母さんの手の冷たさに目を細める帆影のだらけきった顔は、僕らの初めて見るものだった。

裏表のない奴だと思ってたけど、家族に対してはやっぱり違うんだな……

「ごめんなさい。ちよつと目を覚まさせて……着替えもさせますから、下で少し待っていて下さい。」

ほら歩、まずは水を飲みなさい」

枕元の水差しから湯呑み——将棋の「歩」の駒がプリントされたやつだ——に水を注ぎ、がぶがぶと孫に飲ませるお祖母さん。帆影の反応を気にせず、平坦な表情でそれをするお祖母さんには一種独特な迫力があつた。

そんなお祖母さんに言われては介抱を手伝おうと申し出るのとはばかられる。おとなし

く従って、僕らはすごすごと部屋から出た。

唇の端から一滴の水を垂らした帆影の寝ぼけ眼は、扉を閉めるまで僕を追っていた。

「さすが、帆影先輩の家族だけあつて変わつてるね」

「お前な……失礼なことを言うな」

「ユニークって別に悪口じゃないでしょ」

階段を降りながらたしなめる僕に、映は悪口ならぬ減らず口を返してくる。

僕は重い息を吐いた。二階の扉は閉まつてるからお祖母さんには聞こえなかつただろうけど、もし聞かれていけば、人格に問題のある小娘の兄だと知られて二度と敷居をまたげなくなるかもしれない。それは困る。

「とにかく、人様の家で変なこと言うもんじゃない」

「そんなに気にせんでもいいよ」

「いえ、そういうわけには——」

思わず言いかけて、気付く。映も、階段から一階へ足を下ろしたところできよつとして
いる。

今のは知らない声だ。低く重々しい男性の声だ。帆影やお祖母さんのものではありえな

い。

見ると、本棚の間からにゅつと顔を出している人がいる。映がひつと喉を鳴らしてしまつてきた。

「驚かせたか」

本棚から出てきたのは、半ば予想していた通り、お爺さんだった。

お祖母さんより一回りほど年上で、やっぱり帆影には似ていない。なんだか硬そうなお口髭がまず目を引く厳めしい顔つきだが、表情は穏やか……と言うか超然として無関心な感じで、がっしりした体格とぴんと張った背筋も相まって静かな威圧を覚える。

まず間違はなく、帆影のお祖父さんだろう。分厚い本を小脇に抱えていることからして、母屋から本を取りに来たのかもしれない。

ともかく、ここで黙り込んでしまつては我ながら不審者だ。

「あ、あの、僕は怪しい者じゃなくて——」

怯えてしまった映をかばいながら釈明を試みるが、お祖父さんは片手を上げてそれを制止した。

「そりやそうだろう。学校の制服姿で泥棒に入る馬鹿もまあいない」

あつさり言つて、片目を瞑る。

「女子は歩と同じ制服、男子の方は歩と同じ学年色。他学年の組み合わせからして、部活動か委員会の関係者か」

比較的単純な状況ではあるが、お祖母さんから事情を聞く時間はなかったはずなのに一目でほぼ正解だ。

「ついでに言えば、ここの玄関には婆さんと歩のも含めて、四組の靴がきちんとそろえて置かれている。靴に付いた泥の跳ね方も上品なもんだ。

従って、この離れには混乱も狼藉も認められない。お前たちを案内したのは婆さんで、察するに学校を休んだ歩の見舞客だ。違うかな？」

「い、いえ……御名答です」

お祖父さんは満足げにうなずくと、案外に愛想のいい仕草で自分を指差してみせた。

「俺おれは歩のお祖父さんだ」

顔はちよつと恐いけど、そんなにおっかない人でもないのかもしれない。お祖母さんも落ち着いた人だったし……と、わずかに緊張を緩めて、僕は改めて自己紹介した。

「僕は……お孫さんと同じ部活の、新巻天太といいます。こっちは妹の映です」

「……お前まへが新巻なにかし某なにかしか」

……名乗った途端、お祖父さんからの「庄」が急に強くなった……気がする。気の

せいかもしれない。きつと気のせいだ。

お祖父さんはじろ、ぎろと頭から足まで僕の風体を観察して、

「そういえば、なんでお前たちだけで降りてきた？」

今さらのことを訊いてきた。

「帆影先輩……えと、歩さんが寝起きで着替え中なので、待たせてもらっているんです」

と、これは、ようやくお祖父さんの顔に慣れてきたらしい映が答えた。お祖父さんは映に軽い一瞥いちべつを向け、それから「ふむ」と息を抜いた。

「よし、俺が母屋でもてなそう。付いてきなさい」

「え？ でも……」

「おい婆さん！ お客さんに縁側で茶でも飲んでもらうからな！」

戸惑う僕らには構わず、お祖父さんは階上に大声で呼びかけて、返事も聞かずに離れから出て行ってしまう。

お祖母さんが二階から顔を出した頃には、もうお祖父さんの姿はなかった。

「はあ……ごめんなさい二人とも。悪いんですけど、あの人に付き合っただけであげてくれますか。ヘソを曲げると冷蔵庫の中身を無視して夕食の献立を決めつけて譲らないから、面倒

くさくて……」

お祖母さんの微妙に切実な要請を断るわけにもいかず、僕は映と顔を見合わせてからお祖父さんの後を追った。

来る時に通った縁側まで戻ると、お祖父さんはもう家の中から魔法瓶や湯呑みの載った盆を持ち出してきていた。ずいぶんとせっかちな性格のようだった。

「まあ座りなさい。家の中より涼しい」

「はあ……」

言われるまま、お祖父さんに倣^{なら}って縁側へ腰を下ろす。この場合、自分から申し出てお茶の用意をすべきか迷ったが、迷ってる間にお祖父さんがさっさと魔法瓶からお茶を注いで僕らに差し出してきていた。

「いただきます……」

ちよつと温^{ぬる}めだったけど、その分飲みやすい。自分で思っていたより喉が渴いていた僕は、香ばしい液体をごくごくと口へ流し込んだ。

——そのまましばし、沈黙が落ちる。

てつきり、お祖父さんはなにか話したいことでもあつて僕らを連れ出したのかと思つて

いたのだが、庭先の植木鉢を見つめたまま口を開く気配がない。

シルクを擦るような雨音だけの空間を騒がせたのは、意外と言うべきか、映だった。

「あ、あの……歩さんは、お家ではどんな感じなんですか？」

お祖父さんは目だけで映を見て、口髭に縁取られた唇をもごごと動かした。

「逆に訊くが、学校でのあの子はどんな風なんだ」

「え………ああ、つと」

映は視線を宙にさまよせてから、必死で頭を巡らせているようだった。

「何事にも動じず落ち着いていらして、とても博学で……それにユニークな先輩です」

全力で言葉を選んで本音を繕った跡の見える表現だった。帆影を褒めることによほど心

理的な抵抗があるのか、唇の端つこが歪んでいる。

「なるほど、悪口ではないな」

お祖父さんは淡々と言った。……さつき階段でしていた会話は聞こえていたようだ。映の額に汗玉が浮くのが見えた気がした。

「歩のことだ。大人しく本ばかり読んで、でも口を開けば突飛なことを言っつて、注意されても嫌味を言われても一向に応えない。まあ無害な変わり者をやってるんだろう。」

家でもそんなもんだ」

お祖父さんは帆影のことをおおむね理解しているようだった。その上で、誇るでもなく恥じるでもなく、ただそういう子供として語っている。

帆影がお祖父さんを慕っているようなのは言葉の端々からうかがえていたけど、その理由が解った気がした。

「だが」

言いかけて、お祖父さんは湯呑みをおおった。大きな吐息ともに続ける。

「最近は妙にはしゃいでる。顔には出んのだがな、物腰に……こう、弾みがある。学校に行ったり出かけたりするのが楽しいようだ。ま、ようやく世間並みに近付いたということなんだろうが」

「そうなんでしょうか」

気が付くと、口を挟んでいた。

「僕はお孫さんと会って一年以上になりますけど、そういう変化はよく判りません。いつも迫らない感じで、自分を曲げず他人に押し付けない……つまり、本質的なところで独立した人という印象です」

家族にしか見せない、見て取れない微妙な変化なのかもしれない。もしそうならなか悔しいし、教えてもらいたいと思った。

複雑な感情を持って余している僕の顔を、お祖父さんは凝^{じッ}と見つめてきた。

「うん。言いたいことは解る。あの子は、自分が納得することにはこだわりますが、自分以外のことにはこだわらない。関心はあるが、自分の思い通りにしようとは思わない」

「はい、はい。ホントに、そんな感じで」

帆影のことを訊けるチャンス。思わず身を乗り出しそうになる僕のシャツを、映が「どうどう」と引っ張って押し止めた。

そして、交代するように訊く。

「どうして先輩は、そんな風に育っちゃったんですか？」

直球の質問だ。言葉遣いも崩れている。

お祖父さんは答えずに、またお茶を口に含んだ。よく味わって飲み込んで、それからあつさり言った。

「俺は息子から縁を切られてる。息子というのは歩の父親なんだが」

「え……それは……」

「法的な話じゃない。平たく言えば絶対好ってやつだな。もう七、八年は会ってない。家で預かっている歩も会ってないだろう」

「な——」

他人が聞いていい話なのかどうか——なんて当然の疑問は、頭になかった。

「なんで、そんな……？」

「つまらんケンカだよ。」

歩の父親は家から独立して隣の県で所帯を持って、薬剤師をしていたんだが、地元の年寄りの話し相手になったり相談を受けたり、ちやほやされてる内に妙なことに目覚めちまっつてな。

やれ現代の希薄な人間関係にIT世代の『講』を作って絆を取り戻そうだの、太極拳を取り入れた健康体操で体と心を良い状態に保つ『善』のパワーを高めようだの、わけの解らん自称ボランティア活動を始めた」

お祖父さんはあくまで淡々と語っているが……なんか、雲行きが怪しくなってきた。

「俺には全く理解できないのだが、地元の名士だかが熱心なパトロンになってくれたとかで活動は成功を収めたらしい。しまいにはNPO法人まで立ち上げてな。体育館いっぱい参加者の中心でにこにこしている息子夫婦の写真を送ってこられて、俺と婆さんはどうしたもんかと三日ほど投げ首したぞ。」

まあ、結果から言うとなんか放っておくことにしたんだが。世間の迷惑にならず、みんな喜んでるなら好きにした方がいいと」

変な話だが——帆影のお父さんの話を聞いた今では変な話だが——実に、帆影のお祖父さんらしい割り切り方だと思った。

「さらに活動は地方紙に取り上げられたりして、調子に乗った息子夫婦は活動を全国へ広げようと考えた。ローラー作戦で大小問わず自治体に電話しまくり、話に乗ってくれそうな場所を^{あんぎゃ}行脚することになった。地域に密着して、ある程度の時間をかけて根付かせなきゃいけないとかで、そのどき回りは長引きそうだった。

家を空ける間、小学生だった歩は家^{うち}で預かることになったんだ」
ようやく帆影が登場した。

「歩はその頃から大人しい子で、両親に置いていかれても平気な顔をしていた。涙なんてあくびした時くらいしか見たことがない。家には玩具^{おもちゃ}もなにもないから買ってやろうと言っても、自分が持ってきた本があるから要らないと言う。

息子夫婦は読書を『いいこと』だと思っていたから——豊かな感情を育む、だとかそういうフレーズが大好きな連中だ——、児童書や図鑑の類を余るほど買ってやっていたんだな。

転校したばかりの小学校でも放課後に遊ぶような友達ができなかった歩は、日がな一日本を読んで、持ってきた分がなくなると俺の書庫で読めそうな物を探して読み始めた。写

真の多い動物の本とか、少年探偵だかってタイトルに付いてるやつから読んでたかな。今じゃ、その書庫の上に住み着いてんだから筋金入りだ」

……どうしよう。正直すごく暗い子供時代んだけど、容易に想像ができてしまうし、帆影はたぶん、それなりに楽しくやってた気がする……

「その頃、俺はまだ働いてたが、帰るなり歩がやってきて、その日読んだ本のことと質問攻めにされた。こう言っちゃなんだがヒマな子供だったよ、ホントに。

俺が小学生の時は近所の友達と遊び疲れて本なんて教科書ですらろくに読まなかったのに、歩は他にすることがないもんだから、本の話しかしないし、俺や婆さんが相手している途中で電池が切れたみたいに眠っちまう。あれじゃ学校に友達なんてできやしまい。

でもまあ好きでやってるようだし、婆さんが学校の先生に聞いた話じゃ生活態度は良好だってんで、放はつといた。

叱ることと言えば寝坊癖と、子供のくせにやたら長風呂なことくらいだったな」

その辺は今でも変わっていない。と言うか、帆影は子供の時から全然変わっていないようだ。物事を感覚でなく理屈だけで考えて、それを追究することにためらいがない。

でも、そういう風に「なんで？」を繰り返す子供というのは、実は珍しくないんじゃないかと思う。僕や映の小さい時だって、多かれ少なかれそんな傾向はあったはずだ。帆影

がそのまま高校生になったのはたぶん、お祖父さんやお祖母さんが咎めなかったからだ。往々にして、質問を繰り返す子供というのはうるさがられるし、ともすれば生意気だと矯正されてしまう。そこを帆影は、この風変わりな祖父父母に受け入れられてしまった。

それがこの家の教育方針だったのか、二等親故の無責任だったのかは僕には判らない。僕が知っているのは、結果としての高校生・帆影歩だけだ。

文芸部室で黙々とページを繰っている帆影の静かな横顔を脳裏に描く内にも、お祖父さんの話は佳境に入っていた。

「歩が小五の時だったか。ようやく活動が一段落して腰を落ち着けられるようになったとかで、息子らが歩を引き取りに来た。

学年の変わり目まで待てないかとおつちが引き留めたのが、口論の始まりだったと思う。俺はただ、変なタイミングで転校すると歩もいろいろ面倒くさいだろうと言ったんだが、息子は深刻ぶって首を横へ振ったもんだ。

『そういうことじゃない。親子の愛情の問題だ。子供には父親と母親が必要だ。離れていったって親子の絆は決して消えないが、両親と同じ屋根の下で寝食をとにもすることで子供は心の宇宙をバランスよく育てて、正しい理性を持った大人になっていくんだ。』

離れていた時間の分、僕らはできるだけ早く絆を結び直さなきゃならない』

……だったかな。そんなことを言って歩を連れていこうとしたんだが、さすがに呆れてしまつてなあ。思わず、日頃思つてたことを言つてしまつたよ」

お祖父さんは湯呑みに残つていたお茶を飲み干してから、当時を思い出したか遠い目をして、言つた。

「お前。そんなことを言つたつて、お前なんぞ俺と婆さんが薄汚い股座またぐらの間でこね回した細胞がぶくぶく膨れ上がっただけのバケモノじゃないか。そんなのが愛だとか心の宇宙だとか大仰なこと、言つてて恥ずかしくならんのか？ つて」

………いや、解るけど。言わんとすることは解りますけど。

実の息子に言うことだろうか……

「実の息子に言うことか、と息子は顔を真っ赤にして怒りだしてしまつてな。あまりの剣幕に嫁さんは泣き出すは、婆さんは言わんでいいことをつて顔して睨むは、俺も困り果てた。しかし、だからと言つて間違つたことを言つた覚えもないからだんまりを決め込んでやつた。息子はさらに激昂した。

『あんたはずつとそうだ！ 人間の心や魂に無関心で、自分の子供にすら動物を飼うように冷たく接して！ 人嫌いだかなんだか知らないが、愛情を受けて育つ他の子供たちを見て、僕がどれだけ惨めな想いをしたことか！』

なかなか名演説だったな。なんであいつがああいう活動に溺れたかちよつとは解った気がした。俺の感想は差し控えよう。歩には関係のない話だからな。

息子は一通り喚き散らしたが、俺に手応えがないと見るや、歩を連れて行こうとした。こんな変人の家には置いておけないというわけだ。

だが――

「――帆影は、納得しなかった」

思わず。

お祖父さんの言葉に先回りしていた。帆影ならそうだろうという確信があつた。なにを考えているのか知れない目で、お祖父さんが僕を見る。

その間に、映が如才なくお祖父さんの湯呑みに茶を注いだ。お祖父さんは目を伏せて映に礼を表しつつお茶を口に含んで、話を続けた。

「ま、そういうことだ。歩は『わたしはお祖父さんの話の方が、フに落ちます』と小学生らしからぬことを言い出して父親を困惑させた。

『人間は、宇宙に浮かぶ岩の水たまりに住む微生物が、テキトーにブンレッツしていたら、なんとなん、今の形になったというだけの生き物です。』

アイだとかキズナだとか、そんな不たしかな言葉をつかわなくても説明できます。ヒト

にそんなものは、いりません』

……今でも覚えてる。まだ頑^{がん}是^ぜはないような口調で、歩は父親に語り出した。息子夫婦だけでなく、俺も婆さんも呆気にとられた』

……その時の情景が、目に浮かぶようだ。放課後に文芸部室で自説を開陳するいつもの帆影。その縮小版が、何年も前のこの家に居たのだろう。いつもやり込められている映などは、頬を引きつらせている。

僕らがあまり驚いていないのを目の端に映しながら、お祖父さんの話は続く。

「息子は混乱しながら、愛情や人と人との温かい関わりが豊かな人間を作るとかいう持論を歩に語りかけた。しかし歩は筋道を立てて、なぜそうなるのか追究して、辻褄が合わなければ批判した。

何十分費やしたか。自分の言葉が通用しないと悟った息子は、歩から逃げて、俺に向かってこう怒鳴った。

『僕の子を洗脳したのか!?!』

……その時の俺が返した態度は、正直言ってまずかったと思う。それに関しては息子にすまないと思っっている。

だがまあ、その時は思わず、爆笑してしまったんだ』

「爆笑………」

「いや、だって、言うに事欠いて洗脳だぞ。笑うだろう。婆さんは後になって『笑うことはなかったじゃありませんか』なんてネチネチ嫌味を言ってくるが、俺は婆さんが泣いているふりをして肩を震わせていたのをはつきり見たぞ。あれは笑いをこらえていたんだ。夫婦生活の全てを賭けてもいい。断言する。

「だいたい、あの婆さんはよそ行きには涼しい顔をしてるがひどい笑い上戸で……いや、それははどうでもいい。」

ともかく、息子は理性の限界だったのか歩を放って逃げ出した。嫁さんは戸惑いつつも歩や婆さんと少し話したが、付いてくる気がないと解ると頭を下げて出て行った。

結果から言えば、それから今に至るまで、歩はこの家の子として生きている」

「そ、それきりなんですか？ 息子さんたちとは……」

「息子には会ってない。嫁さんとは定期的に婆さんが会って話をしてるが、今は歩を引き取ることに躊躇してるみたいだな」

「……どうしてですか？」

「立場が立場だ。健全な子育て環境の推進にも力を注いでる団体の役員が、歩みたいにへんで、こな娘を持つてるなんて知れたらイメージに関わるだろう。あの子に社交的な振る

舞いができるとも思えんしな。

……ああ、そう恐い顔をするのではない。歩の母親は息子に惚れきってるみたいで言いなりだが、ちゃんと娘を心配してるし、三月みつきに一度くらいは歩と顔を合わせてる。ただ、お互いの生活を尊重してるだけだ」

「は、はい……すみません」

怒気が顔に出ていたことを指摘され、僕は何度かまばたきした。汗が目に入って、体温が上がるほど聞き入っていたことに初めて気付く。

ここまで聞いて、帆影のことが少しは解った気がする……と思うのは浅はかなのだろう。ただ、帆影がどういう家で、どういう家族と過ごしてきたのは知れた。

それだけで、頭を下げるには十分だ。

「あの……ありがとうございます。歩さんのこと、聞かせて下さって」

お祖父さんは鬱陶しそうに手を振った。

「非常勤で続けてた仕事も辞めて暇なんだ。無口なジジイでも会話に飢える日はある。察しろ。」

……ああ、そういえば、歩についてまだ話してないことがあったな」

「? はい」

「風邪を引いた理由だ」

「理由ですか？」

「うん。昨夜のことだ。夕飯の後、歩が風呂に入ったままなかなか出てこないから、婆さんが見に行ったら長湯で上気せちまって、出ることは出たんだが脱衣場で裸のままぼーっとしてたらしい。それじゃ風邪も引く」

「ホントに風呂好きなんですね……」

「とは言っても、以前はそんなでもなかった。去年から、風呂にタブレットを持ち込んで本を読むようになってな。長湯に拍車がかかった。

昨日も、読みかけだった推理小説の区切りが悪くてつい目眩がするまで読み続けてしまったらしい」

「………そ、それは体に良くなさそうな………」

辛うじて受け答えしつつも、僕はぎ・ぎ……と視線をお祖父さんから逃がしていた。背筋に冷たいものが流れ落ちる。

「そもそも機械オンチのあの子が、急にスマートフォンで本を読みたいと言い出すから何事かと思ったもんだ。読みづらかろうと余ったタブレットをくれてやったんだが、話を聞けば部活の友達から教えられたという。」

新巻くんが教えてくれたから早速試したいと、ずいぶん張り切ってたよ」

「……………す、すみませんでした」

まさか、帆影が風邪を引いたのが僕のせいだったとは……最初に会った時、じろじろと睨まれたのは当然だ。とても可愛がっている——ようにしか聞こえなかった——孫にろくでもないことを吹き込んだうろんな若造だと思われているのだろう。

どうしよう……正直に、交際させていただいておりますと申し出るべきだろうか。いやでも、帆影が僕のことをどう説明しているのかも判らないし、勝手に言ってしまうといいものだろうか……？

などと僕が悩んでいると、まるで見計らったかのようなタイミングで救いの手が現れた。

「そんな意地悪言うことないでしょう」

いつの間に離れから戻っていたのか、帆影のお祖母さんだ。着替えた分だろう、帆影の寝間着やタオルを抱えて縁側の前に立っている。

それから僕に向かって、口元を柔らかく緩めた。

「気にしないで下さいね。悪いのは自己管理できない歩なんですから」

「い、いえ、とんでもないです……」

そう言われて開き直るわけにもいかず、我ながらしどろもどろにならざるをえない。

「別に責めてやしない」

「それならけっこう」

ぼそりと言いつ返すお祖父さんを手短にいなし、お祖母さんは服を抱えていない方の手を離れ家に向けてみせた。

「お二人とも。歩も目を覚ましましたから、会ってやって下さい。鍵は開いてますから」

「は、はい。それじゃ……」

お茶菓子のバックを開けようとしていた映を目で促し、バッグと傘を持ってあわただしく立ち上がる。

「新巻くん。歩の風邪のこと、ホントに気にしないでください」

離れまでの短い距離、傘を広げるか迷う僕に、お祖母さんが静かな声をかけてきた。

「歩が両親にここへ預けられた日も、両親と別れた日も今みたいな雨の続く日でした。その時あの子は泣かなかった。一滴の涙も出さなかつた。」

ただ、こういう雨の日には、よく体調を崩すんですよ」

僕は改めてお祖父さんとお祖母さんに頭を下げたが、お祖母さんは手を横に、お祖父さ

んは手を縦に振った——犬でも追い払うように——。

とりあえず、緊張のあまり渡し忘れていた手土産の今川焼きはお祖母さんに受け取ってもらえたのでよしとしよう。

それから、映と連れ立って帆影の居る離れに戻る。

「いやあ、しかし」

薄暗い書庫の引き戸を閉めた途端、映は嘆じるように言葉を落とした。

「全体的に頭おかしいよね、この家の人」

僕は無言で妹の頭頂にチョップを打ち下ろした。そんなに強くは打たなかったはずだが、映は頭を押さえて怨めしげに睨め上げてくる。

「だって、ホントのことじゃん。

無愛想でフリーダムでもミもフタもなくで、自分の信念なのか知らないけど放任を子供に押し付けて、傷付けてもけろりとしているお祖父さん。

自分の親が素っ気なかったからって、人間愛の押し売りみたいなことにハマっちゃったお父さん。

そんな旦那にべったり付いていくだけのお母さん。

でもつてとどめに、両親より本を選んじやったような感のある帆影先輩。

お祖母さんは……話した限りじゃ割りとはともつぽいけども、でもこういう家庭で平気な顔してるだけでもちよつと変わってるよ、やっぱり」

……うなずくわけにはいかないけど、映の言う通り、特殊な家庭環境ではあるだろう。ここに比べれば僕らの家なんて平和なもんだ。夫婦喧嘩も親子喧嘩もあるけれど、どれもこれもホームドラマでよく見かけるような、平凡なシチュエーションのものでしかない。だから、帆影がどんな気持ちで両親と、祖父母と関わって、育ってきたのか、その気持ちを想像することもできなかった。

帆影みたいにもつと本を読めば、あるいはインドアなオタクをやめて積極的に人と交わって人生経験を積みめば、その内に理解できるのだろうか。

そうかもしれないし、そうでないかもしれない。なんにしろ、今は……

僕はなんとなく、本棚の間にわだかまる暗闇に目を預けながら、映へ言った。

「映。悪いけど、ここで待つててくれないか」

「は？」

なにそれ？ と、妹が片頬をひくつかせたのが見ないでも判った。

「カノジヨの部屋で二人きりになりたいってこと？ 相手は一応病人だよ？」

「解ってる。そういうんじゃない」

映に目を戻すと、妹は予想したのと寸分違わない顔をしていた。なんだか安心する。

「今、帆影と二人で話したいことがあるんだ」

妹はしばらく、薄暗がりの中で目をぎらつかせていたが、やがてふいと目をそらして階段に座り込んだ。

「さっき駅前で見たラーメン屋、美味しそうだったから帰りにゴチソウしてよ」

「いや……母さん家で夕食用意してるだろ」

「だいじょうぶ。ラーメン屋を見かけた時点で夕御飯要らないってお母さんにメールしたから」

……最初からオゴらせる気満々じゃないか。休み中にバイトしたって言っても、そんな豪気な財布じゃないんだぞ。

とは思ったが、背に腹は変えられない。

「追加トップینگは無しだからな」

僕は映の頭に手を乗せて言い置きながら階段を上がっていく。

妹の舌打ちが、雨音の籠もる書庫を鋭く切り裂いた。

ノックと呼びかけに「はい」と短い返事を聞いてから、僕は帆影の部屋のドアを開けた。

部屋の様子は、さつき入った時と大差ない。ただ、乱れていた布団がウソみたいに綺麗に整えられて、その上で正座している帆影が着替えているのが違いだ。

布団の前には、座布団が二つ並んでいる。片方は、さつきは和机の前にあつた座布団だった。もう一つは押し入れにでも入っていたのだろう。

帆影は持っていたヘアブラシと僕を見比べて、それからブラシを脇に置いて、小さく頭を下げた。

「さつきは、すみませんでした……寝ぼけてしまっていて」

「いや、こつちこそ起こしちゃってごめん……」

座布団に座りながら、帆影を観察する。まだ熱っぽいのが、さつきよりだいぶ意識がしつかりしているように見えた。姿勢もいいし、着替えたばかりだから当然だが寝間着もさつきみたいによれよれではない。

乱れていた髪も梳かしたようだ。いつものヘアピンを着けている。

顔を上げた帆影は僕を見た。さつきと違って、平常文芸部室で見せてくれる、理性的なのにどこかとらえどころのない目だ。まだ引かない熱に、目を朱らめさせていたけれど。

僕が見返すと、帆影は膝の上に置いた手をゆっくり握って、開いた。

「今日はすみませんでした……メール、何度ももらってみたいなのに、わざわざ来ても

らって」

いつもと同じかと思っただけど、話している途中で目が部屋のあちこちへ飛んでいる。なにか気になることでもあるのだろうか？

「い、いいんだ。勝手に押しかけてきただけだし。あ、伊井坂もよろしくって言ったよ」

「はい。伊井坂さんからも来てました」

メールのことだろう。その辺はマメな奴だ。眼鏡の似合う顔を思い出すと、僕をここに送り出した言葉も聞こえた気がした。

『ホカちゃん、きつと喜んでくれると思うよ』

……喜んでもらえているのだろうか？ 一応は恋人だというのに、帆影の薄い表情からはなにも読み取れない。

黙ってしまった僕をいぶかったのか、帆影は小さく首を傾げた。それから、気付く。

「妹さんは……？」

「ああ……ちよつと話したいことがあって、下で待ってもらってる」

「話したいことですか……わたしと？」

「うん」

熱のせいかわりにまばたきする帆影に、僕は膝を正して続けた。

「お祖父さんから聞いたよ。帆影と、帆影のお父さんたちとのこと」

帆影は口を開いて、それから少し、そのまま止まった。

「……そうですか」

遅れて出てきた言葉は、なんとも宙ぶらりんな響きをしている。

自分の来歴を聞かれたことに対してどんなりアクションをするべきか、見当が付かないのだろう。

そんな帆影に、僕は頭を下げた。

「ごめん」

「……………？なにがですか？」

「もっと早く聞いとくべきだったよ。帆影のこと」

言いながら顔を上げる。帆影は、心当たりのないことで謝られて少し困ったような顔をしていた。

「だって、そうしてれば、帆影がなんで映と話がすれ違うことをあんなに気にしてたのか、少しは解ったと思うから」

帆影は、そのすれ違いが過ぎればどうなるか知っている。場合によっては家族だってバラバラになることを知っている。ひよつとしたら自分ではなく、帆影と付き合ってる僕と

映の仲が悪くなることを心配してくれたのかもしれない。

僕の言葉に、帆影はなにも答えなかった。相変わらずの無表情だ。窓を洗う雨の音が耳に障る。

ともかく言い切ってしまおうと、続けた。

「それに、ロボの立像を見に行った時も、人込みで気分が悪くなったって言ってたけど、親子連れが多くて気になったんじゃないか？」

さっきお祖父さんから話を聞きながら思い出したことがある。あの時、帆影は親子連れがカメラの前を横切ったあたりから顔色が悪くなっていた。もちろん暑さや人の多さも原因だったろうけど、自分には解らない関係を築く親子の姿を見ることがストレスになっていたのではないだろうか。

もし僕が帆影の事情を知っていれば……なにをできるわけでもないにせよ、少しはマシな気遣いができたかもしれない。

だから、遠慮と臆病で帆影の家のことを訊いていなかったことを、今は後悔している。

「帆影のことが解らなくていろいろ考え込んだりしたけど、もつと自分から知ろうとしないといけないと思った」

「……………」

帆影はちよつと僕を見て、それから自分の膝へ目を落とした。そして、

「……………よく、解りません」

うつむいたまま、聞いた覚えのある言葉を落とす。

「わたしは自分を客観できません……自分の外に立てるような足場がありません。

他の人の気持ち解らないから、他人の目で自分を見られません。だから、自分のことは教えられないと思います」

「そんなこと、僕にだって解らない。だからだ。だから、僕が帆影を観るんだ。

言っただろ、痛めつけたり傷付けたりしたくないって。そのために」

のろのろと顔を上げた帆影の目を真っ直ぐ見返す。

「今のことも、昔のこともいい。帆影の気になつてることがあるなら、話してみてもいいと思ってる。……帆影もこの間、僕のことを聞けてうれしかったって言ってくれたら？」

そのことだけ、伝えたかったんだ」

僕の言葉を受けた帆影に、しばらくは反応がなかった。ただ、そのままの姿勢で深呼吸をしたようだった。

「新巻くんは……………いえ」

それからなにか言いかけて、やめて、

「では……訊いていいですか？」

常以上に真面目な顔で言ってくる。僕はうなずいた。

「ああ」

「……この部屋は、おかしくないですか？」

………

意図が読めず、とりあえず見回してみる。さつき来た時とあまり変わらない。ござっぱりとした和室だ。本棚の中身が雑然としていたり、枕元のお盆に水差しと湯呑みに並んで風邪薬が置いてあったりすることくらいしか、特筆するような異状もないと思う。

新しく気付いたことと言えば、机の上に教科書とともに、去年文芸部で出した文集が並んでいた。でも、それなら僕の部屋にもある。

なにかのクイズなのかとも思ったが、病人に仕込む余裕もないだろう。正直に答えた。

「おかしくはない……かな？」

いやまあ、そもそも離れ家——しかも本来は書庫——の二階に住んでいるという事実が変わってはいるが。今時、畳に布団で寝ているのも珍しいとは思う。

ともかく帆影は、僕の答えを聞いて安堵したようだった。胸に手を乗せて——当ててい

るのではなく、乗っていた……、息を抜いている。

「……同年代の人の部屋をよく知らないの、戸惑われているのではないかと落ち着きませんでした」

それでさつきから部屋の中をちらちら見ていたのか。

「人の部屋なんてそれぞれだし……映に言わせたら、マンガやフィギュアだらけの僕の部屋の方がおかしいことになると思うよ」

「そうなんですか？」

首を傾げる帆影を見ながら、いつか僕の部屋へ彼女を呼ぶことがあるのだろうかと考えてしまう……片付けとかないと。念のため。

このやり取りで少しは気が楽になったのかもしれない。続けて帆影が口を開いた。

「——お父さんとお母さんと別れて暮らすことになった時、わたしは、泣きませんでした。その場だけでなく、その後もずっと、泣きませんでした」

お祖父さんやお祖母さんもそう言っていた。僕はただうなずいて、耳を傾けた。

「ああいう時、小説とかでは泣いたり悲しんだりするものですし、お祖母さんも何度も平気か、無理してないかとたしかめてくれたので、きっと普通の子供は泣くものなのだろうと思いました」

泣かなかったからって、それが悪いわけじゃない——と、言いたくなる口をすんでのところで閉じる。今は、帆影が話し終わるまで聞こうと思った。

しかし、帆影の方が僕へ訊いてくる。

「覚えていますか？　なんで人が泣くのかと話したこと」

あー……………BL話の流れで、「青頭巾」あおずきんの僧侶がなんで屍体を喰うようになったのかって考えた時のことか。

「えっと……………赤ん坊の時、泣けば世話してもらえるのを覚えて、だから慰めてほしい時とか助けてほしい時に泣くようになるから、だっけ」

あくまで一つの仮説だとは思うけど、個人的には筋が通っていて納得できる話だった。

帆影はこくと小さくうなずいた。

「はい。だからわたしは、お父さんとお母さんがいなくなる時、あなたたちは要らないと言ってしまったことになります」

「それは……………」

親が離れたのに子供に泣かれない、ということとは、そういうことになる……………のだろうか。

子供がもっと大きければ、それは当たり前のことだ。でもその時の帆影は小学生で、帆影の両親は心から家族の絆や通じ合う心を信じている人たちだった。

「わたしはたぶん、お父さんやお母さんに酷いことをしてしまったのだと思います」
そう言った帆影の表情に、やっぱり悲しみは見えない。ただ、屋根を透かして雨を浴びているような顔をしていた。

「もつと小さな時はよく泣いていたように思います。転んで痛くて、お腹が空いて、幼稚園の子供にいじめられて、駅で迷子になって……今みたいに、病気で心細くなって。」

そのたびに泣いて、助けてもらった両親を、わたしは突き放してしまっただんです。いえ……頭ではその気はなくても、心が『要らない』と判断して涙を流させなかったんだと思います」

「そのことを後悔してるのか……?」

帆影はあいまいに視線をさまよわせた。

「……問題は、あまり後悔していかない気がするのだと思います。平気なんです。悪いことをしたと思っっているはずなのに、胸の痛むようなことはありません。」

だって、わたしにとっても、お父さんやお母さんにとっても、離れて暮らす方がよりメリットの多い生活をできるのだから後悔する必要はない、と、そう考えてしまえますから。妹さんが言うように、わたしは心の持ち様ようがおかしいのかもしれないかもしれません。そんな自分と周りのずれが、今も誰かを苛立たせたり苦しめているのだとしたら……それが不安なんで

す」

そこまで来て、彼女の目は僕に留まった。

「ちよっと前までは、そういうこともあまり気にしていませんでした。お祖父さんとお祖母さん以外に毎日親しく話す人もいませんでしたし、わたしの言うことに呆れたり怒ったりする人はすぐに離れていくから悩む必要もありません。

でも今は、部室に行けば新巻くんや伊井坂さんが話をしてくれて、教室では酒々井さんのような人もできました。そういう人たちも、もっとわたしを詳しく知ったら離れていくんじゃないかと、それは……怖いんです」

そこまで言って、帆影は深く吐息した。弱々しくも長い息だった。

すぐには、なにも言えない。聞いた話を反芻はんすうして、考えた。

……帆影はつまり、両親と解り合えなかったことについては気に病んでいない。その理由がないことを理性で納得してしまっている。理解できなかったことも、理解してもらえなかったことも、当たり前のことなのだから失望するには当たらない。別の道を行けるなら、それは幸いだ。

ただ、自分が父親を傷付けたことについて平気だというのは、必ずしも自分で思っている通りではない気がする。そのことについて、平気であるということに加害者意識を感じ

て、罰を求めているような口ぶりだった。

そして、そんな風にまた傷付けて、せつかく親しくなった人たちが離れていくことを怖れている……

僕はさらに考えた。どう答えるべきか。人の考えを察し、迎合できるようにしなければいよと言するのは簡単だが、それは正解とは言えない気がする。

僕の中に、帆影の悩みに答えられる言葉があるのか。

考えた結果——そんなものはなかった。

帆影を諭し慰めるだけの知恵も経験も、僕には全く足りていない。それを心中でたしかめると、体を起こした。帆影が不審そうに見上げる。

僕は膝で立ったまま彼女へ近付いていく。帆影は最初きよんとしていたが、僕が目の前まで来ると反射的にか半開きの両手を胸の前に上げていた。

「帆影」

「はい……？ …… …… あっ」

帆影の声を耳元に聞きながら、僕は彼女を抱き締めていた。背中と腰に手を回し、ぎゅつ、と少しずつ力を込めていく。

「帆影は自分を変えなきやいけないと思ってるのかもしれないけど、僕はそのままだって

いいよ」

言いながらも、火を噴きそうなほど顔が熱い。母親と妹以外の女性にこれだけ密着したのは初めてで、しかもカノジヨで、埋もれてしまいそうに柔らかいのだ。脳味噌が煮立っているんじゃないかというくらいに、とにかく熱い。

腕の中、胸と胸で感じる帆影の体は、それ以上に熱かった。まだ熱があるせいなのか、僕がそう感じているだけなのかは判らない。

「僕にとつての帆影はカンペキなんだ。帆影と会うまで、理想の女性像みたいのはあつた気はするけど、帆影を知れば知るだけ、型を取られるように変わっていった。結局、好きな物がベストになるんだと思う」

ふと、脇腹にささやかな感触を覚える。帆影の手が、こわごわといった風に僕の肋骨のあたりに添えられていた。弱々しく触れられているだけなのに、過敏になった神経は指の一本一本の細さを感じ取ってしまった、くすぐったい。

耳元で、帆影が口を開く。熱っぽい息が耳たぶを撫でて反射的に身をよじると、帆影の体もびくりと震えた。押し付けられた胸が圧迫されたせいかな、帆影は少し苦しうに声を出した。

「でも、なんで付き合いたいと思ったのか『よく解らない』って……」

そんな戸惑いに気を取られ一瞬なんのことも判らなかつたが、すぐに思い出す。保健室でそんなことを言った覚えがある。

「それも含めてだよ。正直、僕は帆影の考えてることとか、まだ解らないことが多いけど、でも、そこがいいんだ。解らないからいつも驚いて、面白くて、新鮮で、僕が見ているのとは別の世界を見せてくれる。

僕は、帆影を、理解できなくていいよ。

もちろん、解るようになったら気持ちいいと思う。どっちにしたって得しかない。だから……いっしょにいたいって思うんだ」

……………

しらばく、答えはなかつた。

部屋が静かになると、入れ替わりに外の雨音が聞こえてくる。弱いとも強いとも言えない勢いで、静寂を浮き出させるように部屋を隠微な音で満たしていく。

その中で僕は、ただ彼女の言葉を待った。あるいは、突き飛ばされて拒絶されるかもしれないとも思いつながら。

待ったのは、自分で感じたほど長くなかつただろう。ただ、返ってきたのは全く予想外の反応だった。

「……………う……………つ」

いや、短いうめき声で気付いただけで、もっと前から帆影は、泣いていたのかもしれない。

抱き締める力を緩めて彼女の顔を見た僕は、咄嗟に言葉を失った。初めて見る、帆影の泣き顔だった。

そう顕著な表情があったわけではない。そこはいつもと変わらなかった。ただ、両目から一筋の涙を流して、時折、短くしゃくり上げていた。

「帆影……」

距離が近すぎて、ささやき声になってしまった。帆影には聞こえたはずだ。涙を拭ぬぐおうともせず、ぼんやりと、でもなにか訴えるように僕の顔を見つめてくる。

帆影がなぜ泣いているのか、解ったふりはできない。そんな簡単に解ることではないのだろうと思う。帆影自身にだって。

しかし、人間がどういう時に、どうしてもいたい時に泣くのかは、さつき確認したばかりだ。

僕は改めて帆影の背中と腰に手を回して、ゆっくりと抱き寄せた。帆影は抵抗せず、やや小柄な体はすっぽりと僕の腕の中に収まった。お互いの体の弱い部分が押しつぶされ、

帆影の意味をなさない声が首筋にかかる。

声というのは案外に水気を含んでいて、濡れているものなのだなと思った。

気恥ずかしい、というレベルではなかった。なかったが、不思議と無視できた。

最初は努めて優しく、それから徐々に力を入れて帆影の体を締め付けていく。夏風邪を宿した帆影の体は、野蛮なくらいに熱を帯びていた。

「……………ちよつと、苦しい……………」

絞り出すような声で言われても、力を弱めはしない。

「……………痛いことはしないって、言ったのに……………」

これも保健室で言ったことだ。いつもよりほんのちよつとだけ感情的に、うらめしげに言ってくる帆影に、僕は正直になって答えた。

「ごめん……………それ、ちよつとウソかも」

「ウソ……………」

「うん。ほんのたまにだけ……………引つ叩ばたいてでも思い知らせたいと思うんだ。僕がどれだけ帆影を好きなのか」

もちろん、そんなこと本当にしたりしない。ただ、それくらいもどかしくなることもあ
るって話だ。

帆影がどう感じたのかは判らない。恐がらせたかもしれないと後悔したけど、でも、それまで弱々しく添えられていた彼女の両手が僕の背中に回されて、ぎゅっとシャツを掴んできた。

「汗臭くない、ですか……?」

「いや——」

と、反射的に鼻を鳴らしそうになってさすがにこらえたけど、この距離だ。帆影には気付かれてしまったらしい。

「っ……や……」

体の芯を弾かれたように身じろぎする。首の横で熱い息が弾けた。

「ごめん……」

僕は不躰を謝りながら、でも帆影を抱く力を強めて身動きを奪った。狼狽から膝を崩した彼女の脚の間に体を割り込ませ、さらに体を密着させていく。

押し付けた自分の体が、より柔らかい帆影の体を歪ませる。普通なら相手の体があるはずの場所を押しつけて入り込んでいく感覚に、背筋が震えた。

目の前には、真っ赤に染まった彼女の耳たぶがある。

見ているとなにか悪戯したくなっただけど、病人なのを思い出して、必死にこらえた。

——どれくらい、そうしていただろうか。

「もう……平気です」

少し鼻にかかっていたがいつも通り平静な帆影の声に、僕は名残惜しさを振り払って体を離れた。

改めて帆影の顔を見ようとすると、帆影はさつと顔を背けてしまった。そのまま枕元のティッシュを数枚つまみ取り、音を立てないようにしながら鼻をかんだようだった。

たつぷりと息を抜いた帆影が顔を上げると、そこにはいつも通りすんとした、帆影歩の顔があった。澄ましているわけではない。澄んでいる、表情^{かお}だ。

涙の跡だけが、赤らんだ頬にくつきりと残っていた。自分では見えないから消すこともできなかったのだろう。

帆影は僕の顔を見て、口を開きかけて、少しうつむいてからぽつりと言った。

「……新巻くんはやっぱり、痛くするのが好きなんですか……？」

「え……ごめん、そんなに痛かった!？」

「いえ……あれくらいなら、別に………だいじょうぶですけど………」

あわてる僕に、帆影は珍しく歯切れが悪い。半ば無意識のように乱れた寝間着の襟^{えり}を直

す仕草が妙に艶めかしく見えて、直視を惑う。

さつきまで触れ合わせていたせいかな、僕と帆影、肌と肌の間の空気が熱い。呼吸しているだけで肺が灼かれて汗が噴き出しそうだ。

……気持ち伝えたくて、勢いであんなことをしてしまったけど、お互いに落ち着いてしまうとただただ気恥ずかしい空気だけが残る。それなのに、立ち去ろうとすると躊躇してしまう。

ようやく踏ん切りが付いたのは、階下に映を残してきたことを思い出したからだ。思ったより時間を使ってしまっている。今頃は、床を踏み抜かん勢いで貧乏揺すりしている頃だろう。

「それじゃ……今日はもう帰るよ」

ゆっくりと重い腰を上げ、いとしま暇を告げる。それまでうつむいていた帆影が、はッと顔を上げた。

「あ……………」

それがなにか言いたそうな顔に見えて、僕は中腰のまま動きを止めた。

「ん……………」

「あ…………あの、今度、また、聞かせてください。新巻くんのこと。今日はわたしが聞いて

もらったので」

そう言われて、胸が熱くなるのと同時に思い出す。この家に来るなりいろいろあって、すっかり忘れていたバッグの中身だ。

「あ……そういえば」

と、取り出したのはA4サイズの紙束かみたばで、漫研のプリンターを借りて印刷した小説だった。

僕が差し出したそれを受け取りながら、帆影はぼんやりとまばたきした。

「これは……？」

「僕が書いたんだ……約束したろ、読んでくれるって」

言いながら、照れ臭さに目をそらさずにはいられなかった。だから帆影がどんな顔をしたのかは見られなかった。

「寝てるのが退屈だったら、読んで感想を聞かせてくれよ。」

でも……それを読んでも僕のこと解るってわけじゃないんだよな。作者と作品は切り離されてるんだから」

帆影に言われて戸惑っていたことが口を突いて出る。

帆影は少し宙を見て、それから静かに口を開いた。

「……『作者の死』という考え方がありません。

作品は世にある様々な文化の引用を織り合わせたもので、その情報の連なりが存在する意味は作者の意図を超え、受け手だけが決められるといったようなものです」

いつも通りの落ち着いた声に、安心を覚える。口がほころんだ。

「うん……まあ、僕には、そんな大層な意味は籠もってないと思うけど」

「それも、わたしが決めることです」

帆影は丁寧なつらに均した紙束を膝に置いて、きっぱりと言い切った。それから、「それにと、真つ直ぐに僕を見上げて続けた。

「作品を見る時には作者との関係は考えるべきでなくても、作者を見る時には作品との関わりは大切なのです。そこは似ているようで、いっしょにはいけません。

だから」

タイトルだけが載った一ページ目、少しかすれた印字を指でなぞり、僕のカノジョはふわりと髪を揺らして、頬を緩めた。

「約束、守らせてください」



その後、帆影の部屋を出て階段を下りてみると、映の姿はどこにもなかった。トイレだろうかと思ひ、手持ち無沙汰にスマホを起動させると映からメールが来ていたことに気付く。

『先輩の部屋にしけ込んで十数分、あんまりにも遅いので先にラーメン屋に行ってる。一番高いメニューにフルオプションで食べてるので、どうぞごゆっくり財布を持ってきてください』

僕は顔を蒼くして、急いで母屋のお祖父さんお祖母さんにあいさつを済ませ、妹の後を追った。

たぶん、映が思っているほど僕はお金持ちじゃないからだ。

かくして僕は、彼女の温もりを胸に残しながら妹の待つラーメン屋へと雨を踏み散らすこととなった。

そんなところで。

本日のライトノベルは、そつとページを閉じるのである。

The Hokage's L/RightNovel

Episode #6

Grasp

Fin.

エピローグ。

夢を見ていた気がするけれど、内容は思い出せない。

そんな平凡な目覚めをするほどに、その朝のわたしは平静だった。

カーテンの閉め切られた部屋の中は薄暗く、朝の来た証は枕元の時計だけ。横になったまま手探りして、目覚ましのアラームを切る。登校時間までには、まだいくらか余裕があった。

自分の額に手を当てる。昨日と違って、いつもの薄ぼんやりした体温だ。ぐっすり眠れたせいか、熱はすっかり引いてくれたようだ。

初夏の暑さに辟易して、浴室での読書に耽^{ふけ}ってしまったことから患った風邪は久しぶりに三九度を超える発熱をもたらした。昨日の午前中のことは、意識が朦朧としていたように思い出せない。お祖母さんが世話を焼いてくれて、学校への連絡もしてくれたということすら、よく覚えていなかった。

そして、これも覚えていないが、新巻^{あらまき}くんには欠席する旨^{むね}のメールを送っていたらしい。

そうしたら、この部屋まで来てくれた。

彼がお祖母さんに案内されて扉を開いた時、わたしは忘我の境にあった。——いや、それは修辞が大袈裟だ。適当ではない。正確には、とても寝ぼけていた。

薬を飲んでいたせい、熱に浮かされていたせい、単に眠かっただけか。ともかく視界がぼんやりとして現実感がなかった。そもそも、新巻くんが自分の部屋にいるという現実に現実感がない。しゃちほこばった彼の顔が、直前に見ていた夢と混ざり合った。

それから新巻くんは一度部屋を出て、お祖父さんと会っていたという。お祖母さんはわたしを着替えさせながら「なんだか苦労の多そうな子ね」と言って笑った。その通りだと思ふ。

新巻くんと出会ったのは高校に入ってから間もなく、文芸部の部室でのことだった。

それまでお祖父さんの家と学校を往復して、時々本屋や図書館に寄るだけの生活をしていたわたしは、お祖母さんの勧めもあつてなにか新しいことを始めようと思っていた。本を読むのに飽きることはなかったけれど、我ながら、日々細胞がしぼんでいくような味気なさを感じていたから。

部活動の説明会で「自由参加で特に決まったノルマもない」と言っていた文芸部は渡り

に船だった。それなら、体を動かすのが苦手でもコミュニケーションに失敗しがちなわたしでも、少なくとも足を引く張って迷惑をかけることはないだろう。

わたしは両親とすら上手く関われない人間だ。せめて、邪魔にだけはならないように生きない。

部長の汐崎先輩や神田川先輩はわたしを歓迎してくれた。汐崎先輩は受験で忙しくてあまり来られない人だったけれど、とにかく次代に部員を残せそうだと喜んでいて。一番熱心に活動していた神田川先輩は積極的に話しかけてきてくれて、話が噛み合わない時は適当なところで受け流してくれた。

今にして思えば、二人とも大人だった。文芸部という性格上のこともあってか、変わり者との付き合いに慣れていて、変哲なわたしとも折り合って面倒を見てくれた。

ここでならやっていけるかもしれないと思った。でも同時に、目下なのにお客さんとしてもてなされているような居心地の悪さも感じていた。

そんな風に思いながら部室に通い始め、数日経った頃に、新巻くんはやってきた。

その時わたしは、脚立に乗って棚の上の方から本を取ろうとしていた。

でも、入り口の近くだったのに注意が足りなかった。不意に引き戸が開いて、注意のそれたわたしは脚立を踏み外し、入ってきた人の上に落ちてしまった。

それが新巻くんだった。

尻餅をついて倒れた彼の懐にすっぽり入ってしまったわたしは、あわてて立ち上がろうとしたけど上手くいかない。からみ合った体勢から体を起こそうとしても、手首がくねって相手の腿ももの上を滑る。彼の体の中でぞわりとさざなみが走ったのが解った。

彼の膝に手を突いてようやく顔を上げると、今では見慣れた、あの生真面目でいつもなにかを探しているみたいな顔が目の前にあった。

息のかかるような距離で固まってしまったわたしに、彼は、

「あ、だいじょうぶ……？」

と、わたしよりも緊張したような声をかけてきた。

わたしはただ、うなづくことしかできなかった。受け止めてくれたことにお礼を言わなければいけなかったのに。

他の部員は新入生の勧誘のため出払っていて、留守番のわたしだけが部室に残っていた。どうやら部活を見学に来たらしい新巻くんを、わたしは先輩たちに言われた通りに引き留めた。他人になにかを要求するのは苦手で、嫌だと言われたらすぐに放す気であったのだが、新巻くんは素直に待ってくれた。

それだけでなく、わたしの取ろうとした本を代わりに取ってくれた。本棚から取り出し

た『薔薇の名前』の上巻を手渡す時、彼の手は小さく震えていたように思う。

わたしは、なんだか不思議な心地でその本を受け取ったのを覚えている。

なにかおかしかった。先輩たちに出会った時とは違う感じがした。

新巻くんは、わたしの話をよく聞いてくれた。

今と違って、一年生の頃は向こうから話しかけてくることはあまりなかった。部室で二人きりになることがあっても、ちらちらとこちらをうかがう気配はあるのに、何度も口を開こうとする気配はあるのに、なかなか声にならない。

それでいて、こちらから視線を向けると敏感に察して、ちよつと困ったような顔をしながら相手になってくれた。

「新巻くん」

「っ？ なに……帆影ほかげさん」

そんな人だったからかもしれない。わたしは解らないことや思い付いたことを、なんでも新巻くんに話した。酒々井しすいさんに聞いた話や、読んだばかりの本から考えついたことなんかを。

新巻くんはただ聞いてくれるだけでなく、自分の疑問や意見も出して、時にわたしの知

らないことを教えてくれた。お愛想ではなくて、自分の興味や知識につなげて話を発展させることのできる人だった。

わたしのおかしなところを受け入れてくれたり適当にスルーする人は他にもいたけれど、本気で向き合ってくれる人は、お祖父さんとお祖母さん以外では初めてだったかもしれない。

いや、初めてだとかはどうでもよくて、ただ、わたしは新巻くんと話すのが面白かった。表情豊かで、言葉の一つ一つに大きく感情を動かしてくれる新巻くんを見ているのが面白かった。

文化祭の時、新巻くんは小説を書いた。ごく短い、わたしとの雑談の中で出てきたアイデアを物語に仕立てた掌編だった。

いかにも書き慣れない生硬な文章だったけれど、読む人を迷わせず、伝えたい情報を一つずつ置いていくことに腐心した、とにかく親切的な作りになっていた。

地球人類滅亡後に地球を訪れた異星人が、遺された漫画やアニメから現地人の文明について考察するという内容だ。

その異星人は、本ばかり読んで世間知らずなわたしをモデルにしているように読めた。

地球の遺産を見てとんちんかんなことを考え、最後には「この『萌え』とは文明を生み出す脳の作用を指す言葉に違いない」と結論を下す。

それを讀んだ伊井坂いゐさかさんは「あははバカだなー！」と笑っていた。そのくせ、作者の新巻くんに抱きついて感激を表していた。伊井坂さんは人との距離感が近い人だけれど、あんな風に抱きついてるのを見たことは他になかった。

「いや、正直文章も構成もそんなに『上手い！』って感じじゃなかったんだけどさ、だからこそ自分の書きたいものを一生懸命、真剣に他人に見てほしいって気持ちで伝わってきたさ……勇気だと思うんだよね、それ。要は裸はだかむね踊りだもん。

あたし、ちよつとスランプってーか、自分の創作に悩んでるところだったから、なんかシンパシーでやる気出てきたんだよね。だから、つい乙女の慎みを忘れてね……」

と、これは、後になって伊井坂さんに聞いた話だ。恥ずかしいから新巻くんには言わないでね、と口止めされたので、約束通り新巻くんには話していない。わたしと伊井坂さんだけの秘密だ。

わたしはその作品を、文化祭の終わった夕方、改めて部室で読んだ。不思議な感覚だった。いつも部室で見ている新巻くんが書いた物語。わたしが織り込まれた物語。

二人で作った、物語。

わたしと新巻くん。印字された時点で作者は死んだけれど、わたしは読者として何度もそれを読むだろうと思った。

新巻くんに恋人としての交際を申し込まれたのは、二年生になってすぐのことだった。

「僕と……お付き合い、しない、ですか？」

正直に言うと、困った。よく解らなかったのだ。

それでいて嫌な気はしなかった。全然しなかった。好きか嫌いかで言えば、わたしは好きだ。新巻くんが好きだ。ふと視界に入れば目で追ってしまおうし、彼が文芸部を休んだ日はなんとなく気が重くなるし、お風呂から送ってしまった写真のことを思い出した夜はなんだか寝苦しくなった。

もちろん、お祖父さんやお祖母さんも好きだ。二人には感謝しているし、いっしょにいて落ち着ける人たちだ。でも、一番「面白い」のは、新巻くんという時だった。

新巻くんと交際関係を築く。人付き合いが得意とは言えないわたしにとって、それはまたとない人生経験を得るチャンスだ。新巻くんなら恐くないし、他の人には突飛に思われるわたしの話も聞いてくれる。わたしに欠けている体力もあって、部で力仕事が必要な時はいつも求める前に助けてくれた。

帆影歩あゆむにとって、すこぶる都合のいい人であることは間違いない。

ただ、それが恋愛感情なのかと言われると確証が持てなかった。

「それは恋人同士になる、という意味ですか？」

念のために確認すると、新巻くんは起き上がり小法師こぼしのようにフンフンとうなずいた。わたしは考えた。

まず第一に思ったのは、セックスは困るということだった。

わたしにはまだ子供を育てられる能力はないし、レクリエーションとしてのそれに対する欲求についてはたぶん、そんなに強い方ではないと思う（恋愛や性愛を扱った小説などの登場人物と比較した場合は、そうだ）。『カーマ・ストトラ』を読んでもほとんど意味が解らなかった。

しかし、少し考えて、その点についてはあまり心配なさそうだと結論した。

わたしは女子として無防備すぎると酒々井さんや妹さんに指摘されることがあるが、そんなことはない。不用意に男性の劣情を刺激すれば、暴行を被こわむる危険があることくらいは理解しているのだ。だから新巻くんの前でも不必要に肌をさらしたり品しなを作ったりすることはなく、きっと彼も、わたしを性的な目では見ていなかっただろう。

それ以外の意味での恋人というのは、なにをするのだろうか。創作の中ではよくデート

をしている。それなら好ましい気がした。新巻くんと二人で出かけるのはちよつと、楽しそうだ。

あとは喧嘩だ。創作のカップルは九割九分、喧嘩をする。相手を知れば知るほど、相容れないところも見えてくるわけだから、それは自然な流れだ。これは嫌だった。誰とだって争いたくはない。とはいえ、家のお祖父さんとお祖母さんも頻繁に口喧嘩をしているのにおおむね仲良しなのだから、過度に恐れることもないのかもしれない。

でも……遊びに行ったり喧嘩したりするだけなら、友達同士と変わらないだろう。それでもいいのだろうか？　そもそもなんでわたしなのだろうか？

新巻くんはよく、神田川先輩なんかとの会話の中で友達がいないと言っていたけれど、たとえば伊井坂さんとは仲良く見えた。

文化祭の後、伊井坂さんがよく文芸部室を訪れるようになったのは新巻くんがいるからだろうし、わたしが横で聞いていて理解できない趣味の話で盛り上がったたりしている。インターネットのゲームをいっしょに遊んだりしているようなことも言っていた。

だったら、伊井坂さんと交際すればいいのではないだろうか。

ちよつと想像してみると、上手くいくように思えた。新巻くんはにぎやかすぎる伊井坂さんを持って余して邪険にすることもあるけれど、それも親密さの表れのように見える。伊

井坂さんも、消極的なのに最後には構ってくれる新巻くんをからかうのが面白いようだ。

二人ならきつと、良い恋人同士になれるのではないだろうか。

そんなことを考えて、断ろうかと一瞬、考えかけた。考えかけて、ためらった。理由は明確でなかったけれど、断りたくない自分がたしかにいた。胸が重くなって、頬に寒気が走った。

っ……と、空^{から}えずきしそうな感覚に口元へ拳を添え、新巻くんを見ると、真っ直ぐにわたしを見ていた。他の誰でもない、わたしを見ていた。

解らない。

解らないけど、わたしでいいのだろうか。

わたしは、想いをそのまま口にした。

「よく解りませんが、それでよければ」

新巻くんは呆気にとられてまばたきした後、「……………OKってこと？」と訊き返してきた。わたしがうなずくと、ゆっくりと笑顔になって、ぐっと拳を握った。

そうしてそれから、また途方に暮れた顔になった。たぶん新巻くんも、恋人同士になったらその後どうするべきか、考えていなかったのだろう。

わたしと向き合ったまま、たっぷり数十秒も固まった後、

「……とりあえず、いっしょに帰ろうか」

と言った。どうにも忸怩たる、といった顔をしていたけれど、わたしが「はい」と深くうなずくと、彼は顔を真つ赤にしてはにかんだ。

新巻くんには可愛らしい妹さんがいる。今年の新入生主席の美少女という嘘のような出色ぶりで、活発かつ社交的な性格。文芸部で新巻くんや伊井坂さんと話す会話の端々から、友人の多さや先生たちからの信用も垣間見える。

けれどお兄さんのこととなると見境のなくなるくらいがあるようで、わたしは嫌われてしまっている。お兄さんの恋人だから、ということに加えて、わたしの性格が生理的なレベルで受け付けないことが原因らしく思われる。

新巻くんは気にしないと言いけれど、わたしは妹さんに近付きたかった。

妹さんはいわゆるロマンチストなところがあって、人間の意志や愛の尊さを信じている……少し、わたしのお父さんに似ているタイプの人だ。それでいて、わたしから逃げず、根気よく相手をして自分の意見や想いをぶつけてきてくれる。

特に、お友達の村瀬穂^{むらせ}穂^{かほ}さんのしていることを理解するためにライトノベルを学ぼうとする姿に、わたしは尊敬の念を覚えていた。

妹さんは、両親との関係を惜しみもしなかったわたしとは正反対の心を持っている。新巻くんの生活や趣味に口出しするのも、お兄さんを諦めない、放さないという強い想いの表れだろう。

わたしにはそういう執着が薄く、だから人が離れていくし人を傷付ける。

正反対の妹さんを知り、比較し対照することで、わたしはわたしを知りたい。そうすれば、柔らかくて優しい人間になれるかもしれない……

そう思う一方。それこそ自分のために妹さんを利用する卑劣な行為だと非難する自分もいる。いや、卑劣とは少し違うかもしれない。妹さん言うところの、冷血トカゲの行いだ。

妹さんだけでなく、恋人のはずの新巻くんのことも利用しているのかもしれないと思うこともある。彼の好意をいいことに甘えて、人間を、異性を学ぶための道具にしているのではないかと。

わたしはきつと、そういうことをしてしまえる人間だと、思う。

つい先日、わたしは体育の授業中に転んで脚を痛めた。その時、保健室で休んでいたわたしのところに新巻くんがお弁当を届けにきてくれた。

その前日、妹さんに人間性の欠如を指摘され、少しばかり悩んでいたわたしは、前から

気になっていたことを新巻くんに訊いてみた——どうしてわたしと恋人になったのか。

新巻くんはいろいろ考えた後、最後にこう答えた。

「だから、僕が帆影と付き合いたいと思った理由は……よく解らない」

その時わたしは、どうしようもなく不安になった。それはつまり、「もう興味がないから関係を解消しよう」と言われたのかと思っただからだ。

でも新巻くんは、むしろ改めて恋人関係の継続を願ってきた。わたしは安堵したけれど、そういうあやふやな日々がいつまで保つものなのか、不安が残った。

新巻くんは大きな人型ロボットが好きらしい。

伊井坂さんが文芸部室でプラモデルを作っていた日、わたしはその巨大ロボットを否定するようなことを言ってしまった。

なんであんな風にむきになってしまったのか、自分でもよく解らない。人が好きだと言っているものを真っ向から否定するなんて、態度が好戦的に過ぎる。

後になって、廊下で出会った妹さんがこんなことを訊いてきた。

「……あれ、もしかして嫉妬しつとしたんですか？ 兄が伊井坂先輩にばっかり構うから。この間も壁ドンしてたし」

妹さん自身も新巻くんと伊井坂さんの関係には釈然としないようで、ブツブツと続けたが、それはそれとして。

嫉妬。

わたしにそんな感情があるだろうか。

ある種のムクドリのメスは繁殖期、オスと巣を求めて既に成立している番つがいのメスを殺して、巣とオスに乗っ取ろうとすると聞いたことがある。ムクドリのくちばしは長く鋭く、恋敵の眼窩から脳へと執拗に突き込まれ、頭蓋の中身を赤い泥粥どろがゆに変えるという。

それと同様に、ロボットの眼（カメラ？）にくちばしを打ち込みたくなったのだろうか。自分がそこまで誰かに執着しているということに、現実感はなかった。

でも、新巻くんに誘われて巨大ロボットの立像を見に行つて、そこで新巻くんと同じ時間経過として、わたし専用のサイン本を持つて帰つて。

利己心なのか、社会的な強迫感なのか、喪失への恐怖なのか、あるいは性欲なのか。それは判らないけれど、わたしは新巻くんと離れたくないのだと、そう思った。

——そんな日々の中で、わたしは風邪を引いた。

必然だったのかもしれない。最近、前にも増して入浴時間が長くなっている。タブレッ

トで本を読むせいもあるけれど、その本の内容も頭に入りづらい日があった。ふとした時に別のことを考えてしまう。

それで梅雨寒つゆざむの気候にさらされ、わたしの弱い体はあっさりダウンした。

そうして伏せている時に、新巻くんは来てくれた。

わたしが着替えている間に、わたしの両親のことをお祖父さんに聞いたのだという。お祖父さんは決して無愛想な人ではないけれど、無駄口をする人でもないものでちよつと驚いた。初対面の相手に家族の話をするとは思わなかった。

この家庭がコンプレックスになっているかと訊かれれば、答えは否だ。不都合のない生活をさせてもらっているし、わたしが怠惰にならない程度に厳しくしてくれる。不満を持つ理由がない。新巻くんにも他の人にも、特に家庭環境を隠してはこなかった。意味もなく言いふらすことでもなかったけれど。

お祖父さんがなぜ話したのか、真意はよく解らない。とにかく新巻くんは、それまでわたしに聞こうとしなかったことを謝ってきた。

新巻くんに請われて、わたしは最近なにを迷っているのか、なにを不安に思っているのかを話した。つまり、新しく得たものを失いたくないと思ったら、過去になにも得られなかった自分が怖くなってきたという話だ。

そうしたら、抱き締められた。

新巻くんは時々、そういうことをする。机の下で急に足を踏まれたこともある。手をつないでみたら急に力を詰められたこともある。その度たびにわたしがどれだけ戸惑っているか、新巻くんはきつと知らない。

戸惑うのは新巻くんに対してばかりでなく、自分の反応に対してもだ。

その時もそうだった。

熱で気だるかった体の神経が急に目を覚まし、新巻くんの喉が震わせた空気をほとんど直接に受け取る鼓膜が炭酸の弾けたようにぞわぞわした。混乱しながらも力が抜けて、それでも意外なほど強い新巻くんの腕の中に閉じ込められた。

逃げられないわたしに、新巻くんは、わたしを理解できなくてもいいと言った。理解できない相手だから発見があつて、だからいつしよにいたいと言った。

それはたぶん、わたしも同じだ。新巻くんとわたしは違ったところが多くて、わたしは伊井坂さんのように彼の理解者にはなれないかもしれないけれど、だからいつも新しい場所を見せてもらえる。

と言って、その時のわたしは頭でそう考えたわけではなかった。ただ、自分でも気付かない内に泣いていた。あの時は泣けなかったのに、泣いていた。

その涙が新巻くんの言葉に対してなのか、不器用な抱擁に対してなのか。それはよく解らないし、きつとどうでもいいことなのだと思う。

とにかくわたしは涙を流した。

以前にわたしは、人が泣くのは、赤ん坊の時に泣けば世話してもらえるシステムを覚えて、大人になっても苦しい時、悲しい時に反復しているからだと話した覚えがある。新巻くんも覚えていたのだろう。

わたしが泣いているのに気付くと、彼はわたしを抱き寄せて、一段と強く、密に、体を重ねた。最初はそれこそ子供をあやすように優しく、それから少しずつ強く、引き付けてきた。

特に厳いつゝい印象もない新巻くんだったけれど、わたしとは全然違う、男の人の体をしていた。骨格は工具のようにがちりしてわたしを押さえ込み、肉付きは鉋物めいてわたしの体に自分の形を押型おしがたする。

それが解るくらいに、直接に比較できるくらいに、わたしの体は新巻くんを重ねられた。他人の心臓の鼓動を自分の肌で感じたのは初めてのことだったかもしれない。

苦しいと訴えても力を緩めてはくれなかった。熱の籠もった息が喉に詰まったのは背中を圧迫されたせいなのか、風邪がぶり返してきたせいなのか、それとも別の理由なのか。

判らなかった。でも、そういう熱^{いきれ}を吐き出すことには抵抗があった。それは、恥ずかしいことだ。

それでも息苦しさと全身から噴き出す熱のむず痒^{がゆ}さに体をうごめかすと、自分に向けられている力の強さと別の肉体の意志をこれでもかと感じ取ってしまう。自分の体の内側がこんなにも臆病だったのかと脚が震えて、文字通りに足搔^あいた爪先がシートに絡まった。

新巻くんがそういう無理矢理な仕方をする人だとは思っていなかった。でも、不思議と恐くはなかった。「ひどいこと」はされないと思つたし、それならば、抗つても暴れてもどうにもならないという状況は、いつそ気が楽になるような心地すらした。

絶望や怖^{おぞ}気^げに似て、でも熱いくらいなもの背筋に沿って流れ落ちて、力が抜けて。

わたしは涙が止まるまで、新巻くんに身を預けた。

その間、二人とも言葉を発さなかったけれど、体の中で響く鼓動が窓外の雨音を忘れさせた――

……あの時のことを思い出すと、風邪が治ったはずの今も体中が熱を持ってくる。まさにこの布団の上で、わたしは新巻くんと少しばかりの時間を過ごした。

でも、わたしがこの作品から感じた面白さは、ほとんど全ての人には無価値でも愛好者にとつては大きな価値を持つ「宝」を見つけ、サルベージするという構造そのものだった。

自然と、妹さんが文芸部室に持ち込んで、みんなで検討したライトノベルに関する四方山話が思い出された。

おっぱい、後宮^{ハーレム}、異世界、性別、巨人像、作者と読者。

娯楽作品の一要素として消費されていくテーマの中にも、観点によっては思わぬ深みがあった。それまで特に興味がなかったライトノベルという書架が秘めた含蓄を、わたしは新巻くんや伊井坂さん、妹さんと出会うことで見つけることができた。

そういうことへの驚きが、発見が、喜びが、この原稿からは読み取れた。新巻くんが意識して込めたものかは判らない。でも、新巻くんだから書けた作品だと……いつしよにいたわたしには、思える。

立ち上がって原稿を机の上に置き、カーテンを開く。真っ白い陽光に目を細めながら窓を開けた。

久しぶりの快晴だった。二階の窓から見上げる空はどこまでも青い。空一面の青頭巾^{あおずきん}だ。

早朝の風が火照っていた頬を心地良く冷ます。ずいぶんと寝汗をかいたようだし、学校に行く前に軽くお風呂に入らないといけないだろう。

でも、その前に。

わたしは新巻くんの原稿を机の上でトントンと均ならし、バッグの中にしまいこんだ。

——手早く入浴したつもりだったが、学校に着いたのは始業ぎりぎりだった。湯船に浸かりながら新巻くんにメールするのに、文面を考えるだけでだいぶ時間をかけたのが悪かったらしい。

『お疲れ様です。帆影です。今日は登校します。』

結局、送ったメールの本文はそれだけだった。これ以上を書こうとすると延々長引きそうで、続きを何度も入力しては消して、結果こうなった。

新巻くんからはすぐ返信があった。安心したことと無理しないでほしいということ、必死に言葉を選んだ感じを書いてあった。

教室でも酒々井さんや先生に体の具合を案じてもらった。しかし、病み上がりだということにむしろ、近來ないくらいに好調だ。だから肩を回して元気をアピールしてみたのだが、逆に心配されてしまった。挙動不審に思われたようだ。

休み時間や昼休み、何度か教室を出たが新巻くんには会わなかった。教室を訪れて昨日

のお札を言うのが筋なのだろうけど、急に訪ねていったいいものか判じかねた。

第一、どんな顔をして会えばいいのか解らない。

そのまま時間は過ぎて、放課後がやってくる。幸いにも体調不良に揺り戻しがくることなく、念のため持ってきた風邪薬も使わないで済んだ。

だから、ホームルームが終わったらいつものように部室へ向かった。特殊教室棟の片隅、使い古されてすっかり色褪せた一室。

鍵は全部で三本。部あらかまきくん長と副部長わたしが一本ずつ管理していて、後は顧問の先生が職員室で保管している。部員が二人きりのせいで、関係者全員が鍵を持っているという奇妙なことになっていた。

例によって新巻くんはまだ来ておらず、鍵を開けていつもの席へ座る。もう何度腰を預けたか知れないパイプ椅子のきしみが不思議なほど落ち着く。

隣の漫画研究会はスロースタートなので、今はただ静寂が部屋に満ちている。小さな頃から暗い書庫にいる時間が長かったせい、独りでいるのも静かであるのも苦にならない。ここにも四方に本があり、読む物には困らなかった。

でも。

今日は本を開く気にならなかった。

なにもせず、一年と少しを過ごした部屋を観察して、ちよつと暑くなってきたから窓を開けて換気して、彼が来るのを待った。退屈を感じる余裕はなかった。

「帆影っ」

間もなくして現れた新巻くんは、わたしの姿を見て顔を輝かせた後、ゆっくりとうつぶすいていった。

「……………昨日は……………お邪魔して……………」

窓外が夕日に染まるにはまだ早い。けれど、新巻くんの頬はあつと言う間に赤く染まっていた。

昨日、わたしの部屋であつたことを思い出しているのだろう。そう思うと、わたしの胸も跳ねた。

「いえ。来てくれてありがとうございます」

それなのに、自分でも違和感を覚えるくらい平静な声が出た。この部室と新巻くん、環境と習慣の賜物たまものだろう。

新巻くんも、それで少しは緊張が解けたようだ。いつもよりはぎこちなく、でもいつもと同じように、わたしの隣の席に座る。

いつもと同じはずなのに、わたしは自分の左半身がぞくりと震えるのを感じた。今、隣に座っているこの人が、昨日はあんな風に自分を抱き締めたのだと、体が覚えていたのかもしれない。

ひよつとしたら、二人きりになるなり同じようなことをされるかとも思ったが、特にそういう気配はない。新巻くんは、風邪が治って良かったとか、お祖父さんとお祖母さんによろしくだとか、今川焼きを手土産にするチョイスに呆れられてなかったかだとか、主に家のことを話しかけてきた。

そのことに返事をする内に、わたしはすっかり力が抜けた。リラックスできたというこどももあるし……少しだけ、拍子抜けしたということでもあった。

病み上がりを気遣ってくれる言葉に答えている内に、段々と新巻くんの声も小さくなって、ついには黙ってしまう。新巻くんは新巻くんで、なにを話しているか解らないのだから。昨日はいろいろあったから。

部屋が静かになったせいで、わたしの息を吸う音がくつきりと聴こえた。

——吐き出す息に乗せて、頭に溜めてきた言葉を声にしていく。

「新巻くん」

「? うん」

「昨日もらった小説、読みました」

「あ……………どうだった？」

「序盤の設定がいっぱい出てくるところが冗長で、ちょっと読みづらかったですが」

「そ、そうだよな……………あそこは自分でも——」

「でも、楽しいお話でした。ストーリーの構造はシンプルで、でもトリッキーで、なにが起こるか解らなくて。最後、やっと帰れるとなった時に巡視船へ拿捕だほされるシーンは緊迫感がありました」

「う……………ありがとう……………」

「ところで、ゴーレムの話です」

「うん……………え？ ゴ、ゴーレム？」

照れくさそうにうつむいていた新巻くんが、面食らったように顔を上げる。

ゴーレムというのは、ユダヤ教の伝承に出てくる、土塊つちくれで出来た人造人間のことだ。

「ユダヤ教の聖典、バビロニア・タルムードの『サンヘドリン篇』には、カバラの基本教典の一つ『創造の書』を研究した学者が、その成果として子牛を創って食べたとあります。子牛のゴーレムですね。

ただ食料にしたばかりでなく、神を模倣して生命を創る技術を学んだことへの、確認や

祝いの意味があつたのでしよう」

新巻くんは話の流れに付いてこられていないようで、額に手を当てて、まず思い浮かんだであろうことを言ってきた。

「いつも思うけど、よくそんな話を知ってるな」

「新巻くんがロボットが好きだということだったので、ちよつと調べてみました」

ロボットの語源は、カレル・チャペックの書いた戯曲『R・U・R』に登場する人造人間を表す造語だ。ここで言うロボットは生体部品を使った、人間のコピーのような存在で、労役を課され時に暴走するという意味でゴーレムに通じる存在と言える。

「それは……なんか、ありがとう」

新巻くんは、なにか不意を突かれたような顔になって、それからゆつくりと頬を緩めていった。

その素直な顔に……ちよつと喉が詰まって頬の熱くなるような感覚があつたけれど、そのまま話を続けた。

「作品を作るということは、子牛のゴーレムを作ることと似ているかもしれません」

「……と言うと……」

「読んだことを実践して、自分で作ってみるってことか？」

少し考えてから答えてくる新巻くんは、わたしはこくんとうなずいた。

「はい。読者が作者になる。世界を学ぶことによって人間に成った人間が、人間と世界を描く。それが物語。読者と作者、不正確なコピー機を繰り返して使うことで少しずつ変化していく世界の観方^{みかた}です。

物語を書くということにはきつと、自分自身を確かめ、再認識するという意味もあるのだと思います。物の見方、考え方、感じ方、希望と絶望。きつと直喩では語れない、いろいろなこと。それらを整理して、登場人物に託して動かしてみ、検証する」

書いた当人は、困ったように後頭部を搔^かいていた。

「あー……正直、そこまで考えてなかったけど……でも、そうか。仕事でもないのに物語を書くっていうのには、そういう意味があるのか」

「作者は書くことで死んで、自分の創ったものから自分を再生して、また進んでいくのかもしれません」

そこで言葉を切って、わたしは椅子ごと新巻くんに向き直った。

わたしの言ったことを咀嚼^{そしゃく}するように口へ手を当てていた新巻くんは、わたしの様子に気付いて緊張した顔になり、同じく椅子ごとこちらを向いてくれた。

新巻くんの方が背が高いので、向き合うと少し見上げるようになる。斜め上に眺める、

何事かと警戒するような彼の顔へ、わたしは言った。

「新巻くん」

「うん……」

「新巻くんと恋人になってから、わたしはなんだか悪いような気がしていました」

「悪い……？」

「はい。妹さんにも言われましたが、わたしはただ、優しくしてくれる新巻くんに甘えて利用しているだけなのではないかと」

「そんなこと——」

「わたしはもう要らないと両親を拒んで捨てた人間です。だから、新巻くんというのも、都合良く自分の弱い部分を守ってもらいたいからなんじゃないかと思うと、自分が嫌になることがあります」

そうして、そんな片利共生的な人間なら早晚、誰からも、新巻くんから見捨てられてしまうだろう。それが怖かった。わたしがお父さんたちを捨てたのかお父さんたちがわたしを捨てたのか、今はもう判らない。

でも今は、両親と別れたあの時とは違う点もある。

「帆影……」

目の前の新巻くんは、生真面目に諭してきた。

「帆影の家のことは、僕にも偉そうなことは言えないけど……でも、帆影は果穂ちゃんを探すのを手伝って、あの子を助けてくれただろう。自分で思ってるほど冷たくないよ」

「それだって、新巻くんや妹さんに良い印象を与えようとしただけかもしれない」

「そんなのは、でも……みんな同じだよ」

新巻くんは、もどかしそうに宙を手振りでかき回した。

「心の話をしてくれたじゃないか。良いことをするのを得だと思おう人は、良い人なんだよ。

それに、動機で言ったら僕だって——……」

？ 言いかけて、なにか耐え難いように下を向いて、それから、何事か観念したように、新巻くんは続けた。

「……僕だって、帆影のことが気になりだしたきっかけは、最初に抱き留めた時にすごく柔らかくて、すごく良い匂いがしたって………そんな感じなんだから。」

と言うか、きっかけだけじゃないのかも」

「っ………」

咄嗟に。

返事ができなかった。

そんなわたしの反応をどう取ってか、新巻くんは情けなさそうに床へ言葉を落とす。

「こつちこそ、不純でごめん……………」

寸前までわたしを慰めようとしていた人が、ひたすらいたたまれなさそうに頭を下げている。

……………

少し、笑ってしまったかもしれない。お祖母さんの血だろうか。お祖母さんは良く笑う。わたしは、静かに口を開いた。

「動機はともかく」

「え……………」

「新巻くんは、新巻くんとわたしの関係をどう思いますか？」

「関係……………それは……………うん、悪くない——いや、上手くいってると思うし、続けたいって思ってるよ！ ……僕は」

前のめりに言ってくる新巻くんに、わたしはまた、うなずいた。

「わたしもです。わたしが新巻くんといっしょにいる理由が利己心だったとしても、新巻くんの理由が……………えと、肉欲だったとしても」

「肉欲って言わないで……………」

新巻くんの抗議はあえて無視して、続ける。

「それでも、わたしたちの作った関係が『良いもの』なら、わたしはそれを理由にわたしを認められる気がします。

今日は、それを言いたかったんです」

自分で自分が本当に嫌いなのか、失敗だと思うのか、それを知るには自分の作ったものを見ればいい。ゴ^ロボ^{ット}レムの伝説がそれを教えてくれた。

そして、作ったものの価値には作者の意志など介在しえないという考えを、わたしは支持している。

「それって……」

新巻くんもピンときたのだろう。

でも、言われる前にわたしが身を乗り出して、彼の胸に頭を付けた。昨日感じた通り、見た目よりもずっと硬くて厚い胸板だった。

今朝は念入りにシャンプーしたので、悪い匂いではないはずだ。

言葉を失った新巻くんに、これからもよろしくお願ひしますと、そんな想いを込めて口を開く。口の中の空気は、心なしか暖まっていた。

「はい——」

暖かい空気は、上の方へ向かっていく。

だからわたしは、空の方へ殺しの言葉を放ったのだ。

「作者の死ですよ、新巻くん」

The Hokage's L/RightNovel

Book #2

The Killing of the Author

Fin.